
姫の従者は魔王様!?

るる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姫の従者は魔王様！？

【Zコード】

N3170U

【作者名】

るる

【あらすじ】

ある日、一国の王女である『姫』は、魔族の者によつて連れ去られ。

魔王の手に落ち、魔王城に閉じ込められてしまった。

そして、無力で非力な姫は、唯々、強き勇者が現れるのをじつと待つていた……

だが、真実は違つた！！

姫は生まれ持つた狂気な程の強力な武力で一人、成し遂げた『魔

王城占拠！』

そして姫が願う野望は「自分より強い男と結婚する」と、何とも傍迷惑な夢。

姫は自分より弱い男と結婚したくないが為に、魔王城に立て籠もり、自分より強い男が現れるのを待つ計画だったのだ。

姫を助ける為に魔王城に集まる猛者達。

そして、その救出対象にボコボコにされて行く。勇者フルボッコファンタジー

第一話『新・魔王誕生ー?』（前書き）

この小説には変態なビギナが多少登場しますが、作品にはなんら問題は御座いません、どうぞ安心してお読みください。

尚、誤字、脱字、誤変換などありましたら感想の方で「指摘いただけると幸いです。

それ以外にも言葉の使いまわしについて間違っている所があれば是非教えてください。

前置きが長くなってしまったが、このように作者は悪ふざけが過ぎる所があります。程よく呪いてあげて下さい。確實に凹みます。

第一話『新・魔王誕生!-?』

第一話『新・魔王誕生!-?』

「魔王様、そのモンスターには水属性は効きませんよ」

「おお、そうであったか。なら封魔剣で行くか」

「流石は魔王様、それは妙案です」

「やつであるつー。俺はセンスが良いからな～」

ガハハハハと大口を開け、携帯ゲーム機から顔を上げると、そこには、やや呆れ顔の姫が居た。

「あんた達、何をしてるの?」

心地えも凍らすほど冷たい田線が俺達に当てられる。

そんなじみを見るような田で見なくても……

「ああ、これが? これはな。

昔据え置きで出てたゲームの携帯ゲーム機版の、新作ゲームの…

…

「そんな事は聞いてないわよ…… なんでこんな所でゲームをして

最後まで言おうとしたが、姫が怒声でそれを遮られた。

るのよ！――

「えー、今つてお昼休みだから、自由にしてて良いって言つたのは姫ちゃん」

その言葉に姫は肩をフルフルと震わせていた。

「そんなことはどうだつていいのよ！――

何で魔界トップとその補佐が仲良くゲームしてるのよ！――

他にやることが有るでしょうー。魔法の練習とか、私を倒す為に策を練るとか。

てかそれより、何でそんなゲーム機があるのよ！――

「だつて、姫と戦つてもどうせボコボコにされるだけだし。

あと中ボスと小ボスとは小学校からの付き合いだし、仲良いのは当たり前で。

それに中ボスには頭脳で負けて、小ボスには力で負てるからな。

ああ後、このゲームは先月から、アゾンで予約しておいたんだ。最近では『発売日に届かない』とか言われていて、やや心配しているが、

ちゃんと届いたぞ！―― 流石はアマゾン

姫は、はあ……とため息を一つ吐き、俺達の近くに腰を落とした。

「前々から思つてたんだけど、あんた達つて何で人間界にいるのに悪さしないわけ？ 普通するでしょ、人間より強い種族に生まれたんだから

「魔王様はゲームが買い易いから人間界に来たみたいなのですか

ら、

「あつ、魔王様そこ、ピッケル使えますよ」

「あつ、そつかここでも採掘出来るのか……
別に俺だって魔界にアゾンが配達してくれれば、人間界には来なかつたぞ」

「お前だつて、俺達魔族を利用して、ここにいるのだから、結果的には助かっているだろ?」

「それはそつだけど、貴方達の方が力も上なのだから。
普通、人間界を手に入れてやるぜー的な事をするんじやないの?」

「どうせ人間界を恐怖に陥れても、勇者とか現れて、俺が殺されるだけだし。

まあ平和に過ごしていてもこんな事が起きたから不思議だけどな。

あつ……中ボス、肉忘れたわ、くれよ」

「あれほど装備品のチェックを促したのに、また忘れ物ですか……
そうですね、確かに歴代の魔王様は、皆

『世界を我が手に』を掲げ、人間との争いをしていましたが。
私たちの主である。

現・魔王様は、その様な事に囚われる事無い、柔軟な発想をお持ちのようですし」

「俺達の心配より、姫はどうなんだよ? 現・国王の『娘』である、お前が、身勝手な理由で城を離れていいのか?」

姫は一瞬顔を伏せ、短くため息を付くと、再び顔を上げた。

「お父様が決めた男と結婚するなんて嫌よ。

私は、私より強い男性としか結婚する気は無いわ」

……この女より強い男は何処に居るのだろうか？

それに、魔王軍を一人で壊滅させるような女が、あの肥え太った国王から生まれるなど、誰が予想したか。

「それに、魔王城に居れば、各国から、魔王を倒すべく、沢山の猛者が集まるはずよ。

それにお父様は、『娘を救い出した者にを婿に』と発表したわ」

確かに国王は、娘を助け出した者を婿にと発表しているが、この王は、その娘が魔王城を指揮しているのだと知っているのか？

「魔王城に勇者を集める為には魔王である、貴方に魔王ぼく居て貰わなくては困るのよ。

そんなゲームにかまけてもらつては困るのよ」

「ほつほつ、本格的にお前が魔王に見えて来たな。おつやつと死んだか、お疲れ～」

「これで魔王様の最強火事場装備が出来ますね」

「ああ、お前のおかげだ、感謝している」

「あんた達は、私の話を真面目に聞いているの？」

低く冷たい声が聞こえる、その声に俺達が顔を上げると、姫は満面の笑みを浮かべていた。

ピリピリと空気が歪むのを肌で感じる、本能が逃げようと俺に言つているような気がする。

「……死ね」

姫がそつ短く言つと、俺達の携帯ゲーム機が物凄い爆音と共に吹き飛んだ。

ああ……俺のプレイ時間五百時間……

「魔王様、私は千時間です」

中ボスが悲しそうにそつ眩いで、イスから崩れ落ちた。

「ふん、私の話を真面目に聞かないからよ」

改めて、こいつが『最強』である事を実感した……
こんな奴なら世界征服も容易いかも知れない。

一週間前……

!?

凄まじい爆音と共に、また一つ、城の関門が破壊された音が耳に届く。

「今の音は何処からだ!?」

近くにいた中ボスに今の戦況を聞くと。

「はつ！ 第二ゲートも突破されました！ サキュバス部隊を迎撃に充てましたが、連絡は途絶。上層部は全滅と判断し、第三ゲートを封鎖しましたが、突破されるのも時間の問題かと……」

クソッ！ 人間共め！ 我らをこの世界から根絶させようというのか！

明確な悪が無くなれば、次に起るるのは人間同士の争いだと言うのがまだ分からんのか！？？

「敵の規模はまだ把握できないのか！？」

「はい、敵の進行速度から竜騎士（ドラゴンナイター）などの移動力に長けた部隊だと、皆は予想していますが。

どう考へても、突破力が異常です。

こんな部隊が人間共にあるとは聞いていません！」

「聞いていなかろうと、現に存在しているだろうが… 第三ゲートに残存部隊を全て終結せり！ 私もすぐに向かう」

「はつ！」武運を『魔王』様

魔王の一一番の親友であり、頼れる部下である、中ボスが背中を見送る。

彼には私が倒れた後の、後任を任せである、後の事は中ボスに任せおけばいい。

撤退も彼が指揮してくれるはずだ。

「第三ゲートまであとどれくらいだ？」

「『』のペースだと一分ほどです」

部下の中で一番、力に長けた小ボスが私と共に第三ゲートに待機している、部隊に合流に向かう。

と、その時。

！――！

爆音と共に第三ゲートが崩れ落ちる音が耳を劈いた。

すぐさまゲートに到着したが、そこには有つたのは、瓦礫の山と今ある魔王城の全戦力と行つていいであろう部隊の山であった。

「ふん、遂に真打ち登場つてわけね。待ちくたびれたじゃない」

黒煙に包まれた向『』から、澄んだ声が聞こえる。

「魔王様！　お下がりください、『』は私が時間を稼ぎます、その内に逃げてください」

「現・魔王である、この俺に逃げると言つのか！　お前たち有つての俺だぞ、王がお前達を守らなくてどうするー？」

「魔王あつての私達ですー！　王がいなければ私達は存在すら意味がありませんー！」

「……分かつた、だが死ぬな、これは命令だ！」

魔王はそれだけいい、小ボスを残し、全速力で中ボス達の、この事態を伝えに向かった。

「話は付いたかしら？」

「随分と余裕ですね？　まさか貴方だけでこれだけのモンスターを倒したというのですか？」

「そうだとしたら？」

黒煙が晴れ、そこから現れたのは赤髪の少女、まだ十五、六才と言つたところか、

幼げに見える少女の容姿には似つかわしくないほど大きな鎌を腕に持つていた。

一人の人間、それも少女がこれだけの事をやつてのけたと言つのか……

「貴方がそれだけの力を持つていたとすれば、どうやら私は生きて帰れそうにありませんねっ！」

小ボスはその言葉を最後に、単身、その少女に突撃を掛けた。

「ぎゃあああああああああああああ

魔王の後ろから小ボスの叫び声が耳に届く。
その声に一瞬、足を止めるが、再び走り出す。

「あの小ボスがもうやられたと言うのか、予想以上の戦闘力らしい
な　それにあの声、あの声は確か……、」

「魔王様！！」

その声にすぐさま足を止める。

「魔王様ご無事でしたか！！
悪いお知らせがあります。

上層部の方々が予備隊を引き連れ魔界へと撤退を開始しました。
私も止めはしましたが、彼らは、魔王様が王座から離れた時点で、
『魔王様』の権限は無効になつたと言い。制止を振り切り逃亡しました

「所詮は人間界に金儲けに来た連中だ、放つておけ。それよりもだ、

俺は先ほどの情報を中ボスに報告する。

「敵は一人と言つ事ですか！？」

「ああ、おそらくそうだ。それ以外にも気になることがある。

俺の聞き違ひだといいが、あの声は確か『現・国王』の……

突如、後ろから届いた声によつて話が遮られる。

「遂に追いつめたわよ、『魔王』様」

その声に俺達は振り向くと、まるで大量の返り血で染まつたかのような赤色の髪に大きな鎌を持った、まるで死神のような少女が立つていた。

「貴方を倒せば、魔王はいなくなる」

「貴様！　俺を倒せば、次に起きるのは人間同士の争いだぞ！－！－！－！－！」

「ええ、分かつてゐるわ、だから貴方には魔王を続けて貰うわ、ただし最高権力は貴方の物では無くなるわ」

その言葉に俺達は驚愕する。

俺に魔王を続けて貰う！？　どうこいつ企みだ？　何の意味がある？

「　では、その次期最高権力者とは誰だ？」

魔王の言葉に少女は不敵に笑い。

「　この私よ！－！」

少女はそれだけ言つと、田にも止まらぬスピードで俺達の懷に入り、

中ボスの鳩尾に鎌の柄頭を当てた。

その攻撃で中ボスは慣性の法則に従つて後方に吹き飛んだ。

「中ボス！……」

魔王は慌てて中ボスに近寄り、状態を見た。

どうやら意識を失っているだけで、死んではないようだつた。

「殺してはいないわ、私は有能な魔族は殺さないわ、私が使えない
と判断したら死んでもらうけど」

「では、他の部下達は何故殺した！？」

「貴方の部下も殺してはいないわ。殺していたら貴方が味方になら
ないもの」

味方！？

この城の最高権力を手に入れて、それだけでは飽き足らず、部下
や俺さえも手に入れようと言つのか！？

そんな事をして一体なにをしようと言つのか！？

「貴様の目的は何だ！」

「さつきも言つたでしょ、この城を貰つわ」

「この城だつたらお前にくれてやる。だから部下だけでも解放しろ」

その言葉に少女は、困った顔を浮かべながら腕を組みをし、しば
し考えた。

「いいわ、貴方と、そこに転がっているの、これに先ほど戦った少
し骨のある奴。

彼らとそれ以外に城を維持する為に最低限必要な人材以外は解放するわ。

それで満足？」

こんな一〇年も生きていらない人間の子供に良い様に使われる、俺達が一体なにをしたと言うのだ。
だが、今はその提案に乗るしかない。

卷之三

「分かった、私は今日からお前の従者だ。お前に従おう」

「あはははははははは、私の従者が『魔王』とはね！！ 本当に面白いわ」

この女……悪魔だ。

膝を折り、『現・魔王』でありながら、何も抵抗できない、自分の無力を痛感する魔王だった。

第一話『新・魔王城！？』

第一話『新・魔王城！？』

「あんたには『魔王』成分が足りないのよ」

姫が魔王に向かつて指を指し、自信満々で足りない事を指摘する。

姫は、人に指を指してはいけないと教わらなかつたのか？
でも俺は魔族だから人ではないけど……

「まず、その格好！ 何でジャージ姿なのよーー！」

「貴様！ いくら俺の主人だからと言つてもジャージの悪口は許さ
んぞ！」

その言葉に姫は一瞬怯むと

「何でそんなにもジャージに熱い思いがあるのか分からぬいけど、
この際ジャージの事はいいわ」「
だけど何でそんなにも仲間思いで心優しいのよー！」

「國民有つての王だ、下々の者を大切にしなくて何が王か」

その言葉に中ボスや小ボスを含めて部下は、魔王に拍手を送り、
中には涙を流す者もいた。

「うひ、それはそつだけど。魔王つて冷酷なものでしょ！ 何でそ

「つまで歴代の魔王とずれがあるのよー。」

「まあ俺は俺だし、皆に優しくするのは良い事だろ？』

「だけどあなたは良い人過ぎるのよ。何で趣味が『お菓子作り』なのよ！

魔王の癖に、趣味が可愛すぎなのよー！ 少女かアンタはっ！』

』

「いえ、姫様、魔王様にはお菓子作り以外にも、素晴らしい趣味があるのですよ』

今まで魔王の隣でじっと話を聞いていただけの中ボスが、突如、口を開き、言った。

「他について何よ』

「手芸もこの城のメイドの誰よりも得意です。

この私のスーツのボタンも魔王様が買ってくださった後に、自らボタンが取れないようになると、再び付け直してくれたのですよ。

最近では手作りアロマキャンドルを皆に配ったのですよ』

「だ・か・ら・ それが可愛すぎるのよー！』

『なんで私より女らしいのよ、『お菓子作り』や『アロマキャンドル』可愛過ぎるのよ。

そうね、いつそ『人間でキャンドル作り』くらいを趣味にしなさいよー！』

姫の言葉に魔王含め、部下全員が震えあがっていた。

「えー可愛くない」

「『えー可愛くない』じゃない！ その趣味をやめないと間わないわ。

ただ、せめて魔王ぽい趣味を持つなさい」

魔王ぽい趣味か…お裁縫も黙田、お菓子も黙田、キャンドル作りも黙田。

うーん。

「あんたが何を考えてるのかしれないけど、やってみたい趣味を挙げて見なさいよ。」

私がそこから選ぶから

じゃあ……。

「占い」

「女っぽい、却下」

「社交ダンス」

「S h a l l w e ダンス？」

「詩」

「恥ずかしいポエムは黒歴史になるわよ」

「天体観測」

「見えないものは見えないわよ？」

「乗馬」

「えつ乗れないの？」

「いや、自力で飛べるから。 もしかして許可！？」

「……却下」

「アマチュア無線」

「無線機あるの！？」

「アフイリエイト

「魔王の癖にお金に困つてゐるのー?」

「ストオオオオップ」

姫が急に叫ぶと、俺は既に他に三十個ほど浮かんでいた趣味を言うのを一回止めた。

「あんた、懲りとやつてゐるだじょー! そつとしか思えないわ。いいえ、そうに決つてこるわー!」

「姫様、先ほど魔王様が仰られた趣味は全て、既に魔王様がやつている趣味ですよ。乗馬はまだ不出来ですが」

「はあ……」

姫はため息を付くと、もうさうでも良くなつたのか、王座に腰掛けた。

「姫、それ俺の席
「つるさい……」
「すいません」

凄みある姫の口に魔王はたじろいだ。

あの睨みなら、そこいらの不良ならすぐさま財布を差し出すほどだ。

「何でこいつまで、魔王が多趣味なのよ。いいえ多趣味なのはこの際どうでもいいわ。

だけど何故、何一つ、殺伐とした趣味が無いのよー!」

「異議ありだ、株もやっているぞ。俺の力で、つい前日、貴様ら人間の会社を一つ、買占めてやつたわ」

「……。で、その会社はどんな会社なのよ」

「先月、 水産で食品衛生法に反してしまい。業務停止処分を受けてな。

株価が下がり、大幅なリストラが図られる事になつてな。
元より、この問題は一部の経営陣が独自にやつた問題であつて、
下の者の責任ではない。

だから、そんな経営陣を替えるべく、俺が株を買占め、経営権を
乗っ取つた。ふはは怖かろう！」

「完全に慈善活動じゃない！！ もうあんたが世界を仕切った方が
良い気がして来たわ」

「俺は人の上に立つような、立派な人間じゃない」

「現・魔王が何を言つているの－！－！－？？」

「あーもうイライラする」

「三十才越えてから、妙にイライラする……はつ！？ 更年期障害
か？？」

「私はまだ十六よ！－！－！」

姫は床を足でドンドンと叩き、イライラを全身で表現していた。

「はあ～、全く人間とは不思議だな。直ぐに気持ちが表に出して、
それを他者にぶつける。

明確な悪が無ければ、同じ種族同士で争いを始める

魔王は「まつたく～」と言い、肩を竦め、首をふるふると振った。

「もう良いわ、あんたを変えるのは諦める。だけどその代り、他の
を変えるわ」

姫はそう言つて、俺の部下たちに田線を映した。

姫に田線を合わせなにようにと部下達が各自、明後田の方向を見
ていた。

「あんた達、全員モヒカンなんて良いんじゃない？」

その言葉に部下達は阿鼻叫喚を上げて、王室から我先にと、出で
行つた。

「部下達をモヒカンにしてどうするつもりなんだ？」

「胸に七つの傷を持つ男くらい来るかと思つて」

「 来ないと思つ」

「あら、そう」

以外にもあつけなく姫は引いたな、と思い、不思議そうにしてい
る。

姫は残っていた部下……と言つても残っているのは中ボスと魔王
だけだが。

その二人に向かつて指を指し、言つた。

「まあでも、あんたの部下とあんた、それにこの城には手を加えさ
せて貰うわよ」

「中ボス、来なさい」

続けざまに姫が言葉を放ち、そのままの勢いで姫は、中ボスを呼んだ。

中ボスは名指しされた瞬間、身体がビクッと震え。目は少し泳いでいた。

見るからに嫌そうな顔をしていたが、姫の呼び掛けを無視する訳にはいかず。

おそれおそれ、姫に近付いた。

「……お呼びですか、姫様」

「耳を貸しなさい」

その言葉に一抹の不安を抱えながら、渋々中ボスは姫に耳を貸した。

魔王には、姫が何を言つているかは聞き取れないが、内容を聞いて行くうちに中ボスの表情が変化する。

一瞬驚きの表情をしたと思ったたら、次の瞬間にはす不敵な笑みに変わっていた。

「分かりました姫様、それなら二日ほどで可能かと」

中ボスの返答が気にいったのか、それとも二日でその『何か』が可能なのかが嬉しいのかは俺には分からぬが。

姫は嬉しそうにほくそ笑んでいた。

「魔王様、しばらく自室に居てください。」

ゲームの方はRPGを用意致しますので、それではしばらくじっとしておいて下さい

訳が分からぬが、特に困る様な事ではないので一ツ返事で答えた。

魔王はその後、中ボスに追いやられるよにして、自室で小ボスとゲームを共に進めていた。

「魔王様。中ボスと姫様は一体何を企んでいるのでしょうかね？」

小ボスは魔王に質問を投げかけたが、その日は魔王の方ではなく、テレビ画面の方に向いていた。

話しかけている間、一瞬たりとも小ホブは画面から目を離さない事は無かつた。

「俺にも分からん。ただ、あれだけやる気になつた中ボスの姿も珍しい」

小ボスと同じく画面から目を離さず、コントローラーを握りながら、魔王も答えた。

「それに何ですか、このけたたましい音は？」
城自体を、大改装して
てるつて感じんですけど」

三日前から、夜も止む事無く、工事の音が響いてくる。

腹に響くような重低音から、耳を劈くような甲高い音など色々な音が鼓膜を叩く。

魔王は工事が原因でこの三日間はまともに寝ていなかつた。

騒音で、寝れないというより、近隣の皆さんから苦情が来ないか不安な為に寝付けない魔王だった。

そんな寝不足な魔王の耳に、ドアをノックする音が微かに届く。

「失礼します。魔王様、大変長らくお待たせ致しました」

中ボスが勢いよく扉を開け、俺達の前に現れた。

「こんな狭い部屋に缶詰にしてしまい、本当に申し訳ございません
『ルル』俺の部屋だけどな

「あつ……、失礼致しました。それよりも、遂に『改装』の方が終わりましたのでどうぞこちらへ

寝不足で頭の回らない魔王は何も考えず席を立つた。

魔王と小ボスは、中ボスに連れられ、廊下を歩き。その足で城の外へ一旦出た。

そして門から出で、振り返り、その田で『新・魔王城』を見た。

「……。これは何だ?」「…………す」「……」

「何と申されましても、見ての通り魔王城ですよ。

私としてもやはり、このようなデザインに憧れて居たのですよ

俺達の前に現れた、『新・魔王城』はそれはそれは

「アーティスト」

魔王は半分涙目になつてゐた。

の息が止みであります。……。

巻之三

門の端には不気味に佇むガーゴイルの置物。

王城本体。

皆たゞで嫌だぞ？ ある日、家に帰つてぐると、自宅か「悪魔城」

「魔王様?、一体、誰に話掛けてるのですか?」

[.....]

魔王は少し遠い目をしながら、今までの魔王城を懐かしんだ。だが、ふと我に返り、中ボスの方を見た。

「あの～、中ボスさん」

「何ですか？」魔王様

「元に戻しては……」

「却下です」

うわっ！ すっげえ笑顔！

今まで長く中ボスと過して來たが、こんなに嬉しそうな中ボスを見るのは初めてかもしない。

嫌な初体験だな……

「どう気にいった？」

魔王はその声の主の方に身体を向けた。

「どうもー、何故こんな城……なんだその手に持つている衣装は……？」

「衣装？ ああこれの事ね、もちろんあなたのよ。

魔王であるあなたには、それ相応の格好をして貰わなくちゃ」

姫はそっと魔王に近付くと、手に持つていた衣装を広げて見せた。

嫌だ！ 僕はあんな悪趣味な衣装は着たくない……！

「どうよ、これ！ ドラキュラをイメージして（中ボスが）作ったのよー！」

あなたの為に頭に付ける飾りも（中ボスが）作ったのよ。角くらい無いと格好悪いと思つてね

くそつ！ 中ボスに余計な物を作りおつてからーーー！

それでも、“かがり縫い”が甘いではないか、これでは布端をほつれるではないかッ！

と、的外れなツツミを脳内でしている魔王だった。

結局、魔王はその後、姫と中ボス。更にはノリノリの小ボスについて、その衣装を（強制的に）着せられた。

「ココが魔王城か！？？」

「……ああ、たぶんそうだ、住所もあつていい」

「えっ！？ マジかよ！… 国王が発行した魔王の特徴の紙には、こんな事書いてないぞ…」

「私、嫌よ！ お金が沢山貰えるって聞いたから貴方達について来たけど。

こんな城に住んでいる魔王なんかに勝てるはず無いわ…！」

「俺もバス。確かに姫を助けたら、姫と結婚して、王様になれるかもしれないが。死んでちゃ意味がねえ。

俺は帰らせて貰うぜ。報酬分くらいは働いたぜえ！ お釣りが来るくらいだ！」

「怖氣づいたか貴様ら！ 特にそこの“弓に両手剣”持ちという、意味不明な男！！

貴様は、ただ飯食らつて、此処まで来ただけだろ！」「…」

魔王城の門扉もんぴの前で言い争い始める勇者達。

そんな、勇者達の耳に下品なほどの大笑いが聞こえ、争いが一旦止んだ。

『ガハハハハ、よくぞ来た。勇者達よ』

突如、聞こえて来た声に魔王城の扉の前に居た勇者達は驚いた。
門の前に備え付けてあるガーゴイルを模したスピーカーから声が発せられる。

『この城に来たからには貴様ら生きては帰れぬぞ。…………？？？？』

『中ボス。これ何て読むの？』

『それは『ナゾロシ』ですよ。魔王様』

『えつ俺殺すの？』

『形だけで良いから読みなさいよーーー』

ベシツ

『いてて。えー、……ゴボン。

この魔王城に来たからには貴様らは生きては帰れぬぞ。みなじゅう塵にして
くれるわ』

ところ変わつて魔王城、放送室。

「…………ふう。おし、これで満足だう姫？　ではお姫様が来たわけだし。お茶の準備してくるよ。

あつ……でもお茶受け無いな。ちょっと待つてて、クッキー焼く

「よ

魔王はマイクから口を離し、席から立ち上がりながらしていった。
姫は再び口を開いた。

「あんた……自分を殺しに来る相手にお茶出してどうすんのよ……」

「えつ……まさか勇者達って俺狙いなのか？　俺何か悪い事したっ
け……？？」

「すっかり失念してるようだから言つけど、私はあんたの人質な
よ」

「いつ、要らない！――！」

「要らないって何よ！　失礼ね！」

俺達がそんなやり取りをしていると中ボスが少しオロオロした様
子をして、こちらをチラチラと見ていた。

「どうした中ボス」

「あの～大変申し上げ難いのですが……。　マイク入つてます

「――!?」

ガチャガチャガチャ
ブチッ

『…………』

「……あーその。なんだ、魔王の特徴ってなんだっけ？」

「常にジャージ姿で、趣味はお菓子作り。

毎週火曜日の十一時頃に近所の方と井戸端会議に参加してる事もあります」

「それ以外にも、地域清掃も欠かす事無く参加しています。現在は町内の会長をやっておられます」

「その『近所の方』と言つのは魔族なのか？」

「……人間です」

「「あー」」

「何だか解らないけど、もういいや。俺も帰る」

「そうですね帰りますか

「贊成～」」

「」
そして、勇者御一行は、魔王城から去つて行つた。

そして、一人寂しくテーブルに座る魔王。

「勇者達御一行、遅いな。クッキー冷めちゃつたよ、
もぐもぐつ、ぱく、んぐつ……美味しい」
……

第一話『新・魔王城！？』（後書き）

……「うわ。相変わらず行き当たりばったりな書き方。タイトルなんて毎回適当に考へてるだけに、もつ少しもともなのが思いつけば変えたい！」

だが今現在思つている事は「あ？ タイトル？ いらねえんじゃねえ？」と心中で悪魔が……

第三話『新・キャラ登場！？』

第三話『新・キャラ登場！？』

「突然だがッ！ 今日から俺の妹が来る」

勢い良く扉を開けると、王室には姫と中ボスが居て、姫の手にはゲームのコントローラーが握られていた。

俺の言葉に姫はゲームから少しだけ顔を上げただけで、すぐにまたゲームに向き直った。

「おい、無視するな」

「よし、それでいい」

姫はめんどくさそう、「ゲームの電源を切ると俺の方を向いた。

「で、何よ？ あなたの妹が来る？ 早速、新キャラ登場？」

「そう、妹が俺に懇々たるに来てくれるのだよ！……」

「あー、そいつなの……」

姫はつまらなそうな顔をし、お菓子を取り、それを口に放り込んだ。

「どうかしたのって……」

「んで、それがどうかしたの？」

「だつてあんたの妹でしょ？　どうせ変人なんでしょ？」

「ああ、俺に負けず劣らずの変人だ。昔は良い子だつたんだけどな。
『大きくなつたら、おにいのお嫁さんになつてあげる』と言つて
いたくらいだ」

「ふーん、それは別にどうでもいいけど、その妹さんはいつ来るの
？」

ガシャン

突如、後ろから何かを割る音が聞こえた来た。

その音に後ろを振り向くと、どうやら紅茶とお菓子を持って来た
中ボスがトレイを落としたようだつた。

「姫様……今何と？」

姫は中ボスの言葉に疑問を抱きつつも、質問に答えた

「『『それは別に』どうでもいいけど
「それの後です！』」

困惑する姫だつたが、渋々もう一度、はつきりと言つた。

「？？　『妹さんはいつ来るの？』」

「そう！　それです！　魔王様の妹君こもつときみが来るのですか！？？
「今日」

ガクツ

中ボスは膝を付き、その顔は絶望に染まっていた。

更に中ボスは、うわ言のよつこ

「妹君が来る……魔王様の妹君が来る……イモントギ!!」とびぶつ
ぶつと咳いていた。

そんな中ボスに対し、姉は「何あれ？」と指を指していた。

「ああ、中ボスはどうやら妹が苦手みたいでな、妹が来る前にはいつもは有給を取っているんだ」

「あなたの職場つて結構、融通利くのね」

そんなやり取りをしていると、魔王城に設置されている、ドアホンが鳴った。

「おっ、来たようだな」と魔王のその言葉に、中ボスは「ヒイイイイ！」と言い、ドアを勢い良く開け放ち飛び出した。

その後「ギャアアアア」と再び悲鳴が聞こえたが、その声は徐々に遠のいた。

「おにい、来てあげたわよ

そして中ボスと入れ違いに妹が入って來た。

「ねえ中ボスはどうしちゃったの？なんか私の顔を見て、突然逃げ出したわよ、失礼しちゃうわまつたく」

「貴方が妹ちゃんね、魔王がこんなのだから、てっきり変な人が来るかと思ったら、随分可愛いお嬢さんじゃない」

珍しく姫が好意的に妹に話しかけた。

「おにい、何この喪女は？」
むじょ

「ああ、それはお前にも話していた、姫だ、仲良くしりよ」

「へーこのおばさんが『姫』ねえ…」

ピキッ

あれ？ なんか変な音がしたぞ？

「おにいから話は聞いていたけど、何あんた？ 男選びの為に懲々
魔王城乗つ取つたらしいじゃない。」

傍迷惑なお姫様ね、……馬鹿じやないの？」

ピキッピキッ

あれ？ ひび割れかな？ 最近魔王城は修繕したばかりだから
壁には異常は無いと思つけど……

「『なまもの』にしか興味の無い、『ヘテロ』なんかには私の高貴
なる趣味は理解できないだろうけど、初めに言つておくわよ喪女」

ボーグラフ

「私は B 「 大好きよー！」

「へつ？」

「妹よ、まだ小ボス×中ボスのCPは諦めて居ないのか？」
カッブリング

困惑する姫を横目に俺達は話を続ける。

「はあ……おにいは何度言えば分かるの、中ボス×小ボスよ、順序は間違えないで、あと正確には『中ボス鬼畜攻めの中ボス健気受け』よ」

「ほつ、そうであったか、昔聞いた時のことは『中ボスノンケ攻めの小ボス受け』と言つていたはずだが?」

妹は人差し指を一つ立て、それを左右にゆっくりと振りながら

「ふふふ、乙女は日々進化するのよ」

「シーピー? ナマモノ? ヘテロ? ビィーエル?」

「姫様、おわかり戴けましたか……あれが魔王様の妹君です……」

いつの間にやら戻つて来た中ボスが戻つてきていた。

「あんたいつの間に!」

「姫様! もう少し声のボリュームを絞つて下せ!」

慌てた様子で中ボスが姫の口をふさぐ。

「まあとにかく、私が魔王様の妹君を苦手とする訳がおわかり戴きましたか?」

「ええ、大体分かったわ、生意氣小娘の上に、毒電波に当たられているようね」

「はい、その様な感じです、更に魔王様の妹君は魔族一の魔力の持

ち主ですか

その言葉に姫は目を見開いた。

「えつ！あの子そんなに強いの？」

中ボスは「はい、それはもう」と言い詳しく説明した。

「実は言つと、魔王様の妹君は実際には魔王様とは血がつながっては居りません、妹君は元魔王の娘であり、完全なる魔王の血族です。色濃く受け継がれたその血は、生まれながらにして強大な魔力を妹君に与えております。

その魔力は魔族一と言われております、ですが魔王は男しか成れない故に、今こつして魔王様が魔王をやつておられるのです」

「魔王の血族……あの子と私、どっちが強いの？」

中ボスは姫から少し目を逸らし、意をけしたように姫に「おそれく妹君の方が魔力は上かと」と言つた。

「あの子の方が私より強いと言つの？」

困惑する姫に中ボスは慌てて補足した。

「ですが、姫様の方が沢山の場数を踏まれてるので、その場馴れがどう戦闘に影響するかは未知数で……」

中ボスはああ言つたが、本当は私にだつて薄々気が付いていた……あの子は確かに強い。

まともにやりあつたらまず勝てないわ……それほど強い魔力をあ

の子から感じる……

「鬼畜 鏡やつた?」

「当然ですわ、Rの方もやりましたのよ。小説も中々のできでして
よ」

「それよりも、中ボスと小ボスはまだ来ないの？ 私が来ているの
に挨拶も無しなの？」

「ああ、小ボスならまで寝てるはずだ。中ボスはお前の後ろで姫と
話をしてるんだ」

魔王のその言葉に妹はゆっくりと後ろを向いた。

「あっ！ 魔王様なんでそれを言うのですか！」

「じゅるつ……中ボス……はつけーん！」

その後、中ボスは小ボスと共に同人誌のモチルをやらされた。

「マオウサマのイモウト、ギミキタ。ショウボス　ト　イッショニ
モチル ヲ ヤラサレタ

マオ ウマ

その後、妹と中ボスは、共に小ボスの部屋に行き、俺と姫は
無双をプレイしていた。

「お腹減ったわ、何か取つて来なさい」

「…………はい」

中ボスが居ないので、代わりに取つて来て貰うといつ選択肢も無い為に、渋々自ら食堂に向かおうと思い、扉を開いた。

廊下を歩くと、しばらくして、中ボスがトボトボと歩く姿が見えたので声を掛けた。

「おひ、中ボス！妹が迷惑掛けたな

「あ、魔王様」

(うわッ！ 生気がまつたくな)

「あはは……いえ迷惑なんて全然。ただ上半身裸で小ボスと一緒にポーズ取るだけの簡単な仕事ですよ、ははは……」

乾いた笑いが廊下に空しく響き、中ボスの悲しさを余計に引き立たせる。

そんな悲しい声をかき消すように元気な声が廊下に響いた。

「魔王様～、中ボス～」妹から解放されたのであらう、小ボスが廊下の端から走つて来了。

「おお、小ボスよ、やつと終わったのか？」

「ええ、妹ちゃんには新作のRPGゲームを買つてもらつたので魔王様と一緒にやろうかと」

「ほほ～妹から～」褒美が出たか～アイツは飴と鞭を心得てるな

ん？ 小ボスがゲームを買つてもらつたと言つ事は、中ボスも何か貰つたはずだな。

魔王はそう思い中ボスに何を貰つたのか聞いた。

中ボスは複雑そうな顔をすると、服のポケットに手を突つ込み、ポケットの中から箱を取り出し、それを開いた。

「メガネ……」

『何に使えとー!?』

第三話『新・キャラ登場！？』（後書き）

正直、この『妹』を出すから、B-L注意的な事を書こうかと悩みましたが、これくらいならいいか～と楽観視しましたが。皆さんがあまりにも気分を害する様であれば、B-L注意つて付けときます。…

第四話『不幸の手紙!?』（前書き）

なるべくタイトルの前に『新』って付けようと最初思つてたけど、今回何も浮かばなかつただけにあえなく断念。

正直この前の話に関しては事前にある程度形は整えてあつたので、ちょっと見直して出すだけだつたのですが、この四話目にに関しては今日、大急ぎで書いた次第です……はい。

あと、他の作者様の作品は嗜む程度ですが、御拝読させて戴いているのでですが、私の作品と比べると、一つ一つの区切りが大変短いので読みやすいです。ですが、私はまだまだ未熟な所為か、何処で切れればいいのか？ 分からないと言つた状態です……正直、あまりに長くなつてしまふと、読み難いのでは？ と思つて今が、今現在の自分自身の技量と話合つた結果、不可能の三文字が脳内会議で決定致しました。

第四話『不幸の手紙！？』

第四話『不幸の手紙！？』

バタバタバダバタ

俺、魔王は今、猛烈にピンチであった。
この緊急事態をいち早く皆に伝えなければ。
俺はそう思い廊下を走っていた。

バーン

「皆！ 聞いてくれ！ 俺『不幸』になる！」

.....。

「「はあ？」」

魔王の言葉に姫や小ボスは訝しげな顔を向けた。中ボスはどうやら買い物に行っているようだ。

「まあ大体、想像付くけど、何が起きたのよ？」

どうやら、まだ皆には『不幸』は訪れていないようだ……良かつた。

そう思い、魔王は席に付いた。

「この城つて、何人いるんだ？」

「えーっと。魔王様合わせて、九名です」

「足りない！ あと一人足りない！」

「一人足りないってどういう事よ？　あなたまずは落ち着きなさいよ。はい深呼吸」

姫に諭され、大きく息を吸って、ゆっくり吐いた……幾分かマシになつたような気がする。

「で、落ち着いた？」

「ああ、大丈夫だ」

魔王は再び一人に向き直り、先ほど起きた事を伝えた。

かくかく、しかじか。

「あー、なに。不幸の手紙？　それって。　人にこの手紙を送らなければ不幸になる的な？」

「この女！　何故内容を知ってる！？　まさか姫にもこの手紙が既に届いた事が！？」

「まさかお前……」

「そう言えば昔流行ったわね」

！？　クッ、思つていて以上に、不幸の手紙による犠牲が多い。この負の連鎖はなんとしてもここで食べ止めねば……！

「決めた」

「すごい、苦渋の決断。みたいな顔してるけど、そんな覚悟いらないわよ」

「貴様、この俺に十人もの人々を不幸に落としいれると言つのか！」

「！」

「魔王様、別に不幸の手紙つて特に何も起きませんよ？ 所詮は迷信ですよ」

「なん……だと？」

「では、俺が朝、ベットから起きた時に足を攢つたのは？」

「ただ、ミネラルが不足気味なだけだと思いません」

「ミネラル不足だと！ 確かに最近はカロリーメートばっかり食べているからな……偏り過ぎだか？」

「では、H口ゲのキャラが攻略出来ずに、毎回バットエンドなのはG回収のためにやるのは別ね！」

？」

「それはただの選択ミスだと思います」

「俺は一度攻略してからじゃないと攻略参考ページは見ない！」

「では、体重が増えたのは？」

「単に、自堕落な生活のせいです」

「では……」

「そこで聴き絶えなくなつたのか姫は勢いよく席を立ち、呆れながら言つた。

「不幸の手紙？ ふつ、魔王が不幸の手紙如きで騒がないでよ。

そんなもので不幸になるだつたら、戦争の相手に送りつけばそれで勝ちじゃない」

「そりか！この手紙は魔王軍の策略だつたのか！くつ、何て姑息な手を……」

姫が魔王を平手で叩くと、スパーーンと乾いた音が響いた。

「アンタ馬鹿じやないの！ どうやって理解すればそんなおそれてんがい奇想天外な解釈になるのよ！」

「だつて『戦争相手に送りつけねば勝てる』と言つたのは貴様であるうへ、」

「 はあ～」

「 な、なんだ、あの冷めた田線は？ 僕何か悪いことしたか？」

だけど、『三三を見るように農んだ田……ドキドキしちゃう！』

「うう……まあ……あれだ。手紙の内容ほほこの際どうでもこい、だが、これを誰が送ったのだ？」

小ボスが突如、嬉しそうに「そり言えば魔王様」そり言ひながら懷に手をやり、一枚の手紙を出した。

「実は、僕の所にも手紙が届いたのですよ

「うう、不幸の手紙のはずなのに、何故か笑顔！ その笑顔が眩しい……」

俺は姫の方にも田線を向けると、同じように手紙を机に置き「私

「それによ、つまらんなそつに咳いた。

「これはどういう事だ？ 既に身近な人に手紙が届いている……

「それにしても誰がこんな子供じみた悪戯したのかしり？」

机の上に集まつて三枚の手紙を見つめながら姫が言ひと、小ボスはおもむろに手紙を持つと

「誰が送つたんでしょうね……住所とか書いてあればいいのですが……」

「そう言い、小ボスが手紙を裏返すと。

「あつ、書いてある」

「えつ？ まさか～わつを見たけどそんな物書いて……あるわ……」

「何よ、ちゃんと確認しなさいよ」

「じめんじめん、不幸になると書つ内容だけで頭いつぱいで、でもお前らだつて気が付かなかつたんだろ？」

「私はどひつせ、あなたの悪戯だろつと思つて持つてただけよ」

「でも、魔王様。この住所、魔界からですよ」

小ボスに渡された手紙には確かに、魔界の特有の住所が書かれていた。

「何よ、もしかしてあんたの故郷からの手紙？ でも魔界からの不^幸の手紙って本当に効果ありそうね……」

「うーん、住所自体は確かに見覚えがあるな。何処だつたけ？」

「ちょっと貸して下せー」

「ほい」

俺は中ボスに手紙を渡すと、中ボスは少し考えると

「あつこれは魔王様の『パパ上』様の住所ですよ」

「そうか、パパ上か……って！ 中ボス！？ いきなり現れるなよ

！」

買い物袋を片手に持つ中ボスは、いやに家庭的な雰囲気を醸し出していた。

「さつき戻つて來たんですよ、帰つてきたら皆様が妙な顔つきで手紙を見てたので気になつて近付いて見たんですよ」

そう言い、中ボスは「さつきポストに私宛で、もつ一通」と言い、もう一枚不幸の手紙を机に置いた。

「それにしても何でポストが別々なのよ？ 集合住宅じやあるまいし

し

「ああ、それはですね、魔王様が『プライベートは大切だ』と言い、設置したのですが。

本当は魔王様が頼んだアニメキャラの抱き枕カバーを小ボスによつて開封されて、公開恥辱を受けたからですよ」

「ちょー！ 違うよー！ 姉！ 違うからー！」

あれは俺が……その、友達！ そう友達に頼まれて俺がアマンで代わりに頼んでやつただけだつて！」

必死に弁解するも、姫からの冷ややかな視線が突き刺さる。我ながら中学生の男の子みたいな言い訳だと思つ。

「魔王様、中ボスと僕以外に友達居たんですね！」

純粹に喜んでくれているのか、それとも全て分かった上での嫌味なのか、真意の程は分からぬが、今は小ボスの言葉が、唯唯痛い……

「ふーん、友達ねえー。まあいいけど、あんたの部屋つて抱き枕何て置いてあつたっけ？」

「ああ、その事か、カバーは丁寧に畳んでしまつてあるぞ」

「？？ 抱き枕なんだから抱いたりするんじゃないの？」
「ははーん、甘いな貴様！」

魔王の言葉に「何がよ？」と訝しげな返答をする姫。

「真の抱き枕ラーは、抱き枕カバー単体で使うのだよー」「どうやつて？」「カバーの中に自ら入るのだよー！」

「アアアアアン！ 決つた……と言わんばかりに、椅子の上に立ち、ポーズをとる魔王。

今ならオラオラ言うスタンドも使えそうだった。

「はあ？」呆れた声を出す姫、まあ驚くのも無理は無い、これは抱き枕道を窮めた者にしか分からぬ神意。

「まあやり方は至つて簡単だ、まず抱き枕カバーを持つ」「そして……」

そして？

「そして入る！」

入る！？

皆が混乱に至る中、悠然と説明を続ける。

「カバーの中に入り、そして悟る……『俺が嫁』と…」

俺が嫁！？

ああ……聞こえる……神が「よくぞ氣が付いた」と言つている……
…氣がする。

「でも、魔王様、今の言葉で、抱き枕カバーは自分の為に買った物だと言うのが白日はくじつの下に晒されましたよ」

仕舞つた！ 見事誘導尋問に引っ掛けてしまった！

「はあ……まあいいわ随分話が脱線しちゃつたわね」

何故か皆が俺から視線を外している。

いや、わざと逸らしやれている…? まわか」これが『哀れみ』と言つものか!?

「それにしても魔王の『パパ上』とやらから手紙なんでしょう? 何で私にまで届くの? と言つのはこの際放つておいて。どうして貴方の父上がそんなものを?」

「姫様、パパ上としつかり呼んだ方が身のためですよ。

あの方は『パパ』か『パパ上』と言つ呼び名以外で呼ぶと泣きます

「泣くの!?

「つ……自分の父親ながら恥ずかしい……

「すいません、不出来なパパ上が迷惑を掛けます……」

「じゃあ、そのパパが何でこんな悪戯を?」

「お前がパパって言つて、水商売の姉ちゃんみたいだな」

「……、そうね。それに関しては私が悪かつたわ。今度からはパパ上様に統一するわ」

「そうですね、姫ちゃんもなるべくその呼び名で呼ぶよつこしたほうがいいよ。

パパ上様、一回泣くと機嫌直すの大変だから」

「分かったわ、なるべく」の呼び名で呼べるよつこ癖を付けるわ。あと気になつている事が一つあるんだけど」

「なんだ気になつてる事つて?」

「パパ上様はあなたの父親なのよね?」

魔王は黙つて頷くと、姫が更に言つた。

「じゃあ元・魔王なの？」

「ああ、正確にはパパ上は『元祖・魔王』だ

姫は「へーそれで」と言い、更に言葉を待つているようなので続けた。

「お前が聞いた事のある様な有名RPGに出でくる魔王は、あれは俺の親父だ」

啞然、そんな言葉がまるで顔に書いてあるかの様な表情である。

「お前にはこの気持ちが分かるか？ 好きなRPGの世界間に感情移入したくて、最後に出てくるのは大体自分の親父なんだぞ」「考え方によつてはすぐ斬新なゲームよね」

「弱い親父から、クリアー不可レベルな程、強い親父、それ全部親父

「授業参観で友達に」

『おい見てみるよ、あそこの人、D SATの人 羅に凄い似てないか』

『本当だ、似てる、似てる』

「こんな事を後ろの席から聞こえて来るんだぞ！ だが俺はそれに対してガツンと言つてやつたんだよ！…」「何て思つてたの？」

「どうりかと言つぽデビ サマナーのキヨ ジだ！」

「…………、全然言つてゐる事が分からぬけど、あんたも相当の馬鹿だと言つ事だけは伝わつたわ」

「そうですね、魔王様が楽しみにしているゲームが延期した時、大体はパパ上様が機嫌悪いのが原因所為で、その所為で遅延を招いていますもんね」

「小ボスの言つと通りですね、RPGの延期の原因是パパ上様です

「嫌だな、その原因」

姫は、本当に、心底嫌そうな表情を浮かべ

「とりあえず、その手紙を書いたのはパパ上様で、それに対してもらかのアクションをしなければ、RPGの発売日は延期され、如いては全てのRPGファンを『不幸』にさせる事になつてしまつ訳ね？」

「それなら俺に考えがあるぞ」

魔王は皆にてその案を云ふると

「それは妙案ですね」

「そうね、これ以上ないほどの上策ね

「すごいです！ 流石は魔王様」

皆の喝采を浴びる中、俺は一つの手紙をパパ上宛てに書いた。

「ん？ やつたあ魔王君からパパに返事が届いてる！
パパ感激だな～魔王君が僕に手紙を書いてくれるなんて小学校以

来じやないかな?」

「えー何々?」

拝啓 時下ますます御健勝のこととお喜び申し上げます。

さて、弊社ではかねてから魔王城立て直しを計画しておりましたが、度重なる不況の波を受け。資金繰りに苦労しておりましたが、このたびパパ上様の資金援助のおかげで、工場開設の運びとなりました。無事、立て直しが完了した暁には当地方の人間界派遣魔王軍が微力ではございますが、人間界魔界化計画のお役に立てれば幸いでござります。

つきましては工事の費用に関しての話しですが、現在、『パパ上様』から提示していただくはずの金額に届いてない為に、工事の方が、著しく滞っております。

弊社と致しましても金銭的に余裕があるわけではないので、一日も早くご入金して頂けないでしょうか。

催促する形になってしまった事を、ここに深くお詫び申し上げます。弊社計画に一層の御理解を賜りますよう、今回計画についてご説明申し上げます。何卒弊社の意のあるところをおくみ取りの上、御出席賜りますようお願い申し上げます。

略式ながら書中にてご案内申し上げます。

敬具

記

添付書類

請求書

1通

以上

請求金額 一千万PP

「.....ぐすん.....銀行行くか」

この後、大人気シリーズのRPGは延期されてしまったが、予約するのを忘れていて困っていた魔王には特に悪影響は無かつた。

第四話『不幸の手紙!?』（後書き）

最後の方の失速感が自分でも酷いと想っています……今後はもう少し、熟考し、皆さんに喜んで頂ける様な作品を出せるようにしたいです。

元々ショートストーリーですので、話の進行速度自体はあまり早くないかもしれません、なので思っているよりもグダグダに長編化してしまうのでは？と自分思っています。

長編化した場合、自分の技量が後半から上がっているといいのですが……

第五話『魔王様の給料は 制一?』パート?（前編）

なんか気ままに書きこんでたらこいつの間にやが、こいつの二倍ほど
の量になっていたので都合によつてこいつに分けました……「あなたさ
い。

第五話『魔王様の給料は 制!?』パート?

第五話『魔王様の給料は 制!?』パート?

「我々は一人の英雄を失った。
しかし！ これは敗北を意味するのか！？
否！ 始まりなのだ！」

壇上に立つ魔王の前には、その数二千ほど^{だんじょう}の魔族^{たぐま}が集結していた。
その雄々しく逞しい叫びは、魔王城を震わせた。
もちろん、この様な集会を開く事は、近隣の方々には了承済みである。

「私の親友！ 諸君らが愛してくれた中ボスは死んだつ！ 何故だ
つ！」

「あの～死んでません……」

「しつ！ 今良い所なの！」

魔王は脇に立っている中ボスを追い払うと、演説を続けた。

「この悲しみも怒りも忘れてはならない！ それを中ボスは死をもつて我らに示してくれたのだ！」

「我々は今この怒りを結集し、國王軍に叩きつけて初めて眞の勝利を得ることが出来る！」

「「Jの勝利」こそ戦死者全ての最大の慰めとなる…」

「國民よ… 立て！ 悲しみを怒りに変えて… 立てよ國民…！」

「魔王は諸君等の力を欲しているのだ！ ジイイイーク！ マオウー…！」

(笛でジイーークマオウツ！ の連呼)

……。

「何してるの？ あんた達は？」

横から姫が冷ややかな目線を送りつつ質問を投げかけて来た。

「今から「J」に突入するので、我が軍の兵士を鼓舞し

「 黙りなさい、ブチ殺しますよ」

「ヒィ！ すいませんでした…」

認めたくないものだな、若さ故の過ちといつものを…

一千の魔族の前で人間の女性に土下座する現・魔王。

魔王自身の演説により上がった士気も、今や、先ほどの土下座でどん底状態である。

「騒がしいから来てみれば、何？ 朝から演説？ しかも目的は私利私欲の為ですって？」

「いや、「コミケは大事な行事であり、これに赴く事は既に苦行。各ブースを回る事は言わば行脚、重要な」

「あんたがそんな事の為に徵集する魔族達にいくらの金が掛かると思つているのよ！」

「これはお金の問題では」

「お金はね命より重いの！」

ざわ……ざわ……

「あの～、姫様。そのネタはそろそろ重いべきかと」

「あら、そう」

中ボスの言葉に姫はつまらなさうに肩を竦めた。

「てな訳で、皆、このバカの為に懲り来てもうつたとい悪いけど、解散してもらえる？」

《はーい》

姫の言葉に魔族達は各自帰つて行つた。
姫は一言「中ボス」と言い、中ボスは近くに呼んだ。

「今回の徴収に掛かつた費用はどれくらい？」

中ボスは何処からか、電卓を取りだした。
計算は即座に終わり、「およそ、これくらいかと」と言つて、姫に電卓を渡した。

「ふん、魔王、あんたの給料はどうあえず、三十年ほど無じになつたわ」

姫の言葉を聞き、驚いた魔王は即座に姫の持つていた電卓を奪つた。

「三十年だとつ！ 馬鹿な、俺の賃金がこんなに安いはずが……、

姫から奪い取つた電卓に映し出されている金額は……

「一万六千円？
えーっと俺が呼んだ魔族達が一千……必要経費はほとんどが電車
か、一人百三十円？

……山線の初乗り料金並みなのか、アイツら意外に近いな……
じゃなくて！

俺の賃金安ッ！ 年収八五〇円ほどーー！」

意外！ それは年収ッ！！

魔王の言葉に姫含め中ボスすら、顔を赤くして笑いをこらえていた。

「ねえねえ、これなんかの間違いだよね？　せめて時給だよね？　もうこの際多くは求めないから、後生だから時給と言つて……」

姫は顔を下に向けて、必死に笑いをこらえていたが。魔王が回り込み、顔を覗き込むと、笑いをこらい切れなくなつたのか。遂に大声を上げて笑いはじめた。

「あははは、あんたホントに馬鹿ね、仮にも魔王よ？　そんなに安いはずがないじゃない、時給九百円くらい貰つてるはずよ」

「姫様、そんなに笑つては魔王様が傷ついてしまいますよ

「中ボス、あんただつて、顔、ニヤけてるわよ」

「おつと、これは失敬。魔王様、安心してください、二十時以降からは時給九五〇円になつてますよ」

「いや、もうこの際、時給何でどうでもよくなつて来たわ……」

魔王はその後、姫と中ボスに散々笑い物にされたあげく、実は給料は歩合制だと聞いた

……

酷い。

その後魔王は、悲しみを癒すべく、自室に入つたが。
そこには楽しそうにゲームをプレイしている小ボスの姿があつた。
魔王は何も言つ事無く、小ボスと共にテレビの前に鎮座した。

「あれれ？ 魔王様、集会は終わつたんですか？」

小ボスは、画面から一時も田線を話さずに、ポテトチップスを食べていた。

その手は油でギトギトに汚れ、無邪気にもその手で俺のコントローラーを握つていた。

昔から小ボスはお菓子を食べた手で、平氣で人のコントローラー握るんだよな……

「あの、小ボスさん」

「なあに魔王様」

「お菓子食べながら、コントローラー握るのはどうかと思いまよ

やんわりと注意を諭す魔王あとだったが、その言葉を小ボスは笑いな

がら一蹴し

「あはは、何言つてゐるの？？
これ僕のコントローラーじゃないから氣にして無いだけであつて、
自分のだつたらやらないよ。
魔王様は本当に、馬鹿だな～」

何これ！？ 確信犯！？ 姉に負けで以来、俺は魔王として扱わ
れて無い氣がする！？

それどひかニジンノ程度にしか……。

どうせ古コントローラーだから、買い直す予定だから良いか…
…。

そんな事を考へていると、ふと先ほどの事を思い出したので、そ
の事について聞いてみる事にした。

「わつじえぱ小ボスは、いくら給料貰つてゐる？

「うーとな～」

小ボスは真面目に考へているのか、左手をあいの辺りに当て、う
ーと、と唸りながら長考していた。

「魔王様ほじじゃないけど、夜間手当込みで月一十万くらいいだよ」

JR東 本の初任給並み！？ 僕がバイトビニルか歩合制で働いてるにも関わらず！

悲しさのあまり、世界を征服する気が満々になつたよ……

「ん？ どうして凹んでるんですか魔王様？ 魔王様はかなり貰つていろいろ中ボスから聞きましたよ」

えっ？ どういう事だ、先ほど口座を確認した時は、毎月三万程度しか入金されてなかつたぞ？

「あれ、魔王様どこへ行くんですか？」

一緒にアーノードアやりましょうよ、ナインボール檜山が強いんですよ

魔王は中ボスに事の詳細を聞く為に立ちあがり、ドアの方に歩いた、ドアを開け、去り際に小ボスに一言「指マシンガン持つていけ」それだけ伝え、部屋を後にした。

「たのもー」

魔王は勢い良く、中ボスの部屋のドアを開けると、そこには必死に会計の仕事を行なつている中ボスが居たが、その目は、魔王の方を一瞥じやべつもする事無く、書類を食い入るように見詰めていた。

「道場破りですか？ 看板はありませんが、代りにそこにある書類を三部、「ロー」しておいてください」

「分かりました」

魔王は書類に印を通して、適切な順番に並べると、それを「ロー」機へ……

「こんな事をする為に来たのではない！」

「魔王様、遂にノリシッ ローも得とくされましたか」

「そうそう、そなんだよ……じゃない、なんだこの二文芝居はー、俺がここに来た理由はだなー」

かくかぐじかじか。

「ああ、その件ですか。

魔王様の現在の給料は、必要最低限を除き、その全てを先の戦いで壊れた城の修繕に回しています」

なーんだ、そんな事か……つて納得いくかー！

「あのですね中ボスさん、私は魔王ですよ？」

「やうですね」 昼にサングラス掛けた同僚者の間に応える観客のような簡素な返事だな。

「魔界から支援金でなんとかならないの？」

「何を御^{いじゅう}冗談^{ううだん}を、現在魔王城の最高権威^{けんい}者は姫様ですよ？過日、その最高権威者である姫様の指示で、城の改裝を行なったじゃないですか。

その費用で今年の分の予算は全て使い果しました」

「その改裝で、他の所も治つたのでは？」

「はあ？ あれくらいの費用で、姫様が破壊した門^{ゲート}が治ると本氣で思つてているのですか？」

「そう思つてしているのであれば、まず、そのふざけた幻想をぶち殺します」

「うわっ怖ッ！ 今、自分の部下に『殺す』って言われたよ！ 妹から貰つた眼鏡の所為で余計に怖ッ！ なんで下から覗き込むようにして、睨むの！？」

「…………ぐすん…………すみ、ま、ぜんでじた。」

魔王、半泣きを超えて、本^{ガチ}泣きである。

「では、魔王様。」自分のお給料と、お命。どっちが大切ですか？

今度はまるで子供をあやすよつこじて、聲音を変え、優しく肩を叩き。中ボスは魔王をドアの方へ歩かせた。

「…………自分の…………命です……ぐすと、『めんなさい』

「はい、分かつて戴ければいいんですよ、では私は政務に戻りますので、王室や自分の部屋で良い子にしていくださー」

「…………うん」

「あつそつこえれば魔王様」

「…………、まだ何があるの?」

部屋から出よつとした時、中ボスに呼び止められ、後ろを向く。

「魔王様つて切手集めも趣味の一いつでしたよね?」

「…………? まあそつだけど」

訳が分からないと言った具合に、顔を顰める魔王。^{じか}

そんな魔王の顔を見て、中ボスは突如、嬉しそうに微笑み言つた。

「私、切手の事、馬鹿にしてましたよ。あれって意外に高く『売れる』のですね」

……えつ？ 売った？ 売ったって言いましたこの鬼畜眼鏡は？

「あつ……あの。

それは『自分の切手を売った』のか、それとも『魔王の切手を売った』のかどちらでしょつか？

「あはは、もちろん後者ですよ」

ガダツ

「どうしたんですか魔王様？ また土下座とは、本田は『土下座曰和』ですか？」

「……うん。もういいんだ……俺の切手が皆の役に立つのであれば」

「へへそれは悪い事したわね。

でもねあんなメルヘンの世界の中でしか見た事のないようなお城なんて、魔王に相応しくないと考えたのよ」

中ボスに追い出され、王室に入ると、姫と小ボスが居たので、先ほどのやり取りを説明した。

「だつて。『まさにココが魔王城！』みたいな見た目にしたらさ。

『おつじー、魔王城じゃねえ？ ちょっと殺つて来るか』って感

じで勇者が来るかもしないし……」

「心配症ですね魔王様）。そんな居酒屋に入るサラリーマンみたいな感じでは入って来ませんよ。

入つてくるとすれば元より殺す気満々ですよ」

「それにね、一番気に食わるのは、何で深夜にライトアップしてるのよ？ パレードでもやるの？」

「それなら昔やつてましたよね

「やつてたの！？」

「その事か、確かにパレードではないが、連日のように花火を打ち上げていたら近所に怒られた」

「……正直、あんたは既に王国軍じゃなくて、近所の主婦に統治されてない？」

「そんな事ないぞ。その花火云々^{うんぬん}言つた主婦の方が、昨日のカレーを作ったんだぞ」

「えつ！？ おそらく分けなのあれ？ 九人分つてあまり過ぎよ……」

「つかのシーフだ」

「…………」

「パートか何かなの……？」

「専属シェフだ」

驚きを隠せない姫とは違ひ小ボスは「おいしそよね～」といつていしながら言つてと。

姫は席から立ち上がり魔王に怒声を飛ばした。

「あんたね、その人間であるシーフが国王軍の命令で毒を盛るよう^に言つたら、一発で死ぬわよ！！」

「佐藤さんはそんな人じやないッ！」

「魔王様、庭師の方も佐藤つて苗字ですよ」

「確かに苗字は同じだが、皆、庭師の方は『シザーマン』と呼んで^{みよ}るからいいだろ？！」

「 その庭師が不憫^{ふびん}でならないわ」

シャキン、シャキン

「えつ！？ なにこの音！？ ハサミ！？」

「ん？ シザーマンだな。丁度いい、そつちの窓から覗いて見る」

馬鹿馬鹿しいと言いたげな顔を魔王に向けた後、渋々窓際に向かう姫。

だが、その余裕綽々^{しゃくしゃく}だった笑みも、窓から庭に視線を向けると、瞬く間に消えた。

「…………、シザーマンでいいわ」

そう言い、姫は疲れた顔をしながら、力なく元いた席に付いた。直後、小ボスが思いだしたように口を開いた。

「それよりも魔王様、城の方の修繕しゅうせんつてやつぱりもつ終わつてゐると思ひますよ」

えつ？ それはどういふ事だ！？ 疑問に思つ魔王は小ボスに対し、続きを促す。

「あのですね、魔王城改装の時に門などの施設設備はすべて直したと中ボスに聞いたよ

「では、俺の切手を売つて得た金ほどこへ消えた？」

『.....』

《横領おうりょうか！？》

魔王含め、どうやら同じ結論にたどり着いたようだ。

「では、私の切手代は無駄だつたのかー！？」

「今の話を何の疑いもせず、鶴呑つるのくみにしたらそうね」

「とりあえず中ボスに聞いてみましょ」

姫の提案に乗り、再び中ボスの部屋を田指した。

- - - - -
パートへ

第五話『魔王様の給料は 制!?』パート?

第五話『魔王様の給料は 制!?』パート?

中ボスの部屋に着いた俺達だが、部屋の中には誰も居なかつた。

「…………、いないね」

「どう見ても不在ね」

「一体中ボスはどこへ行つたんだ?

何処へ行つたのか、考えて居ると、そこへ一人のステイヴン・セガ……女性が通り掛かつた。

「あつ！ 佐藤さん！ 丁度よかつた。中ボス見ませんでしたか？」

「あら魔王様、中ボス様なら部屋の中に居るじやなくて？」

「それが居ないんです、ほら」

魔王は、そう言い、クック佐藤に中ボスの部屋に入つてもうつた。

「おかしいわね～、私、今日この廊下の掃除担当だから、ずっと廊下に居たけど、中ボス様は部屋から出でていないわよ」

その後、クック佐藤は掃除を始める為、再び廊下に戻つて行つた。

「あのクック佐藤さんでしたっけ？なんか沈黙のちんもくつてタイトルの映画に出てたような……」「出でるよ」

魔王は驚く姫を置いて、部屋の中を探索した。

姫はその後、「突っ込んだら負け……突っ込んだら負け……」とつわ言のよひ言つていた。

「ねえねえ、魔王様。この本、なんかおかしくないですか？」

魔王は小ボスに呼ばれ、書棚に近付いた。

「何で巻数が揃つてないな」

妹や小ボスならともかく、中ボスが本を整理しないとは考えられない。

魔王はとりあえず巻数を順番通りに並べる事にした。

「…………、（これ、なんかのゲームみたいだな）」

魔王は、少し疑問に思いながらも巻数を並べる事を終えた。

そして、その時、部屋の中で、カチャリと言ひ音と共に、ゆっくりと書棚が横へスライドした。

「うわっ凄いバイオハーデみたい！」

「ちょっとー あんた達何やったのよーー？」

「とにかく中に入るぞー！」「おーッ！」

「ちょ、ちょっと待ちなさいよー！」

そして俺達は、書棚に隠されていた階段を下った。

「ほへ～」

「何よこれ？」

石作りの長い階段を下り、開けた場所に出ると、そこにあったのは……

巨大ロボー！？

魔王達の前に現れた物は、巨大ロボット。全長は十五メートルほどの人型ロボットだつた。

驚く俺達とは裏腹に、小ボスはロボットの周りをぐるぐる回りながら「ゴホンインパクト」と繰り返し言っていた。

「どうしたのですか監さん。こんなところに集まつて

「「中ボスー？」」

俺達は一斉に中ボスに近付くと同時に話しかけた。

「「——一体なによ、」」の口ボットは……『これ』『ハシインパクト』
だよね……?』「」

一人、まつたく違う事を言つてゐる者が居たが、誰も気には留めなかつた。

「私は聖徳太子じゃないので一人ずつ話して下せ。」

「じゃあ私が。『ゴボン、えー、あの口ボット何?』

「あれはですね。人型汎用決戦兵器『魔王ちゃんインパクト』です」

「「魔王ちゃんインパクト!…?」」

「今日はやけに声が揃つわね……」

姫は若干嫌そうな顔をしながら魔王の方を見てた。

そんな視線を向かれながら、魔王はその兵器について訊いた。

「それで、なんなんだその『魔王ちゃんインパクト』とは?」「インパクト! インパクト! かつこいい!」

「役立たずな、魔王様を補うために作りました」

「酷いッ！ うわっ！ 他の連中は「つるつる」と額きながら、妙に納得してゐ……」

「それより、このロボットって何処か凄い所つてあるの？」

姫の言葉に中ボスは不敵に笑い、眼鏡を掛け直した。

「『魔王ちゃんインパクト』には汎用兵器と名前の通り、沢山の兵器が搭載されています」

まずは、と言ひ中ボスが説明を始めた。

装甲は五種から構成される－複合装甲 コンポジット・アーマーを採用。

更に爆発反応装甲の発展型である電磁装甲を各所に重要箇所に付けています。

原動力は常温核融合炉を採用し、汚染や爆発の危険性はありません。万一一の場合にも安心です。

更に各所に……、

凄まじいペースで喋り出す中ボスに姫は指を指しながら、魔王の方を見た。

「ねえ、魔王、中ボスのスイッチ押しちゃった？」

「まあ中ボスにはやや説明癖があるからな。

今まで注意していたが、新しい兵器を作つたとあつては仕方ないか……」

「私が話振つたのが原因だけど、どうするのアレ？　まだ説明してるわよ」

両腕には百一十? 滑腔砲かくくうぱうを搭載。弾は装弾筒付翼安定徹甲弾A P F S D Sを主に使います。

接近された場合には全身に装着されている、十一門の七・六二mmのミニガンで対処します。

更にこの魔王ちゃんインパクトの最大の特徴……、

「聞いていますか皆さん……！」

「「はつ、はいッ！」

その後、魔王と姫は一時間ほど説明を聞かされ、小ボスはいつの

間にか寝ていた。

「ふうへ、ほんとひですかね、トイレ休憩を挟んだ後に説明します

「『まだ、あるのー?』」

『あぜん然とする魔王、そして姫のことが氣になり、横を見ると

「ー? あの姫?」

「ナニッ!」

「怒つてらつしゃる?」

「ふふふ、怒つて無いよ!」と見えて?」

十一分にブチ切れでらつしゃるトトロで……
「めかみに青筋浮かべてるよ……。

そんなやり取りをしていると中ボスは物凄い眼光でひかりを見る
と「お暇ひつですね」と言いつ、後ろを向いた。

「ー! いやそんな事無いぞ」

中ボスの背中に向かつて必死に弁解するが、既に、聞いて居ない
ようだった。

「そうですね、では飴と鞭作戦で飽きずうに説明を致しましょう」

そう言い、中ボスは大きな箱から小さいボトルを取り出し、俺達
に見せた。

「！－！　おい中ボス！　俺のボトルシップに何をするつもりだ！」

「何つて？　もちろんん！」褒美ですよ？」

「どういつ意味だ？」

「魔王様と姫様が私語をしないで、一時間黙つて聞けたら一つ返却
します。喋つたら……」ガツシャン

「割れたわね……」

姫が無残に碎け散つたボトルシップの残骸ざんがいを見ながら呟いた。

「何故意味も無く一つ壊した！－！」

「魔王様は何だかんだ返してもういえると思つてそうですから、見せしめに一つ壊しました。

「これで私も、本気だという事が分かつていただけました？」

「どう考えても『飴と鞭作戦』じゃなくて『鞭と鞭作戦』じゃねえか！ 優しさの欠片もねえよ……」 ガツシャン

「イヤーもう止めて……！」

更なる被害者を見つめ、涙目になりながらも、魔王は残りのボトルシップの残数を盗み見た。

……軽く一十はある、どう考えても全部持つて来たと見て間違いないだろ？

「でも、さつき『魔王様と姫様が私語しない』って言つてたけど、何で私も入つてるの？」

「ああ、それはですね」 ガツシャン

うわあああ俺の力ティサークちゃんが…… 遠慮なく、そして躊躇なく落としたよ！

いやもうむしろ叩きつける勢いだったよ……

「ああ、それは魔王様の力作を遠慮なく壊す為に付け加えた条件です。

これががあれば私は魔王様に話しかけなくても姫様に話し掛ければ、ボトルシップを壊せます。

誰かが一生懸命作つた物を、目の前で破壊できるといつのは何物にも代えがたい価値がありますよね」

「鬼！ 悪魔！ 鬼畜！ 悪鬼！ 外道！ 下郎！ 化生！」 ガツ
シャン

「ぎやああー 一気に七個も！」

「へー、別に私は痛くもかゆくもないし、はつきり言つちやうと中
ボスの説明も聞き飽きてたのよね」 ガツシャン

「そうでしたか、まあ私としても少し度が過ぎたとは思つてします
けどね」

「なんだ、わかつていたの？ 中ボスも人が悪いわね」 ガツシャン

「お前ら一人揃つて天魔鬼神かよッ！！」 ガツシャン

もう語尾にガツシャンが付くのが普通に思えて來た……。

「おつと、そういうば魔王様」

「…………（俺は喋らない、俺は置き物、俺は背景、俺は……）

「あくまで喋らないつものですか？ まあいいです。それよりこ
れをご覧ください」

そう言い、中ボスが一つのボトルシップを天高く掲げた。

「…………（あれは俺『日本丸』一世……）

百分の一モ^デル版！！百分の一にしても一メートルを超える全長からボトルシップ化は不可能と言っていたが、俺が独自にボトルを鍛治師に特注で作らせ、その中に組み立てる事により完成した力作！

制作時間八百は伊達じゃないッ！」

「ツ！」

「おつと魔王様、そこを動かないで下さいね」

魔王は一拳手一投足に気を付け。中ボスから日本丸一世を奪い返すチャンスを窺っていた。

今は一瞬たりとも目線を姫の方へ向ける余裕がないが、先ほどまでのボトルシップとは大きさが十倍以上違う日本丸一世を見た姫は、流石に黙っているようだ。

両者の距離はおよそ二メートル。

魔王は拳を握り閉めたまま、中ボスはボトルシップを頭の上に掲げている。

時間が徒に流れ、両者はひたすらに睨みあうばかりであった。

「……（どうする？この間合いでは中ボスを力でねじ伏せたとして、日本丸一世を無傷で取り戻すことが果たして可能か？）

魔王は少し、ほんの少しだが、間合いを詰めた。時間にして半呼吸分、その動きを中ボスは見逃さない。だが、動いたのを分かつていながら、落とさない。

……まさか、本当は落とさないのでは？ 魔王はそう思い、先ほどと同じように間合いを詰めた。
既に膠着状態に入つてからハ呼吸。

時間など無意味かもしぬないが、中ボスはあの大きさのボトルシップを両手に持っているのだ。
仮に落とそうと思って動いても頭上にあげた腕は既に関節がロック状態になつている。

あの状態なら、多少は腕の負担が軽くはなるが、素早い動きは不可能。

更に近付く、その刹那、中ボスもまた動いた。

中ボスは腕をやや前に倒し、いつでも落とせるとこづつ態勢に移行した。

間合い、落とすタイミングを見誤らなければ救出可能。

「……（長い）」

「……（もう言つた姫よ）」

「！？（ちょっとー 何私の思考読みどつてるのよー）」

「……（中ボスの思考を読みとらうと思つて、術を仕掛けたが、生憎、アイツの思考が読みとれない、代わりに貴様の思考が届いた）」

「……（ちよつとー、それって私にプライベートも無いって事！？）」

「

「……（ねえねえ魔王様、なんか楽しにことやつてるようですが、何してんですか？ ルールはなんですか？）」

「……！？（ 小ボス！？）」

「……（ねえねえ、僕はどうすればいいの？）」

魔王は、しばし動きを止め、小ボスの位置を探つた。
中ボスの後方五メートルの位置！？ これはチャンスか！？

「……（小ボス、中ボスが持つているビンが見えるか？）」

「……（うん、あがどうかしたの？）」

「……（あれを奪つて、俺の所に持つてこい）」

「……（分かりました～）」

小ボスは元気よく返事をすると、ゆっくりと中ボスに近付いた。
流石は小ボス、まったく気配がない、あれなら中ボスも気が付かないだろ？。

「今だ小ボス！！」

魔王の声に中ボスは初めて小ボスの存在に気が付き、後ろを向いた、だが、間に合はずもない。

小ボスは一気に間合いを詰めると、中ボスの魔の手から魔王のボトルシップを奪い返した。

「魔王様～、取つて來たよ！」

そう言い、小ボスは魔王に向かつて走り寄る。その刹那。

「あつー！」

小ボスは足元にあつたレンチに躊躇^{つまづ}いた。

！？

まるでスローモーション、あるいは走馬灯のようにゆっくりと小ボスがボトルシップと共に倒れる。

ガッシュ

一際、大きな音を立て、一つの巨大な瓶が割れる。
呆気にとられる皆の視線を浴びながら、小ボスはゆっくりと立ち上がる。

倒れて小ボスは、服に着いたガラスの破片を手で払い。
気まずそうに、頬を指搔きながら、魔王の方を見た。

「……えへへ、タツチダウン？」

ええ、それはもうプロ顔負けの完璧なタツチダウンでしたよ……
あれならアメフトの選手も夢ではないね……。

明らかに、顔が真っ青な一同。

そんな気まずい空氣の中、いち早く中ボスが動く。

「……では私は夕食の用意の方がありますのでこれで

「私も見たいテレビがあるから、じゃあね」

「？？ 僕も行く」

皆、魔王の悲しげな背中を見るに堪えなくなつたのか、足早に退出していく。

誰もが、魔王に掛ける言葉を持たなかつた。

……。

魔王は静かにボトルシップの残骸を両手で拾いあげた、だが、既にボロボロの船体は脆くも崩れ落ちた。

そんな残骸を魔王は黙つて一つ一つ、宝石のよ^うに扱い、拾い集め。
それを愛しむよ^うに見つめた。

「これは横帆おうはん……それでこっちが縦帆じゆうはん……はははつむつどりちがどつちか分からないや、あはは、あはは……」

第五話『魔王様の給料は 制一?』パート?（後書き）

話を一つに分けてしまって申し訳ございません、話しの落ちを考えるついに何故がどんどんグダグダに長くなってしましました。ごめんなさい……以後気を付けるようにしますので、はい……

第六話『地球外勇者！？』

第六話『地球外勇者！？』

魔王は一人、王室で真・魔王神宮の前に鎮座していた。

「我々は三年待つたのだ……」 本当は一年と一ヶ月だけです。

魔王の手には待ちに待った欲望のゲームを握り締め。
その箱の中のディスクを取り出した。

「待ちに待つた時が来たのだ！ 多くの英靈が無駄死にで無かつた
ことの証の為に……」

「ソロ ンよ！ 私は帰ってきた！！」

「ぱちっとな」

魔王はアホぽい掛け声と共に真・魔王神宮の電源を点け。
パソコンの起動を待つ間、嬉しそうにゲームのパッケージを見つめた。

その顔はまるで同心に帰った子供のようだった。

そして、魔王が、パソコンの中にディスクを入れ……

バタバタバタ……バアン

「魔王様ツ！」

魔王は突然の呼び声に、あわてて席を立ち、後ろを振り返り、声の主に怒声で返事をした。

「何事だ中ボス、今は真・魔王神宮の中に住まう。
エロゲノ神の為に大切な供物新作エロゲ
インストール中を捧げている最中だぞ！
場をわきまえろ」

何故か中ボスの後ろには、小ボスに姫、それに妹の姿。

怒声が響く王室には、今まさに、フルメンバーが揃つた状態になつていた。

「正直、『ルビ』のオンパレードで言つてる事がそつぱりです」
「まあいい、それよりどうした、そんなに急いで」

魔王の問いに、姫が一步前にでると

「魔王、また魔王城に勇者が來たのよ」

何だ、そんな事か。魔王は特に気に留める様子なく、再びパソコンの前に座つた。

「おにい、姫や中ボス、それに小ボスまで急いでこつちに來たのよ。

緊急を要しているのは明白でしょ？」

「そりいえば、そりだな。で、どうしたお前ら。核弾頭でも奪取されたのか？」

「それが……今回の勇者は一味違つ��なんです」

「？？ 違う？ いつもの勇者との相違点はなんなのだ？」

「既に建て直しが完了したゲートが最終ライン手前まで破壊されています」

最終ライン手前まで迫っているだと…？

パパ上の援助と切手のおかげで制作にこぎつけた人型汎用決戦兵器『魔王ちゃんインパクト』が配備してあるはず…！

あれは姫でも苦戦をするはず。それを撃破したと言ひひとか…？

「『魔王ちゃんインパクト』はどうした…？」

「すさまじい突破力を持っていたので、非常事態と思い、独断で投入しましたが、結果は…」

中ボスは悔しそうな顔をしていた。

無理もない、あの『魔王ちゃんインパクト』は、中ボス自ら設計、開発した機体だ。

「役立たずな、魔王様を補うために作りました」と言われたのはひどく傷ついたのでよく覚えている。

一話前に登場したばかりなのにもう破壊されてしまうとは、俺の名前を取つただけに悲惨な最期ひさんさこじを迎えたか『魔王ちゃんインパクト』よ……

「直に中央司令室へ向かうぞ、私はら、指揮を執る」

了解

「えっ！？ あんた達、何いきなり士気が高いの！？」

困惑する姫を連れて、司令室へ移動した。

「全員持ち場へ。姫はそこで座つてろ、今回はお前は見てるだけでいい、だが絶対に邪魔をするな」

「小ボス、勇者の映像出せるか

小ボスは頷くと、コンソールを叩き、中央の大型ディスプレイに勇者の映像を出した。

……唖然。

「そうです、これが勇者です」

先ほどまで、一人で司令室にいた中ボスは既に勇者の顔を見ていたので、皆ほど驚きはしていなかつたが、それでも気分の悪そうな顔をしていたのは一緒だつた。

「これが勇者……あればどう見てもプレデタ　じゃない」

「よかつたな姫！　お前より強い男？　が現れたぞ！　きっと女子供には優しいぞ！」

「嫌よあんな怪物！　どう見ても地球外生命体じやない！！」

発狂寸前の姫に、フォローをする事にした魔王。

「大丈夫、例え同じ地球外生命体でもエイリ　ンよりマシだよ！」「どっちも嫌よ！…」

説得失敗！？

「まあいい、とにかく姫は落ち着け、皆もだ。ほら、姫、そこに早くお座り」

魔王はそう言い、姫に自分の隣に座るように指示をした。

憔悴しきつた姫は特に口答えも不満も無く腰を下ろした。

よし来た！ 魔王がそう思つたその刹那。

ブウウー！

突如、司令室でオナラの音が鳴り響いた。

「姫、こんな時に、おならをするんじゃない！」

「アンタね！ それは私の台詞よ！ こんな時に私の席にブーブー
クッション置くんじゃないわよッ！！！」

そして、殴られる魔王。

「イテテ。俺の有能な脳細胞が一億は死滅したぞ！ 人間は頭を一
回叩かれるごとに六百万個死滅するだぞ！

総量では百六十億個しか脳細胞は無いのだぞ！」

「じゃあアンタの頭を先ほどと同威力で、あと百六十回叩けば脳死
してくれるのね！！」

姫は、魔王にゅつくりと間合いを詰め始めた。
その顔はまさに阿修羅あしゅら、鬼の形相きのかいじょうである。

「敵勇者、現在第三ゲートに接近中。魔王様、姫様。そろそろ夫婦

漫才はやめて、眞面目にしてください」

「「誰が夫婦だ！！」」

くそつ綺麗に揃つてしまつた……あいつら一ヤーヤしてやがる！.

「ゴホン。ではこれより、勇者撃退作戦を開始する」

「小ボス、勇者の戦闘力はどのくらいだ？」

「出ました！ 五十三万です！」

なんて戦闘力だ！ フリー 並だと！？

「姫様の戦闘力が七十万。妹君が七十四万。僕が六十六万です」

ははっ……何でたくましいの、乙戦士がいっぱいだ！

「俺は？」

「…… 五です」

「うわつアンタ弱いとは思つていたけど戦闘力たつたの五！？ ゴ
ミじやない！！」

「姫、おには後、変身を二回残しているわ
「そうですね、魔王様は用を見ると

」

「皆さんそろそろ自重してください、怒られます

わかつた

「では妹、お前が撃退に出向いてくれるか？」

妹は鼻で笑うと、席から立ち上がり

「良いの？ おこい、私が行くと、被害がでかくなるかもよ。」

「なんかの拍子に小ボスが本気出すよつもマシだ、行つてくれ

「そうね、なら私の方が適任ね」

妹は揚々と司令室から出ようとした時。

「ちょっと待つて、確かに妹ちゃんの方が強いかもしけないけど、別に私でもいいんじゃないの？」

「お前、あんな気持ち悪いのと戦いたいのか？」

「……、
「じゃ私が行くわね」

そうして妹は出で行つた。

「妹ちゃん一人で大丈夫ですかね？ 心配なので僕も見て来ますね」

「座つてろ」

魔王と中ボスの声が同時に上がり、小ボスしゅんとしながらも、素直に座つた。

崩落寸前の第三ゲートの前に立つ妹。その手にはトンファーが握られていた。
最新式の防衛設備でもまったく役に立たなかつた相手に対して、あまりにも頼りない武器。

だが、妹は自分が持つているその武器が『頼りない』と思つた事は無かつた。

妹は、自分の手の中に握られているトンファーを、改めて見つめ、握り直した。

そんな事をしていると、妹の前に有つたゲートは凄まじい轟音と大量の砂煙を上げながら崩れた。

「ぐははは！ 貴様が魔王軍の兵か！ 変な機械しか居ないと思つたが、ちゃんと兵が居るではないか！！ やはり本物の肉を裂いてこそ戦いよーー！」

「…………」

「どうした、恐怖で声も出ないか！ がははは」

「貴方本当に勇者？ まあいいわ、相手してあげる。貴方の罪を数えなさい」

妹は勇者を蹴り飛ばす、その事しか頭に無かつた。だけどそれだけ総て事足りる。

妹は地を蹴り、勇者に向かつて跳んだ。

次の瞬間には妹はその場から消えていた。

妹が居た場所には砂塵だけが残されていた。刹那、暴風と爆音が辺りに包んだ。

「ー？」

妹はただ勇者との距離を詰める為、接近しただけだ。だけど、その速度は音速に達していた。

そして、その勢いで蹴る。「トンファーキック！」それだけで決着はついた。

「ぐつ……貴様、なぜそんなにも強いのだ……」

妹は内心、何かを期待していた。

「…………（シシ「ハリサ無しなのかしら?」）」

妹は諦め、勇者に向かつて指を指し。

「私が、私たちが魔族よ」

そういう、妹は城に帰つていった。

「どうだ姫、妹は強いだろ」

魔王は王室に戻り、再び真・魔王神宮の前に腰掛けた。

「何でアンタが自慢げなのか分からぬにけど、強さは本物ね技術は無いけど剛力は圧倒的ね」

「…………」

「ん? どうしたのよ? 必死な顔で、箱の中なんて覗き込んで?」

「起動コードが同封されて無いー」

シリアルキー

これじゃあせっかく発売日に買ったゲームがプレイできなーいでは無いか！

「……この箱の中には紙は居ない！」

世界

神

第七話『魔王、一次元に立つー?』（前書き）

今回、後半部に、やたらとスペースが入っているので携帯版などでは読み難い可能性があります。読みづらいうこと言われたら修正致しますので。

毎回タイトルが書き終わってから十秒程度で決めてる気がする……
あつ前書きで書く事じゃないよね……

第七話『魔王、一次元に立つー?』

第七話『魔王、一次元に立つー?』

「早くもこのシリーズ、マンネリ化してるとよな」

魔王は王室に入ると、眩くようにして、皆に言い放った。皆が、無視する中、姫と小ボスだけが呆れながらも反応する。

「何よアンタ。部屋に入つて来るなり、何を言い出すと思つたら…頭でもおかしくなつたの？」

「そうですよ、魔王様。いくらエロゲ脳だからって、現実世界をクソゲーと言つ出したら終わりですよ」

「うひひ。いや俺だつて別に現実がクソゲーと言つつもりはない。

だがな……うひ……もう少しイベントが欲しいっしー！」

「具体的に、魔王様はどんなイベントが欲しいんですか？」

小ボスは興味津々だが、姫と中ボスは興味が無さそうだ。妹に至つては同人誌を読む方が大事なようだ。

「まあ具体的にあれがしたいとかは無いのだが、……うーん。ああ、そうだ、学園物のエロゲみたい展開が欲しい

「 キモツ」

「魔王様気持ち悪い」

「流石に引きます……」

うわ……威冷たい……正直に欲望を口にしただけなのに……。

「おにい、ならこんなゲームがあるけど」

妹は同人誌から顔を上げ、横に置いてあつたカバンから一つのゲームを取り出した。

「なになに……『バーチャル仮想学園アールタイプ』？ なんだこれは？」

「あれ、おにいは知ってるかと思つてたけど。まあいいわ軽く説明してあげる」

バーチャル仮想学園アールタイプとは、

変態企業、『G線上の魔王ソフトウェア』から発売した全年齢対象ゲームソフトである。

このゲームの最大の特徴は、実際の人物が約百五十の質問に答える事によって。

攻略キャラ自体の性格が、そのインプットした人物になるという物だ。

技術的な事は一切不明だが、G線上の魔王ソフトウェアの公式サイトで、有名人の性格データを配信する事によつて。

実在するアイドルを疑似的に攻略する事も可能になり、爆発的な売れ行きとなつた。

「おお～これが噂のソウガク仮想学園か！！

各店舗でもすぐさま売り切れになり、オーナーで買おうにもメーカー価格の三十倍以上の値が付いて、幻のギャルゲーソフトと言われたソウガクを何故お前が？」

妹は無い胸を必死に誇らしく張りながら、魔王に一枚のカードを手渡した。

「ふふふつ、私を舐めないでもらえる？ もちろん手入れるのは大変だつたわ。

極秘裏に、おにいの財布からこのクレジットカードを抜き取ることが、どれだけ大変か」

「…………

魔王の表情は絶望に染まり、顔は涙でぐしゃぐしゃになつていた。駅のホームで、こんな表情の人立つていれば、人々は警戒し、駅員は止めに走るほどだ。

「うわっ妹ちゃん、外道……」

もちろんクレジットカードは、家族であつても無断使用はいけませんよッ！

「ねえねえ、それより早くやつてみよッ！」

小ボスは無邪気にゲームソフトをゲーム機本体に挿し入れた。

「くそつこいつなつたら自棄ナガヤだ。元が取れるくらいの勢いでプレイしてやるッ！」

魔王は張り切りながらも、一度席を離れ。長時間連続プレイの為のトイレに行つた。

「魔王さま、質問の方は一通り終わりましたので、プレイ可能です

よ

「流石だな、ではいざッ！」

NowLoding

クズオ「俺の名前は『塵^{ゴミ} 肩男^{クズオ}』。」

今日からこの私立バー・チャル仮想学園」と『ソウガク』に入学する事になっている

「なんだこの悪意たっぷりの名前は？」

そんな理不尽なネームにも負けずに頑張る主人公……まるで俺を見てるようだ。

クズオ「この学校で彼女を作つて、俺の灰色だった人生を一瞬でバラ色に変えてやるぜえッ！」

『そう意気込み、入学式に臨む、クズオ。

どこに行つても校長の話しが長いってのは変わらない

などクズオは思いながら、

退屈そうに視線を泳がしていた

『「新入生代表挨拶」と耳に届き、クズオは目線を壇上に移した』

クズオ「……かわいい」

『クズオが壇上に視線を向けると、そこには赤髪の少女が、必死に新入生代表挨拶とやらをこなしている真っ最中だつた』

「新入生を代表して一言、ご挨拶を致します……ううつマスクが高すぎるわ……」

『マイクと少女の身長はやや不釣り合いだった。
それを補う為に少女は背伸びをし、それでも足りないので
つま先立ちをしている格好になっていた』

『皆がスピーチの内容では無く、
少女が一生懸命マイクと格闘している事に注目が行つてい
る事は明白であった』

？？ 「新入生代表『姫』」

『スピーチが終わり、今までとは比べ物にならないほどの大
な拍手が体育館を包んだ。

少女は誇らしげに壇上を下りて行った

『皆、口々に「よく頑張った」などと保護者のような事を言
つていた』

『入学式も終わり、その後、俺達は各教室に貼り出された名
前を確認し、所定の席に着いた』

クズオ「一年四組か……そりゃ『あの子』がどの組かチェック
しておけばよかつたな」

『クズオは窓際の一一番後ろの席で、アクビを噛み殺しながら、
つまらなそうに外を眺めていた』

？？ 「『んこちわ』

クズオ「あ？」

『突然の挨拶に、クズオは顔を左に向けると、声の主を見た』

姫 「こんちわ、ゴミ君、隣の席ね」

クズオ「どうして僕の名前を？」

『混乱するクズオに対して、姫は至って冷静に答えた』

姫 「ゴミ君は、外に張り出されてた紙で前後左右の席の人くらい確認しなかつたの？」

クズオ「……ああ、それでか。こちらこそようじく、えーと姫ちゃんでいいのかな？」

姫 「もー、私達クラスメイトなのよ。姫でいいわよ」

クズオ「じゃあ僕の事もクズオで。よろしくね姫」

『そう言い、クズオは手を姫の方へ差し出した。
だが姫はその手を見ると、すぐさま撥ね退けた』

クズオ「!？」

姫 「馴れ馴れしいわね、私とアンタの関係を忘れたとは言わせないわよ？」

アンタは私の従者なの。わかる？ 奴隸なのよ？ 分かって

たら『ワン』との體セラー

選択肢。

一、
ワン

二、
黙れ腐れビ
チ

魔王はコントローラーを画面に投げつけると、姫の方を睨んだ。

「何よ！ 私はただ質問の答えだけよッ！」

「なんでゲームの中ですら、上下関係が変わつてないのだッ！　ゲームの中でくらーこペコアで居たいーー！」

「それなんだ？ プレイ中にはツツコミ入れなかつたけど、『塵男』^{クズオ} つて酷すぎないか！？」

めたんだろ？！

文句を一通り言い終わった魔王は、肩で息をしながら、もつ一度コントローラーを握った。

「……魔王様、あれだけ文句を言ってたのに、もう一度プレイする

「ですか？」

「とつあえず田の前にある選択肢だけは片付けないと気が済まぬッ！」

そう言い、魔王は、クイックセーブを行ない、選択肢を選んだ。

.....Now Loading

クズオ「ワン」

姫 「あははは、ホントに行つたわコイツ！ いいわ、一生こき使つてあげるッ！」

クズオはその後、ぼう雑巾のように姫に扱われ、そして死んだ。

B A D E N D

啞然としながらも、魔王はクイックロードをし、もう一つの選択肢を選んだ。

.....Now Loading

姫 「へー私に逆らつの？ いいわ、私に逆らつた事、死ぬほど後悔させてあげる」

姫はクズオを限界までいたぶり。

クズオは体験がトラウマになり、一生家で引きこもり、ゲーム漬

の生活となつた。

B A D E N D

「あはははっ、今の魔王様みたいになつちゃいましたね」

「…………（小ボスって何気に一番外道よね）」

「…………（また小ボスのオーバーキルですか）」

姫と中ボスは奇跡的に同じような事を同時に思つていた。

「おにい、大丈夫よ」

「？？」

既に半死半生はんしあんじょうのに成りながらも、魔王は妹の方を見た。

「『小ボス』と『中ボス』のデータも入れてあるからそつちの攻略も可能よ！」

妹は嬉しそうにサムズアップをすると、再び魔王にコントローラーを手渡した。

その後、魔王は、小ボスルートも中ボスルートも見事攻略。

ゲームを終了後、小ボスと中ボスを見つめる魔王の眼は、どこか熱を帯びていた。

H ハッシュ
A ビー
P ハンク
P ハンク
Y ハンク

E
N
D

?

第七話『魔王、一次元に立つー?』（後書き）

本当にマンネリ化してるんじゃなかろうか……。
エロゲ回みたいなのはまた今度ゆっくり書きたいな～（願望）
エロゲのシナリオライターになれたら面白いだろうな。
あと、今回クズオなどの台詞前に名前が入っていますが、エロゲとかノベルゲーにはよくある事なので、それは脳内修正でお願いします。

第八話『小ボスと中ボスの秘め事！？』

第八話『小ボスと中ボスの秘め事！？』

『バー＝イ、もう戦わなくていいんだ』

「うううう……」

「おにい、いないの？ ノックしても返事無かったか……えつ！？ なになに！？ おにい何泣いてるの？」

「ああ、妹か……これだよこれ」

魔王は自室でアニメを見ながら涙を流していた。

妹に教えるようにして、テレビの方に指を指し。

その手で、ティッシュペーパーを一枚抜き取ると、それで鼻をかみ、ゴミ箱へ投げた。

「うう……バー＝イが死んじゃった……うわあああ

「今更、ポケ戦？ でも昨日は〇八見て無かつた？」

「ぐすん……ぐすん……つえ？ ああ。お前が見かけた時に見ていたのは確に『第〇八MS小隊』だな。

宇宙世纪
昨日からずっと、機動戦士ガンダムのじこ歴の作品を見直しているんだよ」「

魔王の言葉に、妹は部屋を見渡した。

確かに部屋には沢山のビデオ、DVDで溢れ返っていた。床に転がっている飲み物などの量を考えると寝間に見ていたと容易に想像できる。

「それより、如何したのだ妹よ」

魔王の言葉に、妹は何故自分がここへ来たのか思いだした。

「おにい、おかしいのよ、小ボスも中ボスも今日は全然見かけないのー」

「……そりやお前のB^{ボーヴィズラブ}」の同人誌のネタの為に絡みを強制的にやらされるのであれば避けるのも仕方ないだろ?」

「いいえ、避けるなんてそんな生易しいもんぢやないわ、城に居る他の人たちも、今日は中ボス達を見て無いって言つてたのよ」

「それはおかしいな、中ボスなら自分の部屋で事務仕事の為に缶詰状態になっている事はあるが、一日中、小ボスを見かけないというのはおかしいな」

魔王の言葉に、妹は、でしょー、と同意するよつて言つた。

「少し捜して見るか

魔王と妹は小ボス達を捜索始めた。

「でしょ全然いないでしょ？」

魔王達が三十分ほど城の中を捜したが、気配すら感じなかつた。

「……王室も捜したし、それ以外はも小ホフが行きそうな所は全部捜し

「ああ、一通りは捜した……、ん？」

魔王達は顔を見合わせると。

「「小ボスの自室！？」」

妹と魔王は同時に声を上げた、普通であればまず最初に捜す場所だが、魔王達はまだ捜索していなかつた。だが、それには訳があつた。

「……こひせ」

小ボスの部屋の付近に近付いた所で魔王が呴いた。

「おかしい、この周りに“人除け”の結界が張られてる」

「ん？　おにい、それはどうこいつ」とへ。

「お前……それくらい知つておけ。まあ端的に言つてだな『近寄りたくない』と思わせる結界だ。

この結界が張られて居れば、たとえ遠回りになつたとしても結界を迂回して移動してしまう

「だが、ここ辺を捜索しなかつたのね」

「ああ、基本的には気が付く事も無いかもしねないが、俺達は明確に小ボス達を捜し、行く可能性の場所を虱潰しづめして捜した。だから結界の効果があろうと、小ボスの部屋を捜索しないという事実が浮き彫りになつたという訳だ」

「そこまで気が付いてしまえば、俺達に対しては、この結界は無効かされてしまつていると言つてもいい」

魔王の言葉に、妹は関心したよつてうなづいた。

「じゃあ、小ボスが近寄られるのが嫌で、その結界を張つてゐてこと？」

「いや、こんな魔法は小ボスは使えないはずだ、この城で使えるとすれば、俺が中ボスだけだ」

「じゃあ、今、中ボスと小ボスは一人でいるって事？」

「ああ、その可能性が高いだろ？な」

魔王と妹はどちらも無く、小ボスの部屋に向かって歩み始めた。

「 ッ！ 止まれ！」

「 キヤアー！ ……ちよつと向よおこーーー！」

魔王は妹の服の襟首を掴むと、強制的に歩くのを止めた。

「 ここにも結界がある。……これはサーチ系の範囲魔法だ。これより一步進んだら、中ボスに察知される。

範囲魔法を一重で使うとは、凄まじい念の入れようだな。流石、中ボスと言つたところか」

「 壊めてる場合じゃないでしょー…

どうするのよおにい、これ以上近寄つたらバレるつて。

それじゃあ小ボス達が何やってるか分からぬじゃない！

「 まあまた、この魔法は電波のような物だ、逆相の周波数を当ててやれば相殺できる」

魔王はそう言い、目を閉じ、魔力を両手に集中させた。

その両手は察知される位置ギリギリの位置に置かれていた。

(本気で中ボスがこの魔法を駆使していれば、俺でも解除是不可能

だ……だが)

「ふんッ！」

両手に集めた魔力を一気に解放すると、まるで魔王達と廊下の間に
には透明なガラスが有つたかのよつて、その魔法が砕け散つた。

「す、じこ、やすがおにいねー！」

「はは、もつと褒めろ妹よー！」

魔王は高笑いを浮かべながら、再び廊下を進んだ。

（あの術は低レベルな物だつた。もし本氣で術を練つていたりとも
も破れなかつただろう……）

魔王はそんな事を考えながら、小ボスの部屋の前に立つた。

「…………ねえ、ここからどうするの？」

「俺に聞くが、とつあえずアドアにでも耳を当ててみればいいのでは
ないか？」

魔王達はやつぱり、もつとアドアに耳を当てる。

『……準備はいいですか小ボス？』

『うん……でもね中ボス、僕、まだ慣れてないから優しくして』

『あはは、分かっていますよ。ではゆっくり入れていきますね』

『んッ……ああつ……ふあつ！？』

『どうしました？ 痛かったです？』

『ごめんね中ボス、痛かったわけじゃないんだけど、その……気持ちよくてつい声が出ちゃって……』

『もうだつたんですか、この部屋には私と小ボスしかいないのですから、声を出してもいいのですよ』

『うん、わかった。あつあつ……中ボスのが中で動いて……あん』

「 「 ……」

(お、おおおお、おにいッ！ しょ、しょ小ボスと中ボスは、い、い、一體何をしてるのッ？！…)

(おッお、おおお、俺に聞くなッ！…)

パニック！ 大きな声で喋る事の出来ない魔王と妹は、仕方が無いので、ジエスチャーで己の意志を伝えあつた。

だが、傍から見れば奇怪な踊りを踊っているようこしか見えない。

「アンタ達、小ボスの部屋の前でなにやつてるのよ？」

「姫ッ！？」「？」

「説明してゐ余裕すらない！ とにかくここに来てみろ」

「？？？」

姫は魔王達の顔を見ると、ただ事では無いと悟り、静かにドアの前に立つた。

『どうですか？ 痛くないですか？ もう少し奥に入れても大丈夫ですか？』

『あつ……うん、大丈夫だから。もっと……奥に来て……』

『はい、ではもう少し奥の入れますので、痛かつたらすぐに言つてください』

『…………ん、ああ……もつと……深くまで…………きて……ん

くつ……』

『どうですか気持ちいいですか？』

『…………うん、中ボスにしてもらうの僕、好き』

『そうですか、私はやられる、よりやる方が好きなので、テクニッ
クを褒められるのは嬉しいですね』

…………

(なつ……なななな、何やつてるのや小ボス達は！？)

(しつ、静かにしろ姫ツ！)

(……中ボス×小ボス……中ボス×小ボス……中ボス×小ボス……)

小ボスの部屋の前で不思議な踊りをする集団。
ジョン・チャーチ

傍から見れば危ない集団だが、この奇怪な踊りで会話が成立して
いるのだから、不思議である。

(止めなくていいの！？)

(俺に部屋の中へ、入れと……？？？)

(アンタ以外に誰がいるのよー？ 妹ちゃんは完全に妄想の世界へ旅立つたわよ！)

(……ナマモノ……ナマモノバンザーヴィー！ ジークナマモノ！…)

「 「 …… 「

『あつ……んつ……ぢゅ……中ボス……今つ……妹ちゃん……の……んつ……声が聞こえたよくな……』

『大丈夫ですよ、いつものように結界を張っているので、半径十メートル以内に入つて来たら分かりますよ』

『…………ああ……んつ、…………ああ……うん……わかった……』

(……だから結界張つていたのか)

(なに？ 結界が張つてあったの？ なのにアンタ達、わざわざ結界突破魔法を使つたの？)

(だつておにいが……)

(おこー！ 妹よ、お前が元はと言えばお前が言いだした事だらうが！…)

(だから残留魔力がここにあったのね)

混乱する魔王達だつたが、それよりも淫行の真っ最中？と思しき部屋に、誰が突入するか決めようとしていた。

(いい、最初はグーよ)

(ええ、いいわ。おにいは？)

(ええい！ こひなれば自棄だ！ 良いぞ掛かつてこい！)

意氣込む魔王達に対して、中ボスと小ボスの声が届く。

『終わりましたよ、小ボス』

『ありがとう、中ボス。やつぱりいいね“耳かき”つて』

.....

魔王達、顔を見合わせると……勢い良くドアを開け放ち、同時に

言い放つた。

そんな事だと思ったよー！

結局のところ、中ボスがこんなドードー寧に魔法を使っていた理由は。

「耳かきをしている時に、小ボスが驚いたら危ないじゃないですか。だから事前に入ってくるのが分かるようにしていたのですよ」と言う、母親ぽい理由だった。

「おひでしまえば早とちりである。

「おい、小ボス！ 中ボスの耳かきはそんなに良かつたのか！？」

「うん、凄く上手いだよ、魔王様もやつても『うえばこ』よ。」

中ボスはひどく嫌そうな顔をしたが、半ば強引に中ボスに耳かきをさせた魔王。

「…………あつ…………本當…………んつ…………これは…………んくつ…………ふあつ！
あつ…………そこは…………らめえ…………そこはらめえええ！」

連日に渡り、魔王城には、小ボスと魔王の氣色の悪い声が木魂じだましだまし

た。

余談だが、中ボスの耳かきの虜になつた魔王は、小ボスと競つようにして耳かきをせがみ。

後日、中ボスが二刀流で、同時に一人まで、耳かきが可能になつたと言うのは、また別の話である。

第八話『小ボスと中ボスの秘め事！？』（後書き）

これはちょっとHロイのか……？と思いつつ。まあ別に許容範囲だろうと思い。特に注意書きも無く、投稿。もし、『男と言えども、これは……』と思う方がいれば、ちょっと前書きの方で注意書き入れようかな～とは思っている。

第九話『貧乳はB A Dステータス！？』（前書き）

タイトルは相変わらず適當なので。気分で変わるかも……と良く言つてゐるが変更した事ないな……

第九話『貧乳はB A Dステータス！？』

第九話『貧乳はB A Dステータス！？』
「おっぱい……」

魔王は王座でHロゲのヒロインを見つめながら呟いた。
その瞳はある恋する乙女のような純粋な眼まなこだった。

「…………」

「あの、魔王様、約一名。物凄い殺氣を飛ばしておられる方が居ますけど、弁解か、謝罪、どちらかを早急に行つた方が良いと思いますよ」

中ボスの言葉に魔王は、恐る恐る後ろを振りいた。
そこには、魔王をくびり殺すのではないか？ と思いつほど殺氣立つてる人が一名。
ドアの前で静かに立っていた。

なんか、ゴーダードとか、デーデードとか背景に見えるのは『雲のせい』
だと思つ。

いや思おつ、思つておいつしきー

「なな、な、姫！？ 貴様、何処から湧いたのだ！？」

魔王は、あらう事が、一番聞かれてはいけない相手姫に聞かれてし

まつたのだ。

「人を害虫や湧水みたいに呼ばないで貰えます?」

眉間に皺しわを寄せながら、こめかみに青筋を浮かべてうつしゃる…！？？

魔王の中の腐ったエロゲ脳から醸し出される、脳内軍師が『はわわ、ご主人様。敵が来ちゃいました』とか言っている。

とりあえず脳内会議で導き出した答えは、兎に角、言い訳をするところ。

何ともまあ、ヘタレ過ぎて、逆に潔いくらいの発想だった。

「すまん姫、てつきり居ないと思つてつい…」

「『つー』ッて何よ…！… 悪かつたわね胸が人よりも小さくて…！」

私の胸がアンタに悪さした？ 迷惑掛けましたかね！？？」

……うわ～『胸が人よりも小さい』って言つたよ…
素直にまつたく無いと言えば良かつたのに…涙ぐましいな…

「…………いや、別にお前の胸の事を言つたのではない。ただ…」
「『ただ』？」

キヨロキヨロと視線を左右へ向けた後。魔王は覚悟を決めたように口を開いた。

「女性なら胸が大きいほうがツ　グアツ」

「うつさいわね！　これでも努力してるのよー！　人の努力も知らないで良く平氣でそんな事言えたものねー！」

激怒する姫に対して、中ボスはゆっくりと姫に近付き、諭すように「姫様、魔王様は完全に氣絶しています」と言い、中ボスはそっと心の「ヒングを鳴らした。

五分後……

「いててて……。まさか、ヒロインがロシアン・フックを顔面にお見舞いしてくるとは、夢にも思わなかつたぞ」

魔王はそう言いながら、額を撫でていた。

出血こそ無いが、一撃で重度の脳震盪(のうしんとう)を起こすほど拳が顔面に浴びせられた。

「あつ、魔王様が気絶した後も、姫様は追撃でボディーに一発入れてましたよ」

「お前ホントに“姫”かよッ！－」

魔王は、姫の方を見ると、気まずそうに眼を逸らした。
もつと姫を非難してやりたかったが、それよりも、今は腹部の方
が気になっていた。

魔王は、あつそつか……昼食はカレーだつたな。
と騒ぐ事を考えながら腹部を擦つた。

「べつ、別にアンタが憎くてやつた訳じやないんだからねッ－」

「そんなシンデレラいらねえよッ－
どこの世界にロシアンフックにボディーとコンボを入れるシンデ
レヒロインが存在するのだ！－」

「じゃあ何－？ 後で校舎裏とかに呼び出して、いひそりと闇討ち
すればいいの？」

「最早、発想がヒロインじゃありませんね……」

中ボスが呟くよつて言つたが、姫は更に言つた。

「それによ、私だって胸で物を挟むくらいこの事はできぬのよッ…」

「……じゃあその“小さな胸”でこの胸を缶潰してみる」

「ギネスブックに登録されるような胸はさすがに持つてないわよッ！見でなさい、このベンくらい胸で挟んで持ち上げて見せるわよッ！」

「…」

ナラフ言ひ、姫はペンを持ち上げると、両手で胸を寄せ始めた。

「 ッ

辛い…………もう見てられないと…。

そう思い視線を中ボスの方へ流すと。

まるで、現実から田を逸らすなど言わんばかりに此方を見返した。

「…………魔王様…………いくら痛ましく、屈た堪れない気持ちになつたら」と言つて、姫様の頑張りから田をそらしてはけません」

「くそお…………お前もしつかりと見てみろ。中ボス！ 服の上からでも、姫の胸部の悲鳴が聞こえてくるよッだ！」

魔王と中ボスは、最早、何故姫がペンを持ち上げようとしているのかといつ田的すら忘れ。

姫の苦しみに歪む顔を見つめていた。

「…………ほら見てみなせこよアンタ達！　私にだつてこの
れぐらい、あア……」

出来たと姫が言つた直後、そのペンはまるで意思があるかのよつ
に胸からこぼれ落ちた。
そのペンが床に落ち、カタツと音を立て、その音だけが王座に響
いた。

まるで無限のように感じられる沈黙が辺りを覆つた。
ペンが落ちるという事がこれほど残酷だと感じるのは、これまで
もこれからもこれつきりだらう。

むから泣くなッ！

「ここでお前が泣いたらこの場が笑い事では済まなくなる！」

「……だつて……アンタが全部……ぐすん……悪いのよ……」

泣きそうになりながら必死に堪える姫に対し、魔王は何をする訳でもなく、オロオロと姫の周りをただ回る事しかできなかつた。

まるで泣きじゃくる赤子を前にした、初々しい父親のよつた構図である。

「そりだッ！ 角砂糖も食べたいだろ？ 投げてやる……『こ褒美だ、何個食いたい？ 2個か？』

「うひひ……なんで『角砂糖』なのよ……。それに……ぐすん……あげるなら手渡ししなさいよ」

「御尤もで」

やはり、元医者と元患者のやり取りを元にして説得したが、失敗だつたようだ。

「スタンドは必須か……。

そんな事を思いながら、魔王は更に言つた。

「まあ兎に角、姫。何か欲しい物とかないのか？」

なーに、大抵の物なら俺の力で揃えてやる。遠慮なく言つてみろ

魔王のそんな言葉に姫は少しだけ顔を上げた。

「うわっ 田真っ赤！？ ガチ泣きだよ！？」

口々で腹抱えて笑つたりなんかしたら内臓が吹き飛ぶほどのパンチが飛んで来るだらうな……。

姫は顔を上げ、その双眸そつぼうが魔王を捉え、ゆっくりと姫は口を開いた。

「…………ぐすん…………じやあ…………む、胸が欲しい…………」

「 無理」

姫は、何で何でと子供のようと言つたが。正直こればかりは魔王がどうにか出来るような事ではなかつた。

「牛乳とか飲んだらどうだ？」

「そんな常識レベルの知識で皆、胸が大きくなつたら。私だって苦労しないわよ！」

「じゃあ胸に効くマッサージとかはどうだ？」

「あんな事やつても胸が痛くなつただけよッ！」

痛くなるほどやつたんだ……。

魔王はどうすればいいのか更に考えた。

「うへん……」

魔王が唸るようにして考へていると、姫が突如、口を開いた。

「そうよー！ 魔法よー！ 胸を大きくする魔法とかないの！？」

「これぞ名案と言わんばかりに笑顔になる姫に、魔王は事実を淡々と伝えた。

「胸をミニサイルにして飛ばす魔法や胸から光線を出す魔法なりあるが……大きくする魔法は……」

「一時的な変化の魔法では意味が無いだろ？」…………。

「あつ！ あつたな一つだけ！ でもなあこれははちゅうと……」

「えつどんな魔法よー？ もつたとい付け無いで早く教えなさいよー！」

正直一つだけ、手はあつたが。これだけは言いたくは無かつた。だが、あると言つてしまつた手前。今更忘れたや言いたくないと言えば命が無いだろ？。

「……まあ確かにその魔法を使えば胸は大きくなるが……なるが……」

「なによ……？」

「…… 胸を大きくして、三十秒後に肉体が爆散するんだ……」

無言……、嫌でも姫の、落胆の思いが伝わる。

「なな、何よそれツ！？ それって魔法じゃなくて経絡秘孔を突く技じゃないの！？」

「ああ～、だから魔法名が『巨乳爆碎拳』だったのか、長年の疑問に遂に答えが出たな」

なるほど、だから魔法詠唱の時にアタタタとか言つてたのか。
後でパパ上に答え合わせを願おう。

「だが、姫がこれほど悩んでいるんだ……俺も姫に協力するぞ！」
「食らえ！」『巨乳爆碎拳』ツ！――――

「いやああ止めなさいよツツツ――」

「くそ、避けるな姫！ 他の秘孔を指してしまつたら大変な事になるぞ！」

「本命に指しても、他に指されても。どうちこしても危険よツ！――」

姫と魔王は鬼ごっこのように王室を縦横無尽に走り出した。

「待て姫！　くつ！　姫こいつちを見ろー　ゴルゴーンアイ！」
「えつ？　なによー…………ちよつとー？　何よこれ身体が！　動か
ない！」

「あはは、時期に口すら動かなくなるぞ。これでゆつくりと『爆乳
爆碎拳』が使える」
「……魔法名変わってるわよ！」

「　ゴホン。がははは食らえ『巨乳爆碎拳』ツー！」

魔王がそう言い、姫の身体に触れようとした瞬間。

「ツー？　ぐあ！　何だこの光は？！…」
「食らいなさい……」
「くそ？　姫は何処だ……ガア！　ギヤ！　バボラ！」

力なく倒れた魔王を見下ろす姫。

「はあはあはあ……久々に本気を出す破壊ぱかいになつたわね」

そんな事を言つていると、王室のドアがゆつくつと開き。
中ボスが滑るようにして入つて来た。

「魔王様、姫様。夕食の準備が……なんですか」のボロ雑巾は？」

「俺だ中ボス……」

「汚らしい布つきれが喋った！？」

「じゃ、じゃなくて魔王様でしたか？」どうしました？ 雜巾の真似ですか？」

それなら渡り廊下でお願いします。一度汚れていますので」

「口口口と立ち上がる魔王、そして、服のホコリを手で払いながら、中ボスに言った。

「お前、それでも俺の従者……ん？」

「どうしました魔王様、やつぱり雑巾の真似を……え？」

魔王と中ボスの視線は魔王の胸部に当てられていた。

「魔王様はいつからそんな所に風船を仕込む趣味があつたのですか？」

「あ、あああ。これはッ！ まさかッ！」

狼狽する魔王の視線は姫を追い求め彷徨つた。

「ふふふ、アナタの後ろよ、魔王様。

正直、初めてだから上手くいか分からなかつたけど、アンタが何度も同じ攻撃をやるから見たままを真似て見たけど。どうなるかしらね?」

「「」、これは『巨乳爆碎拳』…？ 魔王様早く解除を…！」

「わっ、分かっている。今やつてる所だ」

「あと十秒」

「うわああなんかカウントダウンしてるうううううううう！」
「あと八秒」

「くっこれが！ あわわ、足が勝手に…？」

「あと六秒」

「ばっ！ 馬鹿ですか魔王様！？ それは『残悔積歩拳』ですよ…！
アミバが受けたやつです…！」

魔王の足は、魔王の意志を無視して、後ろに向かつて歩き始めた。

「あと四秒」

「うわあこれも最終的に爆散するではないか！？ 不味い！ 余計に爆弾を増やしてしまった！？！」

「懺悔は終わった？」

「まだです！」

「あら、残念」

「一九三九年

覚悟を決めて目を硬く閉じていた、魔王はゆつくりと瞼を開けた。
まぶた

「あら、まあ仕方ないわね、所詮見よう見まねでやってみた、猿真似程度ですもんね」

「ふう、良かつた……」

「アンタも馬鹿ね、完璧に術が成功しているかも見極められないな
んて」

「仕方なかろう！姫なら正直成功されるのではないか？」と思わせられるほどの実力があるのだから……」

「ちよつと魔王、喋りながら後ろ歩きで遠くのへんてこ止めなさい。」
声が遠いでしょ

魔王の意志に従わない足。

魔王は王室のドアに向かって歩き、今まさに部屋から出ようといた。

取り乱す魔王に対して、中ボスは至つて冷静に言葉を放つ。

「誠に残念ですが……時間です」

最後の瞬間、魔王は王室から廊下に出た。
魔王の悲鳴だけが廊下に響いた。

その後、魔王は三日ほど姿を晦ましたが。何事も無かつたかのように戻つて來た。

第十話『姫とラブリーフトーキー！？』

第十話『姫とラブリーフトーキー！？』

「……中ボス、ロン。國士無双よ」

「第一局目でいきなりそれをやりますか……」

ジャラジャラ

「…………… それです。ロン。四暗刻^{スイアンコウ}」

「うわつ 中ボスえげつないわね、地獄単機待ちつて…… 規格外なほ
どの運ね」

剛運飛び交う麻雀が行なわれている王室。

妹にB_レ^{中ボス+小ボス}コンビ？。更に一人、場違いな雰囲気を出している者が

いるが。

それを今、咎める者は居なかつた。

皆^{みな}、一度、局が始まれば何があつても動かない、という意思を沸
々と感じさせるほどに殺氣立つていた。

そんな手に汗握る、緊張感が漂う中に、一人空氣の読めない男が
現れた。

バアンー！

「えー、では始まりました。第一回『姫とラブラブトークー？』回。ポロリもあるかも！？」

魔王は勢い良く扉を開け、王室に入ると随口聞こえたよつた、大きな声でそう言った。

……

雀卓を囲む者達は一切目を話さなかつたが。

一人、賭博麻雀に参加していなかつた姫だけが反応した。

「ちよつとー、何よ『姫とラブラブトークー？』回って！？？
何勝手に始めてるのよー、それにポロリなんて無いわよー！」

「ん？ ポロリするほど胸が無いと！？」
「アンタ、ホント。殺されたいらしいわね」

拳をワナワナと震えさせていたが。それを見ない事で無かつた事にする魔王。

「おにいも唐突ね、まあいいわ。あっシザーマン、それロンよ

小ボスと中ボスに妹。それに庭師^{シザーマン}……佐藤さんまで連れて来て麻雀か……。

シザーマン凄い負けてるじゃん！？ 自慢のハサミに 差し押さえ つて赤い札付いてる！…？？

魔王は麻雀が行われている方をあまり見ないように視線を外し。気まずそうに、一つ咳払いをすると、改めて『ラブラブトーク！？』回を始めた。

「…………。『ゴホン』、では改めまして。ズバリ聞きますが、姫の好きなタイプは？」

「トーキつて言つより質問ね……まあいいわ。私の好きなタイプは、『私より強い人』よ！！」

「…………それ、なにガン ムだよ」

「失礼ね、そんなに人外なほど強くないわよ、せいぜい、シャアザ程度よ」

「それって最早、人外……『めんなさい拳を下ろして』

危うく、頭を岩山両斬波^{がんざんりょうせんぱ}で力チ割られる所だつた……。

魔王は何気なく、中ボス達の方へ視線を流した。

「シザーマンさん、これでハコテンです。物の見事にトビましたね」
中ボスはそつまつとシザーマンの持ち物から適当に見繕いみくわい、物品を奪つた。

シャキンシャキン

差し押さえ と掛けられた札が付いたハサミをシザーマンは持ち、閉じたり開いたりしたが。
そのハサミを中ボスは無言で奪つた。

「シザーマンさん。このハサミはアナタが負けたので私が貰つたものです。

残念ですが、もうアナタの持ち物ではありません、私のです。勝手に触らないで下さい」

「.....」

「それも駄目だよ、シザーマン！ その服は僕が貰つたんだから！ タオルあげるからこれ巻いてなよ」

シャキン……

「だから、そのハサミは私のだつて言つてるだろ？がッ……」

「お前らホントに鬼だなッ……」

見るに堪えなくなつた魔王が遂に声を発したが。

そんな言葉を尻目に、中ボスと小ボスは後ろに控えて居た。

怪しげな黒服の男に、ハサミと先ほどまでシザーマンが着ていた服を渡し。

金を受け取つていた。

「小ボスが八千円、私が七千円。　ちつハサミは高いかと思つたけど案外安値でしたね。

これだつたら服の方を貰えれば良かつたです」

「甘いですね中ボスは。物の価値を測るのは大切な事ですよ」

「そうですね、小ボスの評価を改める必要があるようですね。
今回ばかりは私の負けです。御見それしました」

「ふふふ、一番最初にぶつ飛ばした私は現金で一萬ほど貰つたけど
ね」

「…………。　では改めて聞きますが、好きな食べ物は？」

「生き血」

.....

「.....『冗談よ』

「冗談でもいつまでもいつまでもいつまでもいつまでもいつまでもいつまでもいつまでも無い。おおおシー！」

姫が『生き血』と言つた時、麻雀をやつていたはずの、皆の動きが一斉止まつたのは眞までも無い。

「じゃあ何が好きなの？」

「肉」

「.....なんの肉？」

既に嫌な予感しかしない魔王だつたが、恐る恐る聞いた。

「ウサギ」

「うわああああ怖えええ十六才のヒロインが好きな食べ物とは思えないような答えだああああシー！」

えつウサギって普通ペットで飼つもんじやないのー？
少なくとも十六才の女の子が大好物あげる物じやないよねー？

「肉食系女子ね」

「……いえ、この場合は“リアル肉食系女子”と言つたところでしょうか」

妹と中ボスが呴くように言つたが、小ボスは話を聞いて居なかつたのか。

また、たく方性の異なる「」な言葉を発した。

「なになに？」
ウサギさんの話し！？
僕もね、ウサギさん好きだ

小ボスお前は食用
にする為に飼つてる訳じゃないだろ？」！

食うて聞いたらふ倒れちゃうよ！！ ピン太、天国までジヤンプしちゃうよー！？

「へえ、小ボスはウサギを“飼つて”るのね？
屋でウサギを“狩つて”見ようかしら」

「うん、姫ちゃんが“買って”来てくれるんなら、僕が面倒見てあ
げるよーーー！」

「分かつたわ、『狩つて』あげる」

「ありがとう！」

うわああああ小ボスと姫の“かつて”的ニコアンスが違う！！
どう考へても姫の方は“狩つて”的ニコアンスだよ！！
姫の“かつて”的場合だと、小ボス！　お前のウサギちゃんに増
えるどころか、減っちゃうよ！－！

「姫ちゃんもウサギさん好きだったなんて、嬉しいな、今度見にお
出でよー。」

「ええ、私、本当にウサギが“好き”なのよ。是非見に行くわ」

姫はやつ言つと、ふふふ、と不敵に笑つた。

一時間後、夕食での出来事。

テーブルに腰掛け、料理を前にした。魔王と中ボス、それに妹は
血の気が引いたような青ざめた顔をしたいた。

「……おい、中ボス、なんだこの肉は？」

魔王はその“謎”的の肉を指差しながら、中ボスに聞いた。
だが中ボスも同じように疑問を抱いていた。

その“謎”的の肉は明らかに今まで食べて来た肉とは霜の振り方も、匂いも、色合いも異なっていたからだ。

「すみません、今日は私、調理担当では無かったもので……
ですけど先ほど、クック佐藤に姫が謎の包みを渡しているのは目
撃しました」

「……それが“ピヨン太”だつたりはしないよな？」

「あはは……さすがにそれは無いのでは……？」

中ボスは乾いた笑いで返事をしたが、正直、否定しきれないと言
つた顔をしていた。

「おにー……」めん、さすがにこれは食べられないわ

「イヤ待て、これが……ピヨン太と確定した訳ではないだろ？……

魔王達は姫と小ボスに視線を移した。

魔王達が青ざめている中。

それに引き換えて、小ボスと姫は美味しいに“謎”の肉を頬張つていた。

……

「うん、やっぱり自分で“かつた”肉は、より一層美味しい感じるわね」

姫の言葉に小ボスを除く全員が凍りついた。

“かつた”の漢字が“買った”であれば問題は無いが……“狩つた”であれば……

結局、魔王達は“謎”的には一切手を付けず、残りは姫と小ボスが食べた。

「はあ、美味しかった……。 ピヨン太」

!?

姫が小さく呟いた、ピヨン太、という言葉が一体何を意味してい

るのかは、皆、考へない事にしたのだった。

第十話『姫ヒカルアワードーク！？』（後書き）

なんか最後はタイトルとかけ離れた内容になってしまった……。
次回から『氣』を付けようと思つけど、せつと治らない……。

大金を掛けた賭博は罪になりますが、この世界には賭博法は無い
ので悪しからず。

第十一話『姫が魔法少女！？』

第十一話『姫が魔法少女！？』

「はあ……空を“不自由”に飛びたいな…………」

王座に座る姫の隣で、パイプ椅子に座る魔王。

そのパイプ椅子は、背もたれや、お尻の部分のスポンジは全て剥がれて、クッショントとしての機能を全くと言つて良いほど失っていた。

そんな椅子に座る魔王は、既に威厳はまったくと言つていいほど感じられない。

ただのモブキャラ的な存在感である。更に悪く言つと背景。

「魔王？ アンタまた一段とバカになつたのね。のび だつて、そんな事、ドラ もんに頼まないわよ」

冷ややかな視線が姫から魔王へと注がれる。

「だつてさ、自由に飛べても楽しくないじゃ？」

「どんな基準で楽しくないか、楽しいのかを決めてるのかは知らないけど。

普通は自由に飛べた方が好くないの？」

姫も疑問に魔王は「甘いな」と返し説明を開始した。

「あのな、いつでも自由に飛べたりまらない」と俺は考える。

貴様だって好きな事をいつでも出来たらいいずれ飽きるであらひへ。

姫はすぐさま「一理あるわね」と返し、魔王は再び話を続けた。

「俺が言いたいのは、どんな物でもいつでも自由に出来たらある意味では不幸だと言つ事だ。

まあ具体的に言つて、」

「空を飛ぶ為にます。誰が、何に搭乗して、何時、何処で、どの位飛ぶのか。

更には何故飛行する必要があるのかを纏めた必要書類を航空局に提出する

「なんか、急に不安な気分になつたわ……」

「まあ、まだ序盤だ、黙つて聞け。

それでだな、その書類を航空局の受付に渡し、三日ほど放置される。

そして、ミスに気がついた職員が慌てて上司に探し出し、厳粛な審議の末に。

「飛行許可が下りない くらい不自由だと良い感じだ」

「許可降りて無いわよね！？ 降りて無いわよね！？ 不自由ビリろか飛べもしないじゃない！」

「まあ時には許可が下りないくらいが理想形だ、安易に空を飛べても興が無いからな」

「そんないい加減な体制だったら、緊急の時、困るじゃない」

「その時は金に物を言わせる……」「

「ワイヤー通じるの……？」「

「金で動かない組織など無い……！」

「汚い世界ね……」「

「ああ……」

何故か一人は悲しそうに遠い眼差しで窓の外を見た。

「最近、思っているんですけど、姫ちゃんも結構“変人”ですよね？」

小ボスはお菓子を食べながらそう言い放った。その言葉に姫はひどく焦っていた。

「ち、ちちち。違うわよ……！魔王！アンタが変人だから、それと喋る私まで変に見えるのよ……ねえ魔王？」

姫はまるで威圧するかのような目で、魔王を見た。

「あつ……あああ、ああもちろんだ。俺様が変人だから、姫まで変人に見えるだけだ……！」

「尻に敷かれてますねえ」

「違つ……」「違つ……」「

「姫、同時に喋るなよ！　また渝つたではないか！！」

「アンタが言えた事じゃないでしょ！…………ちょっとまって、小ボスに笑われる……屈辱だわ…………」

項垂れるよじこして、姫は王座に座った。

「なに？　またおにいと姫の夫婦漫才？」

「頼む妹よ、これ以上姫を刺激しないでくれ…………俺が困る…………」

そんな、やり取りをしていると、中ボスが、滑るよじこして王室に入つて來た。

皆、特に気にする様子はなかつたが、中ボスはまっすぐ姫に歩みよみとい、一つの紙を手渡した。

「ん、ありがと、中ボス。えーなになに……『ドラマ出演のいじ案内』…………ナーフコレヒ？」

何故か語尾が片言になる姫、俺達は姫の方に集まり、魔王は皆こ見える位置に紙を移した。

「姫がドラマ出演？　それも主演？　なにこれ悪質なイタズラ？？」

妹がそつ言つと、中ボスは首を横に振り、説明を開始した。

「いえ、正式な依頼です。受けるかどうかは姫様次第ですが、ギャランティーはかなりいいですね」

姫は目を輝かせながら、出るー 絶対出るー！
と言い、中ボスもすぐさま携帯電話を取り出し、テレビ会社に電話した。

台本を渡られた辺りから、雲行きが怪しくなつていたが。
撮影スタジオに着き、衣装に着替えた姫を見た時、魔王は、やつぱり、という言葉しかでなかつた。

「これは……どう言つ事よ……」

「メカニに青筋を浮かべながら、監督と思しき男を睨む姫。

「ふつ、あはははは。何よ、『魔法少女ランページ・姫』って！
！ ふつふははははは」

久々に盛大に笑う妹の所為で、既に爆発寸前の姫。

これ以上刺激すれば、撮影スタジオが吹き飛ぶほど暴れるだろ？

またにランページにふさわしこと書きよ。

ドが付くほど可愛らしさのフリルの着いた衣装に袖を通す姫。確かに……確かに、似合つてはいるのだが、正直痛かった。

「よくお似合いでですよ、姫様」

中ボスは頬がヒクヒクとしていたが、あれは笑っている訳でも、馬鹿にしている訳でも無い。

どちらかと言えば、『この仕事を持ってきたのは私……もしゃ、殺される!?』という不安からくる表情だった。

「すいません、撮影の方、始めてもいいですか?」

若いスタッフが姫に近付き、問う。
まだ新人なのだろう、仕事への情熱があふれているのか、元気よく姫に聞くが、
そんな、声に姫はゆっくりと振り向く。

「ヒィーーー！」

姫の睨みに、短い悲鳴を上げ、若いスタッフは口から泡を吹き倒された。

「『から立ち直れたらきつと彼は今日とこいつ日の経験を生かし、強く生きていけるだろ?』
立ち直れない確率の方が高そつだが……と考えながら、魔王は心中でそつと合掌した。

「ふん…まあいいわ、もう契約書にサインしちゃった訳だし、やるわよ」

そう言い、姫とスタッフ達は撮影の準備に取り掛かった。

『がはははは、貴様が魔法少女ランページ・姫か！！ 小娘と聞いていたが、こんなにも貧相だとはな！』

姫は大口を開けながら悪態を吐く着ぐるみの化け物？ を崖の上から見据えていた。

撮影がスタートしてからはマシな表情になっていたが、先ほどの化け物の台詞で再び青筋をコメカミに浮かべていた。

ピキッ

…………なんだこの音は？ 破碎音？ まさか～ここは魔界では最新のスタジオだし、そんな事はないか～。

『…………いたいけな、子供達の夢を奪う怪獣よ～ 私のランページス テッキで粉みじんにしてあげるわーー』

最早、ドラマではなく、特撮だよな……と魔王は思いながらも、その様子を黙つて見続けた。

『ぐあせはせはせは、掛かつて來い！ ランページ・姫よー。』

姫は、とひー、と短く言にながり、怪獣とやらの近くに下りた。

『わつ、わわ、』

何故か若干、口のむる姫を疑問に思い、魔王は手に持つていた台本へ、視線を落とした。

！？ なんだこの台詞は！？ こんな台詞を姫に言われるといふのか！？ 命知らずもいいところだな。

『わわ、私の、胸は小さくても、そんな私の胸の中には子供達の夢が沢山詰まっているのよー。』

うわ～……、と声に出でてしまったのは魔王だけでは無かった。中ボスや妹、更には小ボスですら哀れみの眼を向けていた。

『やーー、貧乳ー、貧乳ーー。』

子供のように叫ぶ怪獣。

正直、このドラマ？ なぜ、どの年齢の為に作っているのか些か疑問であった。

『…………』

顔を下げる、肩をぶるぶると震えさせる姫。今にも暴れまわりそうなほどだった。

『くつ、食らいなさい！ ランページステイク！！』

力任せに振り下ろされるランページステイク。

そのステイクは怪獣？ の血で赤く染まり、姫自身の、その血を浴びながらも笑いながら、ステイクを振り下ろし続けた。

結局 魔法少女ランページ・姫 の放送は叶わず。
その映像はお蔵入りとなつたが。

現在、姫の行動にインスピレーションを受けた、あの時に若いスタッフが新しいスタジオを立ちあげ。

暴虐少女ランページ・姫 と名前を変え、映像化していた。

当然の事ながら、その作品には姫自身は出演していない。

だが、その作品の事で、今、魔王城にまたしても問題が起きていた。

「私が、その 暴虐少女ランページ・姫 のラスボス役で出演！？」

魔王城に響く、姫の声。

当然、前の事で懲りた姫は断り、企画は頓挫したが……。

『暴虐少女ランページ・姫の前に現れた、最後の敵……それ名は……魔法少女ランページ・姫！？

その暴虐さはまさに最

』 プツツ

「…………」
「………… テレビ見てる時も油断ならないわね」

「ああ……」

テレビを見ている時に流れたコマーシャル……、魔王は慌ててテレビを消し、姫もため息を吐く。

一体誰が姫の代わりに出演しているかは定かでは無いが、姫も魔王もあまり深く、考えない事にしたのだった。

END

第十一話『姫が魔法少女！？』（後書き）

魔法少女……あのフリフリ可愛いよね
でも、僕の脳内では、姫も大体は可愛らしいタイプの服を着ていますよ。

第十一話『面白い事は“起きる”もの…?』

第十一話『面白い事は“起きる”もの…?』

こつものよつと暇を持て余して居る魔王は、寂しさに耐えかねて、中ボスの部屋に出向いていた。

魔王に代わって、政務に追われる中ボスは、魔王に構っている余裕は無かった。

結局、何もする事が無いのか、魔王は呟くよつと呟いた。

「面白い事“起きる”かな~」

「…………。あつ？ すみません何か言いましたか？」

今までに部下である中ボスに、軽い無視を受けた魔王。

魔王が涙目になつてから初めて反応する所を見ると、無視と言つたり言つたり、眼中に無かつた、と言つた方が正しいかも知れない。

「さうか聞いて無かつた。まああれだ。面白い事“起きる”かと思つてね」

「面白い事“起きる”？ 面面白い事“起きない”かな、とかではなく？」

書類から目を放す事無く、中ボスが訊く。

その反応に気を良くしたのか、堰^{せき}を切つたよつ話し出した魔王。

「俺はな。

平平凡凡な主人公が、ある日、ハピニングに巻き込まれる。

という、テンプレのようなストーリーには飽き飽きしているのだ！

！」

「殆どの一次元作品を否定しましたね。魔王様の好きなギャルゲーとかもそんな感じではないですか」

魔王は、座っていた席から勢いよく立ち上がり、「だからだよ……！」
と言い、中ボスに詰め寄った。

「だからそこ、俺は主人公からアクティブに動くストーリーが好きなんだ！！

貴様ら！！

どんなに願つても異世界に飛ばされるとか、美少女が突如現れるとか……そんなものは無いんだよ……」

「……唇を噛み締め、目からは悔し涙を流して言つ事ですか、魔王様」

中ボスの言う通り、魔王は下唇を噛み、硬い握りこぶしを作り。
目からは、今にも血の涙を流すのではないか？と思つほど悔しそと悲しみの色に染まつていた。

「俺だつて昔は憧れたさ……『朝起きたら、隣に謎の美少女が寝て

いるー?』といつ演出に……

今だつて時々、ベットの端で寝て。いつでも美少女が寝て居ても
良こよしだと対策していたくらいだッ……「

「そんな事していったのですか。

ですが、そのような事をしていたのであれば、尚の事、受動的な

主人公が嫌い。

と言うのには些こすれが矛盾を感じますけど

「だがなー! 待つていても美少女は『朝起きたら隣にー?』的な
事は起きないんだよッ! !」

「実際に起きたら、普通に住居侵入罪ですね

「せうー! だから、俺は血ぬらそれを“起こす”! !」

「起こすと言つても、具体的に、何をするのですか? ?

手で、少しだけ下がつていた眼鏡を元に位置に戻しながら中ボス
が問う。

「美少女を何処から連れて来て、隣に置くー! !」

「普通に誘拐罪ですね

「…………」

「黙るのも結構ですけど。態々、リスクを冒して何処から連れて来なくても、姫様でも隣に置けばいいのでは？」

「例えば、クマのプレーを好きだったとしても、実際のクマを隣に置いて寝たいと思うのかお前は？」

「仮にも姫様を猛獸扱いですか。あつ、姫様、おはよひじれこます」

中ボスの言葉に、魔王は素早く態勢を変える。

「どうかお許しください……」

「……すいません、魔王様、今の言葉は嘘です。
まさか『姫様』と言った瞬間に素早く扉の方を向き、光の速さで
土下座態勢に移行するとは思いませんでした。
田を見張るほど」の「ミクズ精神ですね」

魔王は安心しきった顔で、土下座の態勢を崩し、中ボスに再び向
き直った。
と、その時。

「中ボス、おにい見かけなかつた？」

突如、妹が中ボスの部屋に“ノック無し”で入つて來た。
魔王は妹の方を向き、そして再び中ボスの方へ視線を移したが、
そこには誰も居ないよつに“見えた”

「あれ、おにいだけ？ 中ボスは？」

「お前の位置からは机しか見えないだろうが、机の下に“避難訓練”見たく、隠れているぞ」

その言葉に妹は机の方に向かい、回り込んだ。

「何してんの中ボス？？」

「…………“避難訓練”です」

「そのまま、快樂の世界に“避難”させてあげようか？」

不敵に笑う妹の顔に、中ボスは顔を青くした。

「それで、お前は何をしてきたのだ？」

魔王の言葉に、妹は中ボスの下を一歩離れ、魔王の方に近付いた。

「なんかね、今日クック佐藤が急病で休むそうよ」

中ボスは忍び足で、妹からなるべく距離を取るように移動し。

魔王のやや後方の位置に付くと、妹の眼を気にしながらも、口を開いた。

「……、随分急ですね。私はそんな話は聞いていませんが？」

「さつき連絡が来たといひよ、困んだらいつかひらべてお見えよつて思つてね」

中ボスは妹に「ありがとうございます」と短くお礼を述べた。

「それと、クック佐藤からの電話を取つたのは姫よ。そして悪い事に今、姫は厨房よ」

「妹よ、なぜ姫を一人にした！？　いやいやそれよりも。
何故か、面白い事“起こす”前に、あつちから面白い事が“起き
た”ぞ！？」

あれほど自分で面白い事を“起こす”と言つておきながら。不運と言つ名のハプニングが勝手によつて来た魔王。

「とにかく、様子を見に行くぞ」

魔王の言葉に全員が同意した。

そこでは忙しく夕食を作る姫の姿があつた。

「えーと、どれどれ……何これ？ 田玉？ 栄養価は高そうね」

そう言い、姫はその田玉？ を鍋の中へ放り込んだ。
先ほどから、幾重にも渡り、手当たり次第、用途不明の謎の食材
が鍋に放り込まれていた。

既に鍋の中には五人分はどころか、二十人分にもなるのではない
かと思うほどの大量のスープが出来上がっていた。

「メインが無いわね、やっぱりメインは肉よね！ ……うーん、特
に無いみたいね……そうだ！」

姫はその言葉を最後に厨房を去り、小ボスの部屋へ向かった。

「あつたあつた。良かつたはちゃんとあつて」

厨房に戻ると、先ほど手に入れた、生きの良い食材を捌き始めた。
その手慣れよつは、この食材に手慣れた者だけが出来るスピード
だった。

「でもこの量だとみんなで分け合つにしては少ないわね。仕方ない、
スープにブチ込むか」

女の子らしからぬ言葉を呴きながら、姫はスープに肉を入れた。

と、その時。

「姫！ フリーーズ！！ そこを動くな！ 何も触るな！ 何も作る

なー。」

魔王が勢い良く厨房に入ると、開口一番に舌を放った。

「ああ……もう遅かったようです」

散らかってた調理道具を見つめながら中ボスが呟いた。

特に、血だらけになつたまな板の方に視線が集中していた。

「一体……何を捌いたのだー!?」

「ハ・ミ・ツ」

全然可愛くも無くともねえよ、と言いつつだつたが、その言葉を

魔王は呑み込んだ。

後日、原因不明の謎の集団食中毒を起こした魔王城に我々は來ていた。

彼らは、我々のインタビューに渋々ながら引きつけてくれた。

匿名希望。『中ボス鬼畜攻めの小ボス健気受け』さん。

Q

『原因是 一人コックが作った料理だと聞きましたが、どの様な料理だったのですか?』

彼女はその時に情景を思い出して呟るのか、顔を土氣色にしながらも、言葉を紡いでくれた。

A、

『口の中に入れた瞬間にまず感じたのは、『汚泥』? と言った口触りだったわ。

口いっぱいに広がる酸味と何とも言えない泥臭さ。それにあの見た目……紫よ! 紫!!

それも、何故か食べている途中で、それはもう鮮やかな螢光色の縁に変化したのよ!!

あれは最早、兵器よ… 兵器… マジックウェポンじゃなくて、バイオウェポン…』

彼女はその言葉を最後に、ハンカチで口を覆い隠し、トイレへ駆け込んだ。

匿名希望。『何故、現・魔王はこんなにも馬鹿なのか? 一回死んでくださらぬかな?』さん。

Q

『先ほど、アナタより先にインタビューに答えてくれた方は、見た目がおそろい物だった。

と仰っていましたが、どうして食べようと思つたのですか?』

彼は病的なほどにやせ細つた顔、顰^{しか}め。答えた。

A、

『確かに、見た目は“あれ”でしたが。如何せん姫様が相手なので、一か八かで食べました。まあ、結果はこれです』

そう言いながら彼は手首に刺さっていた点滴を見せた。

彼は、その言葉を言った後、ベット脇に置いてあつた錠剤が入ったボトルを手に取つた。

そして、三十個ほど口の中へ放り込み、ボリボリと噉み碎いた。

Q

『それはなんですか?』

A、

『胃腸薬と言つておきますよ』

彼の言葉には少し含みがあったが、我々は深くは追求しなかつた。

匿名希望。『最近、俺の扱いが酷い。特に、俺の前にインタビュー受けたやつ。お前だ！　お前！』さん。

Q

『ロリコンと聞きましたが?』

A、

『どちらかと言えばお姉さまタイプの大人の女性がタイプだ』

Q

『テンプレのよつな、王道設定には飽き飽きたと言つておられました
が、
“義理”の妹が居る時点で十分、王道設定だと思つますけど』

A、

『だからと書いてB-^{ボイズラブ}好きの妹は欲しくは無かつた』

Q

『王道展開である、『ヒロインの飯は不味い』の展開になつた訳で
すが、ねえねえ、今どんな気持ち?』

A、

『心中で必死に『もしかすると、ヒロインの飯は意外や意外、美
味しい』

という、希少展開も期待したが、駄目だった』

Q

『『最近、勇者来ない』と言つ声が多数寄せられていますが、どう
お考えですか?』

A、

『勇者が来るか来ないかは、俺がどうこうする事ではないだろ？
あと、何故、俺の質問だけこんな個人的なんだよッ！！？』

我々はこれ以上の質問は危険と思い、急ぎ撤退した。

匿名希望。『ピヨン太行方不明』さん。

彼は城内の中庭などの草むらを探りながら、私達のインタビューに答えてくれた。

Q

『料理を食べた中で、唯一、病院に担ぎ込まれなかつたのがアナタだと伺いましたけど。

食べても異常は無かつたのですか？』

A、

『ん？ ああ、姫ちゃんの料理の話ね。

うん美味しかつたよ。色々な色に変化するスープでね！！ 激しい

の七色に光るんだよ！！

トイレでペー^{規制音}した後も、そのpeeがね！ 光つてたの！！』

彼はそう言いながら、嬉しそうに排泄物の話しぶりをしてくれた。

料理を食べたあとも平然としていたと言われている彼に、あまり有力な言葉はでないだろうと思い我々は引きあげた。

『ねえねえ、ピョン太見つけたら教えてくれない？ 何処かに行っちゃってね』

彼の言つ、『ピョン太』とやらが何かは知らないが、我々はピョン太を搜索に来た訳では無いので適当にごまかし去つた。

匿名希望。『私の飯が食えないって言ひの?』

今回、私達は、この集団食中毒事件を起こした、コックに直接話しへ訊く事に成功した。

Q

『魔王城で住み込みで働いている給仕やその他、七名を病院送りにした訳ですけど、それに対しても何か弁解はありますか？』

我々の質問に彼女はまったく悪びれる様子は無く、淡々と語つた。

A、

『世界がそう望んだから、私の料理は不味くなつた、それだけよ。全ては作者の意思よ』

彼女は、諦めたかの様な顔でそう答えた。
まるで、彼女の料理はどんな事をしても不味くなる事が決定しているかのような口ぶりだった。

『それで、アンタ達も私の料理を食べに来たの？』

その後、インタビューを行つた、記者達の断末魔だけがボイスレ

「コーダーには残っていた。

我々の下には、差出人不明の宅配が届き。

その中には、記者達が残したと思われる、メモとボイスレコーダーが入っていた。

今は行方不明になつている記者達が、命がけで手に入れたのであります、この情報。

週刊誌のトップで出せた事を嬉しく思つ、並びに、記者達が逸早く、見つかる事を切に願うばかりだ。

「…………」

魔王は今読み終えたばかりの、週刊誌、そつと焼却炉に投げ込んだ。

「Hロゲの続きをやるか！？」

そう言ひ、魔王は王室へと帰つて行つた。

第十一話『面白い事は“起りす”もの…?』（後書き）

読者「ふむふむ、作者、落ち葉、落ち葉何だ?」

作者「あ?ねえよそんなもん」

ギアーズ・オブ・ウォー好きにしか分からぬネタを言ってしまつた……

気になる方は プランB とかで調べるといいです。たぶんすぐ出ます。

第十一話『最強の勇者襲来！？』 予告編（前書き）

予告編と書いてあります、普通に本編です。

ただ、この話は凄く長めになってしまったので分割するので、『予告編』

と『本編』で分けます。

ちなみに今は少しだけまだ書いてる途中ですが、その『本編』と言つ方も一いつほどに分けるかもしれません。如何せん長すぎます故。それと、この回『最強の勇者襲来！？』は未だ書き終わっては居ません。

なのでもしかすると一度消す可能性がじゃこます、『了承ください』。

第十二話『最強の勇者襲来！？』予告編

第十二話『最強の勇者襲来！？』

「ふわあ～、暇だな～」

大あくびをしながら、携帯ラジオのイヤホンを外し、競馬新聞を置む魔王。

汚らしいパイプ椅子に座る魔王は、既に魔王としての威儀は無かつた。

「いくら暇だからって言つても、朝から競馬つて……」

姫が呟くように言い、呆れたような目で魔王を見た。
そんな姫は先ほどから何もする事が無い様で、愛用の大鎌を磨いていただけだった。

そんな中、中ボスだけが、忙しく働き。

今も魔王の読み終わった競馬新聞を綺麗に畳み直し、片付けていた。

「仕方ありませんよ、今は平時ですし。

大規模な軍事演習の予定も控えていますけど、それはもう少し先ですしだすし

「軍事演習？」

中ボスの言葉に姫は眉を一つ動かし反応した。

姫は、聞いていない、と言わんばかりに中ボスに問う。

「はい、今月末に大規模な軍事演習があるのでですが、今回は『姫様』みたいな単機を仮想敵としています」

「ん？ どういう事？ アンタ達は多数で相手は一人なの？」

「そうです、ですが今回、姫様にも妹君にも防衛側として回ります」

姫は不思議そうな顔をした。

そこでようやく魔王が席を立ち、中ボスに代わり説明をした。

「ああ、今回の防衛戦力は、魔王軍最新鋭部隊を揃えてある。
魔族の技術力の結集である。魔族の最新鋭兵器『^{アーマードール}装甲人形』だ」

「何よそのアーマードールって？」

姫の問いに魔王は、不敵に薄い笑みを浮かべた。その笑みは狡猾な肉食獣を思わせるそれだった。

その表情に、姫は引いていたが、魔王はそれを気にする様子は無く、話しを続けた。

「俺と中ボス、それと余計だったが妹の三人の監修を元に作り上げた最新鋭の兵器だ！！

暗殺や小規模戦闘をコンセプトに設計したが、あれは凄いぞ。

サイズは小柄な人間程度だが、十トン程度の物だったら平氣で持ち上げるぞ。

単機でも俺や中ボス、それに小ボスを苦しめるほどだ。それが何と十機も配備するのだぞ……！」

「ガハハ、と高笑いを浮かべる魔王をよそに、中ボスが話し始める。

「確かに、私と小ボスは苦戦しましたけど、魔王様は手も足も出なかつたではないですか……。」

まあいいんですけど。

まあ多少大げさな様な気がしますが、それでも十機相手では姫様も妹君も、まず勝てないでしきう

「へへ凄いじゃない

」

と、その時、突如、城が小さく揺れる。

地震か！？一同、思い、席を立った時、王室のドアが勢い良く開く。

「おにい、大変よ、“勇者”よー！ それも凄い強いのー！ しかもイケメンーーー！」

妹の言葉に、全員が沈黙するなか、小ボスも妹に続き、王室に入る。

「妹ちゃん！ 魔王ちゃんインパクトまだボコボコにされちゃったよーー！ 今度は一秒で三機喪失だよーー！ 子犬を配置したつても少し時間稼げるよーー！」

小ボスの言葉に凹む中ボス。

何気に中ボスに向かって、毒吐いたよな小ボス……。

「兎に角、中央司令室向かうぞ、話しほそ途中で聞く」

『了解！』

全員の声が揃い、前回とは違い、同時に言つ事に成功した姫は、何故か、したり顔で魔王の方を見た。

「こやこやするな。氣色悪い グハア」

「氣色悪いって何よ！？」

「姫様、寸鉄すんてつで額を打つのはどうつかと……と言つか、いつも掌に隠しておられるのですか？」

「乙女の嗜みよたしなみ」

そう言い、姫は司令室へと向かった。中ボスと小ボスも、肉塊と化した魔王を背負い、後を追った。

第十二話『最強の勇者襲来！？』 予告編（後書き）

予告編はここまでです。

「えつこれだけ？」と思う方が多いでしょうが、本編の方がこの5倍ほどの文章量となっていますので。分割は必須と思い、切りのいい所で分けさせていただきました。

本編は未だ書き上がっておりませんが、金曜までには本編（たぶん2つ程度には分けられるのでは？）を投稿したいと思います。

ちなみにこの後書き含め、前書きの方も、本編投稿後は変えますので、今回ばかりは、この長つたらしい前書き、後書きをお許しください。○rn

本編投降後に文章を本編に合わせて少しいじる場合があります

第十一話『最強の勇者襲来！？』（前書き）

まことに、かと真面目回な感じで「メモリ」が無いです。

第十二話『最強の勇者襲来！？』？

第十一話『最強の勇者襲来！？』？

司令室に入ると、魔王は中央モニターを見上げた。

魔王は、そこに映し出された男の顔をじっと見つめた。

その男　　勇者は、短めの蒼い髪に、男物の白い着物を着た若い男だった。

整った顔立ち、開いているのが分からないほどの糸目。

その様な風采に、腰に長剣、それと同じ場所に半分ほど小さな剣を身に着けていた。

魔王はモニターをじっと見ながら、ふとある所が目に付いた。

注目したのは、勇者の腰にある長剣の鞘だった。

今は剣は鞘に納められているが、その鞘がやけに細い。

あの鞘の細さから考えて、刀身は更に細く、鞘からも、その刀身の細さが見てとれた。

鞘の形状から、魔王は刀身の細さをある程度見立てていた。

人間界の島国に聞く、“日本刀”と呼ばれる種類に酷似している。だが、魔王自身も、その“日本刀”を文献などでは無く、実際に現物を手に取つた事があった。

しかし、勇者が持つていてるソレは、明らかに魔王が見た物より細かつた。

剣を鞘から抜く瞬間に、ほんの少しでも迷い　ミスがあれば、あの刀身は折れる。

それだけは魔王も分かった。

その剣を愛刀として選んでいるのだ。
あの勇者の技量は武器一つ取つても、他の勇者とは一線を画すほど^{かく}の存在なのだろう。

「おお、それは確かにイケメンだ。それに得物は“日本刀”か、中々の技量を持っているのだろう」

若干、熱を帯びた視線を送る妹、だが、姫の視線はいつも通り冷ややかな目だった。

それを疑問に思ったのか、魔王が問う。

「どうした姫？　イケメンだぞ？　それに勇者だ、魔王ちゃんインパクトを一秒で三機倒すほどだ。
きつとお前より、強いぞ？」

「……え？　ああ、その事ね。
剛力はすごいものだけど、**技術**があつての力よ。
まあ妹ちゃんほど桁違いなら別だけど。
これじゃあ、力に踊らされるているって感じで嫌なのよね」

「わがままなやつ……　ツ！」

そこまで言つたところで、姫の一睨みで、すっかり委縮してしまふ魔王。

「それに……あの“勇者”なんか見覚えがあるのよね」

「そればざつこう事だ？」と言わんばかりに姫を見る魔王。

「うーと、パパの……あ、国王の事ね。
そのパパの護衛をやつていたはずよ彼」

「その護衛が何故魔王城に？」

「さー。遊びに来たつて訳では無いって事は確かね」

「それで、この“勇者”は強いのか？」

姫は何故か眉を顰め、不思議そうな顔をした。

明らかに、何か納得していない、と言つた表情だった。

「うーん。それがね、私も一回ほど手合わせしてもうつたけど……
まったくと言つていいくほど勝負にはならなかつたわ

「ん？ それはお前が、勇者と戦つて、まったく手も足も出なかつたという事か？」

「逆よ、逆。確かに技術は凄いけど、剛力がいまいち。
とてもじゃないけど、私に勝てるような強さは無かったわ、まあ

それでも王都では最強クラスでしょうけど」

魔王はその言葉に、やや引っかかりを覚え口を開いた。

「ん？ つまりお前が手令させした頃の勇者はアーツはあってもフ
オースは無かつた、と言つことか？」

「ええ、アーツのキレは凄かつたわ。
私が超接近戦を使いながらも、攻撃魔法を駆使するのは彼の真似
よ。

でも、本当におかしいわね。今の彼の戦いを見ると、飛躍的に
攻撃力が上がつてるのが解るわ」

「魔王様！ セントリーガン全滅しました。もう後がありません」

小ボスの言葉に、これ以上悠長に話している余裕が無いと悟り、
魔王は目前に迫る敵に集中した。

「雑談は後だ。今は目の前の敵に集中しろ。

姫が知っていた頃と比べ、敵の“勇者”は高い戦闘力を持つてい
るようだ。

各自、敵の戦闘力は未知数だ。油断はするな

「それで、どうやって倒すのよ、あの“勇者”」

姫の疑問に中ボスが、席を立ち、発言をする。

「折角です、アーマードールを使ってみる、ところのほぢりですか？」

中ボスの言葉に、姫は、うー、と唸りながら少し考えると、口を開いた。

「魔王ちゃんインパクトがまったく役に立たなかつたのに、そんな兵器で勝算はあるの？」

「あれは元より、多数を想定して、防衛兵器です。アーマードールは元々少数を仮想敵とし、設計しました。

勇者が単独で来て居るので。またとないチャンスだと私は考えます」

「おっし、妹よ、アーマードール出せるか？」

姫の睨みから早くの立ち直ったのか、魔王が妹の方を向き、質問した。

妹も、イスを回転させながら、魔王の方に向き直り答える。

「もちろん準備万端よ、Aエプログラムも正常に稼働中よ、外装はまだ初期状態のままだけど」

「構わん、一機ほど出せ」

魔王の言葉に妹は短く答え、再びコンソールを指で叩く。
すぐさま、中央モニターには、アーマードールが入っているカレージの映像が映る。

「！？ ちょ、ちょっと……？？ 何よあれ！！」

姫の問いに、魔王は、「姫」と答え、モニターに田線を戻した。

「何よ！？ なんでデザインが私なのよ！？ ……えつ？ なんで水着なの！？ えつ？ 今度はナース服？」

まだガレージの中には、婦人警官やドレス姿。

体操服に魔法少女ぽい服を着た物まで、色々な『姫』が見える。

「説明しなさいよ魔王！？」

魔王の襟首えりくびをつかみ、ガンガンと揺らす姫。

気を失う直前に、慌てて、その手を振り払い。
ゲホケボ、と咳き込みながら、姫の方を見て、渋々、話し始める。

「ガバツ、ゲホゲホッ……貴様！ 本気で首を絞めおつたな！！
まあいい、お望みとあらば説明してやろひ」

魔王の言葉に、姫は目で、続きを促し、魔王の、咳払いを一つし、

説明を開始した。

「ゴボンッ。兵器とは田で恐怖を『える事が必要な事は今までの戦争が証明してくれている。

性能は元より、目で恐怖を『える事によつて、敵の士氣は落ちる。それを期待してこの『デザインだ』

「それはアンタが勝手に私の事を恐れているだけじゃない！」「いや、確かに俺は姫の事は怖い、それはもつゝ、目が合ひただけで少しチビるほどに」

「……恥ずかしいわねアンタ」

姫がボソッと小声で言つと、魔王も「うるせえ」と悪態を吐きながら、話しを続けた。

「他にも理由はある。

たとえ、姫をよく知らない奴でも、女子供を躊躇なく攻撃できる者は少ない。

現に、テスト段階で俺達が対戦した時にも……あーその……

突然、口じもる、魔王に、姫は一瞬不思議がるが、すぐさま、合点が言ったのか、口を開いた。

「あーなるほど、アンタ達はその『アーマードール』ヒサツのドガインが私だから、苦戦しちゃったのね」

何故か嬉しそうな姫に対して、中ボスは淡々とした言葉で、一つの事実を伝えた。

「確かに、私の小ボスは姫様に似ているといつ事で苦戦はしましたが。魔王様は少し違った様子でしたよ」

「どう言つ事? と言いたげな姫の顔に中ボスが更に言おうとしたが、魔王が慌てて会話に入る。

「いや! 僕もお前と同じ理由だぞ!! 僕もテザインが姫だからやつ辛くて、やつ辛くて~」

中ボスは半ば呆れながら、そして、少し強引に話し始める。

「あのですね! どう考えてもあれは

『姫をどうやっていたぶつてやるうか!..』 とこう考えのもと

戦闘していらっしゃいましたよね?

私はアーマードールの回路を焼き切った事で外装にまったく傷を付けずに停止させました。

小ボスも首のうなじ付近にある、プラグ部分だけを綺麗に破壊しました。

ですけど、魔王様は火系の大魔法ばかり駆使し、アーマードール

姫様

の外装は丸焦げ。

外装だけでは活動を停止しないアーマードールは攻撃を続行。ですが、魔王様は魔力切れでボコボコにされただけではないですか？」「

中ボスは口早にそつ語ると、私はこれで、といい席に着いた。

「ねえ魔王？」

地獄の釜を開けたかの様な、地の底から響く声が魔王を呼ぶ。今、その地獄の釜を覗けば閻魔様にだつて謁見する事が叶うはずだ。

「そんなに私を『丸焦げ』にしたい？」

「めめ、めつ滅相も無い！！」

可愛くて、愛くるしく、（胸が）小さくて美しい、チャーミングな姫をにそんな事をしたい何て、思つてもいませんよ！！」

「胸が小さいってなによ！ また胸の話題がアンタはああああ
「はっ！？ 僕とした事が、心の声が表に出ていたか！？」

姫によつて、魔王がぶつ飛ばされる直前、中央モニターに動きがあつた。

「アーマードール、“勇者”を捕捉しました」

その小ボスの声で、全員が、モニターにしゃべ付けになる。

最終ゲートの扉を開け、勇者がゆっくりと城内に入る。

そして、勇者の目の前に一人の水着姿の女性が現れる。

女性の唇が微かに開き、言葉を放つ。

『お兄ちゃん……』

.....。

何故か中央司令室内に響く、『お兄ちゃん』といつ場違いな声。その声に、よく似ている者に視線が自然と集まる。

「えっ！？ 何よ！？ 私そんな事いつてないわよー！」

うろたえる姫に対し、俺達は冷ややかな目を向いた。
だが、アーマードールのプログラム担当である、妹だけが理解する。

その姫の方に向き直り、口を開く。

「あれはアーマードールの合成ボイスよ」

魔王は、声まで姫とは芯が細かいと思い、詳しく聞いたと思つたが、モニターに更なる動きがあり、開きかけた口を閉じる。

『貴方は！？ 姫様では』「ございませんか？』

今は、敵城である、魔王城の城内故、挨拶は省かして戴きますが。手前は、貴方のお父上である、魔王の勅命で参りました。さつ、私と共に魔王の元へ帰りましょう！…』

勇者が声を張り上げながら答えたが、アーマードールは聞く耳を持たないと言わんばかりににじみよる。

『お兄ちゃん』『お兄ちゃん』

ステレオで耳に届く『お兄ちゃん』と言ひ呼び掛けが聞こえ、勇者が慌てて周りを見る。

そこに居たのは、一人……いや、一機の姫の姿だった。

『姫様が一人！？ 驚きました……。魔王は娘は一人だと伺つておりましたが。瓜一つの、隠し子が居らつしゃつたとは……』

勇者の言葉に、「馬鹿じゃないの！…」と物凄い勢いでツツツツまくる姫。

それを魔王は、ギリギリ、と馬のよのに止める。

『とにかく、皆さん早く逃げましょ！ いくら私でも一人を同時に護る事はできません故』

勇者は、自分が着ていた上着を水着姿の姫にそっと掛け、姫の手を引いた。

だが、いくら力を掛けても姫の身体はその場を動かなかつた。

それを疑問の思ったのか、勇者は振り向き、姫（水着バージョン）の方を見た。

姫は不敵に笑い。突如、勇者に腕に抱きつく。

『！？ 何をなさるのですか！？ まさか催眠術が何かを？！』

不安の思つた勇者が、他の姫達を見た。

姫達と勇者との距離は既に一メートルも無かつた。

その全てが勇者に抱きついた。

その後。

「……ボン、だ」

魔王がそう呟いた刹那、モニターから凄まじい光が漏れ。画面が乱れる。

「ちょ、ちょっとビツึく事？！？」

「ふふふ、勇者達は姫を助ける為に来ている……その姫が偽物で、それが自分の近くで大爆発……。
結果は言つまでもないな？」

今頃、勇者は、年齢制限やモザイク処理無しでは見られないほど恐ろしい状態だらう

魔王は魔王らしくほど、大口を開けた、大笑いをした。

「…… 魔王様、勇者反応、消えました！！」

「せうだらう、せうだらう」

小ボスの言葉をそのまま、勝利の意味として理解した魔王は更に高笑いを浮かべていたが。

その言葉の意味を理解している者が一名。

魔王に伝えた小ボスと、早期勇者警戒用センサーを開発した中ボスだけだった。

「小ボス、勇者は今どこに！？」

「それが……、ゲート周辺にもまつたく反応が無いです……」

そこでようやく疑問に思つたのか魔王が口を開く。

「あの……、勇者は肉片になつたのでは？」

中ボスは忙しくコンソールを叩きながら、口早に説明した。

「私が開発した、早期勇者警戒用センサーは勇者血族の血 자체に反応するのです。

あれほどの戦闘力を所持している勇者ならその精度は折り紙つきのはず。

その血で反応するセンサーが『姫』様の爆心地でまつたく反応が

なこといつのはあつえません」「

魔王は中ボスの言葉を反芻する。そして納得がいかないのか、再び訊いた。

「爆発で血が全て蒸発したとか……？」

「核爆発や燃料氣化爆弾では無く、通常の手榴弾のよつた破片で攻撃するタイプの爆発で、

まつたく血が残らなこといつのはおかし過ぎます」

魔王は、中ボスの言つている内容はよく理解できなかつたが、口でとりあえず納得しておかないと罵られるので納得した振りをしたおいた。

「おお、お、おひ……よ、よーく分かつたぞ~」

何故か姫も含め、全員がジト目で魔王を見た。

「べつ、別に理解して無いわけじゃないんだからねッ……」

魔王の言葉に、全員がため息を吐いてみると。

「ふむ アナタが“現・魔王”ですか」

……その声に全員が振り向いた。

第十二話『最強の勇者襲来！？』（後書き）

これと予告編含め4分割構成になります。
長い上にコメディが少ない（いやもはや無い）ですが、見て下さる
とうれしいです。

第十一話『最強の勇者襲来ー?』 ? (前書き)

今回は戦闘描写が主です。

第十二話『最強の勇者襲来！？』？

第十二話『最強の勇者襲来！？』？

「ふむ アナタが“現・魔王”ですか」

氷のような、心まで凍えてしまったような、冷たい声が司令室内に、静かに響く。

その声に皆が振り向くと、そこには先ほど見かけた“勇者”がドアの前に立っていた。

俺達が硬直する中、勇者はゆっくりと姫に近寄り、地面に膝を着いた。

「姫様、お向かいにあがりました、国王が城でお待ちです」

「アンタ、いつからそんなに強くなつたのよ？」

「はて、何のことですか？」

跪く勇者に対して、姫は訝しげな顔をしながら、質問した。

だが、勇者は眉をピクリとあげ、何処を見つめているのか良く分からぬ糸目で姫を見つめ返した。

「何の事つて……アンタのその強わよー！ 私と戦つた時はまるで強く無かつたじゃない！！

それなのに、何でいきなりそんな剛力フォースがあるのよッ！…」

まくし立てる様にして、口早に言葉を言い放つ姫。その言葉を聞いて、やつとの事で命懸がいったのか、勇者は掌てのひらを、もう片方の手で、ポンと叩いた。

「なるほど、それで些か戸惑つておられるのですね」「それはですね」

勇者は、魔王達の事がまるで眼中にないのか、ゆつくつとした口調で説明を始めた。

「私の家系は代々勇者をやつているのはご存知ですよね？ そして、我が家宝である、宝剣ペーブレイブ紙刀ホーリーガミ別名を“臘紙”臘神と呼ぶ場合もあります。

紙刀は紙よりも薄い刀身を持つ事から、この名が付けられました。この紙刀の最大の特徴は“能力解放”にあります。

抜刀時、身体能力を筋力のみですが、力を三倍ほどにあげる効果があるので。

今だ、私には巧く使いこなせてはいませんが、それでもこの力は強力です」

糸目の勇者はそう言いながら、鞘さやから、素早く刀を抜いた。

その刀身は、横から見たら普通の刀だが、真正面から刃を見たら、何も無いように見えるほど薄かった。

(ペーパーナイフって……物凄いしょぼい名前だな……。)

便箋

や封筒でも主に開けるのだろうか?)

魔王は笑つてはいけないと、思いながら、両手で口を塞ぎ、必死に込み上げてくる、ツツ口ミたいといつ欲望を抑えていた。

「ペーパーナイフ? 手紙でも開けるの?
それに何、“能力解放”? 中一病設定はチラシの裏にでも書いてなさいよ」

初めて、この勇者を見つめて居た時は、熱の入った視線を送つていたにも関わらず、妹はズバズハとそう言った。

「国王様にもそう言わされましたが、そんなにもこの別名は氣になりますか?」

うん

一同、一糸乱れぬ統率で、同時に頷く。
それに対し、糸目の勇者は少し眉を顰め、考える。

「ですが、この龍神。皆さんがよくご存知の、ペーパーナイフなる物より前に作られた刀ですよ。

なのでこちらが元祖。これなら別に違和感は無いのでは?」

糸目の勇者は投げかける様にして、そう言い放った。

姫含め、全員が未だ納得していない、と言った表情だったが、これ以上食い下がる者もいなかつた。

「質問は以上ですね?」

では“殺戮”を始めますか

糸田の勇者は持っていた刀をゆっくりと上げる、上段の型に移行すると、そこで動きが止まる。

「おい、勇者。姫を連れ帰ると言つなら好きにするがいい。だが俺達を殺すと言つなら俺が相手にならひ」

魔王は臆することなく一步前に出た。
その動きに、勇者はピクリと反応し、一瞬その目が少しだけ開かれた。

左右の眼の色が異なっていた。

右目は蒼く、左目は金色に輝いていた。

魔族にも、虹彩異色症オッドアイの者は居たが、その全てが同種族の中でも一線を画す程の力を持つていた。

「貴様の好きなジャンルで戦つてやる。好きなスポーツでも、好きな趣味でも、好きなものを選ぶがいい」

「ふむ、現・魔王は平和主義者だと国王から聞いていましたが、本当のようですね。

そのような方が、何故、姫様を連れ去ったのかが不明ですが……」

魔王は姫の方に指を指しながら「こいつが勝手に攻めて來たんだ
！！俺は被害者だッ！！」

と必死に訴えていたが、勇者はまるで聞いていない素振りだった。

必死に弁解する魔王をよそに、ひたすら熟考する勇者。

そして、考えがまとまつたのか、ゆっくりとした動作で、刀を鞘

に仕舞つた。

「いいでしょう、では、
“剣技”^{けんぎ}で雌雄を決しましょ！」

「剣でも持つて、舞いでも踊ればいいのか?」

魔王の言葉に、勇者は「まさか」と言い、呆れたような顔をした。その顔を確認して、魔王も中ボスの方を向き、やや命令口調で言葉を投げかける。

「中ボス、 “日本刀”を持って来い！」

平時であれば、中ボスも「い」自分で取つてきただらどうですか？」と反論の一つも言つが、今は何も言わず、頷くと、すぐさま姿を消した。

中ボスが移動したのを確認すると、魔王も、勇者に「場所を変え
る」と言つ。

勇者もそれに黙つて従つた。

糸目の勇者は魔王城の丁度中央に位置する、庭を見ると、感心したような、それでいて呆れているかのような声で言った。

「この中庭は中ボスと魔王が趣味で作った、個人的な庭だったが、その庭には妥協の一文字は無く、隅々まで、凄まじい力の入れようだった。」

所々に木々が植えられており。その間をとても小さな小川が流れている。

その小川に小さな橋が掛けしており。

純粹に風景を楽しむだけでは無く、気分転換に歩きまわる事も出来た。

特殊な品種なのか、まだ春どころか冬すら來ていないにも関わらず。

一本の桜は何故か既に満開となっていた。

だが、それに対して勇者は特に気にとめた様子は無かつた。

「この様な場所で殺し合つのは不本意だが、日本刀で戦うのだ。桜があるこの庭園で戦つのも悪くはあるまい」

魔王の言葉に、勇者はゆっくりと頷き。その後魔王の方を向いて小さく頭を下げた。

「やはり、国王の現・魔王が平和主義と言つるのは本当のようですね。正直、嘘だと思つていましたよ。」

それに、あの状況下で、私は勝ち目が無いにも関わらず、魔王の勅命を受けた騎士勇者として来ているので、命を掛けねばならぬ状況下で、アナタは私と一対一で戦う道を選んでくださった。

正直、アナタの後に居た三人と戦えば私はまず間違え無く、殺

されて居たでしょ」

そして、勇者は魔王にもう一度頭を下げると、更に言つた。

「アナタが一対一を受けて下さった事には感謝をしています。
それにアナタは悪い魔族ヒトツでは無い事も解りました。
ですが、私は勇者。たとえアナタに“悪”が無かるつと、国民は
アナタの事を『姫を連れ去つた者』として見ています。
それがある限り、アナタを討つ必要がある。それだけは分かつて
下さい」

魔王は「理不尽だな」と言い、苦笑いを浮かべた。

勇者もそれに対しては思つてゐるが、少しだけ同情とも思えるような顔をした。

「魔王様、お持ちいたしました」

中ボスは言葉少なく、そつそつと、赤い布に包まれた長物を出し。
魔王に手渡した。

魔王も赤い布を慣れた手つきで取つ払う。

そこには、血で染め上げたかのようなどす黒い赤色の鞘に納められた刀が現れる。

魔王は二十七センチほど刀を鞘から抜くと、刀身を少しだけ見て、そのまま鞘に仕舞つた。

刀を見て、勇者も思わず声が出る。

「その刀！？ まさか千子村正！？！？ 名刀、あるいは妖刀と呼せんじむらまさ

ばれるソレを何故お持ちに！？

焦る勇者に対して、中ボスが、説明をする。

「魔王様がまた何かのゲームに影響されてか、『欲しい』と申されたので、私が借りてきました。

もちろん許可は取っていますよ。……ですが使用許可は戴いていませんが」

中ボスが最後、とんでもない事を口にしていたが、勇者には今は、その言葉を聞き取る余裕が無かつたのか、

少し興奮したような口調で「勝つたら譲って下さい」と言つていたが、魔王もこの刀は借り物だけに、うなずく事は無かつた。

「ゴボン 私とした事が、少々取り乱してしまいましたね。

そうですね、今はこの様な事をしている場合では無かつたですね

勇者はそういつと、後ろ歩きで、魔王と少しだけ距離を取つた。魔王も、それは戦闘準備の為だと悟り、それに合わせて後ろに下がる。

魔王はおもむろに周りに目を向けた。

中ボスを含めた、城の中に居る皆が、決闘を見守つていた。

姫以外の者は、勝利を確信しているかの様な余裕が見てとれた。だが、姫だけは、不安なのか、握りこぶしを作りながらも、必死にこちらを魔王の方を見つめていた。

それは魔王を巻き込んだ事への罪悪感なのか、それとも別の感情

なのか。

魔王はそんな姫を見つめ返し、懐から何かを取り出すとそれを姫の方に向かつて投げた。

「俺の宝物だ、預かつて居てくれ。それがある限り、俺は必ず生きて帰る」

姫が渡されて物はA4サイズ程の箱だった。魔王から渡されたソレの大きさや重さを感じながら、姫はそれを抱き抱えるようにして持ち。姫は顔を上げ魔王を見つめた。

魔王も、姫が預かつてくれた事で、安心したのか、箱の方を一瞥^{いちらべつ}すると、勇者の方へ向き直った。

魔王は「待たせたな」と言い、刀を鞘から乱暴に抜くと、鞘を中ボスに渡し、構えた。

鞘と言つ呪縛から解き放たれた刀を、魔王はゆっくりと構えた。その刀は光に反射し、白く輝いていた。

だが、魔王を含めた皆は、銀色に輝いているはずの白刃はまるで血に染まっているかのような錯覚を覚えた。

それは妖刀と呼ばれる刀が見せる幻影。

しかし、それが幻だと分かつていながらも、その白刃が血で汚れているようにしか見えなかつた。

田を信じるか、それとも知識や常識を信じるか、そのどちらに重きを置いているかで見え方は多少異なつた。

だが、勇者だけは、決闘を行つてゐる。今から死闘を行つ勇者だけは、その血が自分の血のように感じられた。

それは、まるで自分が 今、目の前に見える、血刀が自分の末

来のようにしか思えなかつた。

相手に死の錯覚を見せる刀 村正。

魔王が手に持つてゐる刀が、妖刀と言われる由縁だつた。

苦しみながらも、魔王の刀を見つめ返す勇者。

相手は妖刀の見せる幻影のおかげで、勝負は一方的に終わるよつに思われる。

だがしかし、村正には使う者にも苦痛を与えた。

「 ぐつ

今、魔王に与えられている苦痛 それは、自分の死である。相手に、死の錯覚を与えるように、魔王にも死の錯覚が与えられていた。

だが、魔王が与えられている死の錯覚は勇者が受けているモノより数倍の迫力と生々しさを感じられた。

そう、使う者の方が負担が多いのだ。

しかし、村正を使う者には覚悟も心構えもある。それがどの程度か分かつてゐるだけマシと言つものだ。

魔王は刀の柄^{つか}を握り直すと、再び構えた。
それに答える様にして勇者も構える。

両者、上段に太刀を掲げ構える。

「一刀魔族真改流 魔王、参る」

「魔族のそれほどの大層な名前の流派があつたとは……対魔族用剣

術 勇者、参ります

姫と勇者を除く一同は《絶対、今考えたな》と思いつながらも口を紡いだ。

勇者と魔王の身長はほぼ同じ。それは“ほぼ”同じ間合いを意味した。

互いに少しずつにじみ寄る。その度に、庭の砂利が小さく音を立てた。

勇者は妖刀による幻影の影響で、本来の実力の半分も出せないほど集中力をかき乱されていた。

妖刀の効果自体は、魔王にも勇者以上に負担を強いていたが。それでも妖刀の持ち主である魔王には幾分か余裕があるはずだった。

だが、魔王は妖刀によつて得た優位性を、自ら潰していた。

(寸止めか、それとも急所外しか……どちらにしても、限りなく薄い確率だな)

そう、魔王は勇者を殺すつもりはなかつた。

しかしながら、勇者は魔王を切るつもりでいる。

この考え方の違いで生まれる差は、恐ろしいものだった。

何れにしろ、魔王はその考え方を改めるつもりも毛頭無かつた。

それに、今さら新しい作戦を考える為に思考を巡らせば、それこそ命取りだ。

魔王は全ての雜念を捨て、目前に迫る敵に集中した。

ゆづくつとそれでいて、確實に互いの距離は縮まっているのにも
関わらず。

それは、いつまでも続くような錯覚を舐て舐めた。

無限にも感じられる時間の中で、彼らは神経を張り詰めながら進む。

互いに、行き死にが掛かっているのだ。

両者にとって、たった半歩ですら、それを進むのにすら地獄に身を投じるような覚悟が必要だった。

「……」「……」「……」

桜の花びらが地面に落ちる音すらも聞こえてきそつうな程の無音。

(来るッ)

魔王は勇者の攻撃がこのタイミングで来ると予想していた。

それは何故か？

勇者の方が、ほんの少しだか身長が高かった。

たかだか数センチ程度かもしれない。だがその数センチが生き死にを別ける。

その数センチでこちらは絶命、相手は深手を負うが死にはしない。

生き死にのやり取りをする上では、それだけで十分だった。

故に魔王は攻撃が来ると思った。

しかし、勇者は動かなかつた。

再び距離を詰め、間合いが狭まる。それは間合いの、勇者の優越的距離を失う事を意味した。

あれほどの手練てだれであれば、自分の有利な条件かを見誤るはずがない。

ほんの一瞬、時間にして、十分の一秒にも満たない僅かな時間だが、魔王は混乱した。

その瞬間、勇者が動いた。

まばたき
瞬まばたき目すら行えぬほどの短い時間。

たつたそれだけの時間を勇者は見逃さなかつた。

第十二話『最強の勇者襲来！？』後口編

第十二話『最強の勇者襲来！？』後口編

「魔王様、換え湿布ココに置いておきますね」

「ああ、すまんな」

小ボスは、魔王城の救護室に備え付けられている戸棚から、湿布を取り出すと魔王に手渡した。

それを受け取ると、ベット脇にそれを置いた。

糸目の勇者はその湿布に手を伸ばし、自ら湿布の取り換えを行うとしていた。

既に小ボスの姿は無く、魔王はドアの方を一瞥^{いちべつ}すると、そこにはなるべく邪魔をしない様にとの配慮か、気配を程よく消した中ボスが控えていた。

魔王は、ベットの近くにある、折りたたみ式の椅子を乱暴に引つ張り出すると、勢い良く腰掛けた。

“ 真剣 ” 勝負、だと思つていました、随分侮^{あなど}られたものですね

勇者は肩にある、古い湿布を剥がし、新しい湿布に貼り替えながら口元した。

その言葉に魔王は得意げに笑い。

「今は悪魔^{マオウ}がほほ笑む時代だ、何を使っても勝ち残りやあいいんだよー！」

と言い、大口を開け笑つた。

勇者もそれに釣られてか、傷を気にしながらも笑つた。

一日前。

「 クッ！ ゴルゴーンアイ」

魔王は危険をいち早く察知し、咄嗟に固縛魔法を使うと、勇者の動きを封じた。

「貴様あああああー！」

必死に動こうともがく勇者の双眼開かれ、魔王を見つめる。と、その時、固縛魔法で出現した黄金のリングがパリンと音を立て壊れる。

何故、魔法が解けたのか理由が解らず困惑する魔王。

そんな魔王に対し、糸目の勇者は目を見開いたまま、まともな攻撃がままならぬ姿勢で太刀を強引に振り下ろす勇者。

勇者の力に驚愕する魔王だったが、多少の負傷はやむを得ないと

判断した魔王は、手に持っていた太刀を勇者の肩に向かって、力任せに振り下ろした。

魔王城にある救護室のベットから半身を起こす勇者。

その傍らには、勇者の着ていた服と、勇者の得物である刀が置いてあつた。

救護室には八つベットが並んでいたが、勇者が使っている一つを除いて、七つの空きがあった。

それ以外にも六つほど、このような部屋があつた。そのどれもが今は使用していなかつた。

「まさか、模造刀で“真剣”勝負するとは。それにあれほどの幻覚を模造刀で見せていたとは。

中ボス殿は凄まじい術をお持ちで」

扉の方でじつと待機していた中ボスに、勇者はそう言った。
その言葉に中ボスは黙つて、少しだけ頭を下げた。

「魔王居る？」

姫は救護室の扉を開け、魔王が居るかどうかを確認する為に、視

線を彷徨わせた。

そして、魔王を見つけると、トロトロとやや躊躇足で歩み寄った。

姫は、一つの箱を抱えたい。

その箱は、勇者との決闘前に魔王から直接預かった物だった。

姫はその箱を、まるで壊れ物を扱うかのように大事そうに両手で抱えていた。

その箱をゆっくりとした動作で魔王に渡すと。

魔王は箱を受け取ると、まるで新しい玩具を貰えられた子供のように騒ぎながら、姫に感謝の言葉を告げた。

「おお、すっかり忘れておったわー！ 感謝するぞ、姫！」

魔王の言葉に気を良くした姫は、魔王の行動をじっと優しい目で見守った。

その雰囲気にのまれてか、勇者ですら、微笑んでいるほどだ。

だからそんな微笑ましい光景も、魔王の要らぬ一言で終わりを告げる。

「では早速この“Hロゲ”を真・魔王神宮に捧げなければ……」

パンコン名
インストール

魔王はそう言いながら、姫の肩を叩き、「御苦労、御苦労」と言い、姫の横を抜けた。

鼻歌が聞こえてきそうなほど嬉しそうにする魔王に、底冷えのする声が背中から響く。

（ん？ なんだこの背後から迫る、死の気配は？ ……これは殺氣かッ！？）

魔王の背中から視線に、嫌な汗が吹き出る、本能が振り向かずそのまま逃げろと叫んでいるにも関わらず。

それを無視すると、ゆっくりと後ろを振り向いた。

『……勇者様、いかがへ』

『えっ？ 一体なにがどうしたと言うのですか？？？』

魔王が硬直するなか、中ボスは速早く危険を察知し、勇者の腕を自分の肩に回し、勇者の身体を起こし。

何が何だか解らぬ困惑する勇者を、多少強引ながらも窓の方へ連れ出した。

「ねえ魔王、質問があります」

「……ははは」

乾いた笑いを浮かべる魔王。それに対し、姫は、凍えるような悪魔的な笑みを浮かべ訊いた。

「私がアンタの事を思い、大事に抱えていた“物”つて“エロゲ”だつたの？」

「イエムマム！…」

鬼軍曹を前にした新兵のように、条件反射で敬礼を行いながら答える魔王。

誠に綺麗な敬礼とは対照的に、反対側の手にはしっかりとエロゲが握られていた。

「魔王？ アンタさつき勧者になんて言った？」

姫の言葉に？ マークを浮かべる魔王。その顔を見ながら、姫は笑った。

それは笑顔ではなく、頬笑み。悪魔の……

「今は悪魔がほほ笑む時代」よツ…！」

凄まじい閃光と爆音と共に。魔王は窓から飛び出した。

「勇者よ、それで私の娘は奪還できたか？」

「魔王自ら一対一を申し出てくれましたが、結果は……」

国王城に戻り、国王とのお面通りを許され、国王の前で片膝を付く、糸田の勇者。

当然、姫を連れ帰る事は叶わなかつたので、任務は失敗。

勇者はどんな処遇も甘んじて受けける覚悟で国王の前に立つた。

「まあ元より、“姫”を助け出して欲しいと思つたからお前に命令を出したのではない」

「では何故？」

国王の言葉に疑問を覚え、下げていた頭を上げ質問した。多少、舌足らずな、質問をする勇者だつたが、それに対しても、気を悪くしたようすは無く、淡々と答えた。

「娘の現状を知りたくてな。それでお前を向かわせたのだ。それに、どうせお前程度では今の魔王は到底太刀打ちできんかつただろ？」「

見た目や性格が“あれ”でも魔族のトップである“魔王”的地位についてる男だぞ？」

仮にも糸田の勇者は王都最強という事になつてゐるにも関わらず、

国王は勇者に向かつて「お前程度」と言い放つた。

侮辱としか取れる言葉に勇者は怒りはおろか、嫌悪感すら覚えた
かつた。

確かに自分は無力だった。

たとえ本気を出した所で、魔王ジンジカ、その部下にすら自分は
太刀打ちできないと考えていたからだ。

更には自分の田の前に居る国王　元・勇者。

国王はその昔、元祖・勇者には遠く及ばぬとも、歴代勇者の中ではかなりの力を持っていた。

今はその力が衰えたとは言え、生ける伝説とも言える元・勇者に
対し言い返す度胸も、資格すら負け犬である糸目の勇者には無かつ
た。

「それで、勇者よ。姫は魔王城で近頃は何をしていた？」

魔王は、勇者を懲々魔王城に出向かせた、本来の目的を果たすべ
く、娘の近時を訊いた。

勇者は答えに詰まつたのか、難しそうな顔をしながらも、短く、
簡潔に思つた事を告げた。

「あまり長くは居なかつたので、多くの事は語れませんが。
良い意味でも悪い意味でも今も昔もあの方は“姫”でした。
それより気になるのは魔王の扱いですね。

……一言で言えば姫様の 徒者 。……いえ、あれは最早
“奴隸”でしたね」

その言葉に魔王は一瞬、キヨトンとすると。
すぐさま合点がいったのか、大声で笑つて見せた。

一方その頃、魔王城では。

「魔王、お茶」

「はいはい」

短く返事をすると、お茶を入れる魔王。

「肩」

「はい、ただいま」

大急ぎで急須を置き、姫の後ろに立つと、程よい強さで、肩をもむ魔王。

忙しく動く魔王に、すぐさま、新しい命令が飛ぶ。

「ちよつと魔王飛んで見なさいよ」

「空に?」

「ジャンプよ、ジャンプ。『まいめり飛んで飛んで』」

魔王が飛び跳ねるたびに、チャリンチャリンとポケットの中の硬貨が踊るようにして音立てた。

「ん」

姫は乱暴に手を魔王の前に出すと、魔王は半泣きになしながら、ポケットから財布を出した。

しかし、魔王が財布の中身を覗いたとした時、
その財布が手の上から消える。

すぐに、魔王は自分の財布が姫に取られた、といつ事に気が付いた。

だが、たとえ、取られた事が解ったとしても、それを取り返すような真似が出来るはずもなく。

魔王は姫と言つ名の、台風が過ぎるのをじつと、辛抱強く待つしか無かつた。

「七千円？ シケてんわねえ」

姫はそう言いながら、器用にも、五メートルほど離れている小さなゴミ箱に魔王の財布をゴミ箱へ投げた。

財布は綺麗な弧を描きながら、ゴミ箱に吸い込まれるようにして入つた。

見事にゴミ箱へ送り込まれた財布に満足したのか、姫は小さく「よっしゃ」と言いながらガツッポーズをし、そのまま王室を後にした。

音を立て閉まるドアを悲しげな目線で見送る魔王。

そして、魔王の近くでずっと佇んでいただけの中ボスも、魔王の財布入りの「ごみ箱を『燃えるゴミ』と書かれた、可燃物専用の大きなゴミ袋に移し、それをきつと縛ると、口を開いた。

「魔王様があんな物、姫様に預けるから……」「つるさこヤイ！！」

魔王は涙ながらに、中ボスが縛つたゴミ袋から、自分の財布を取り出すと、そう言い放つた。

悲しさに田を赤く腫らせながらも、再び椅子に腰かけ。

近くに置いてある炭化した箱を手元に寄せるとい、中から粉々になつたゲームのディスクを取り出した。

「これ……メーカーに問い合わせたら保障してくれるかな……？」

「……“ディスク爆碎保障”とか聞いた事無いですね」

中ボスの言葉に魔王は「瞬間接着剤とかで治らないかな」と呟きながら粉々になつたディスクをパズルのように組み合わせる。

そんな魔王の肩を中ボスはポンと叩くと、首をゆっくりとした動作よ横に振つた。

魔王はそこで耐えられなくなつたのか、突如粉々になつたディスクが入つた箱を持って王室から出て行つた。

その夜、姫は、自分が粉々にしてしまつた魔王のエロゲを小ボスに頼み買って来て貰い。

そして、そのエロゲを魔王に渡し、魔王は感涙しながら姫に感謝した。

その光景を見ながら中ボスは思つた。

(あのゲームを買つお金つて、元は魔王様のお金では?)

た。姫の行動を中ボスは見つめながら、見事な“餌と鞭”だと関心し

第十二話『最強の勇者襲来！？』後日編（後書き）

ちょっとストーリーに直接関わりのある台詞がチラホラ。

まあ適当に行き当たらばたりで書いて来た『姫の従者は魔王様！？』
真面目回も少し片付いた所で、元のコメディー路線に帰るか。

第十四話『進軍！？ 勇者五千人の襲撃！？』

第十四話『進軍！？ 勇者五千人の襲撃！？』

朝食を食べ、食器洗いは中ボスに任せ。

自分の役目である洗濯を始めるべく、洗濯物をかき集め、その選択物を洗濯機にブチ込み、洗剤を入れスイッチを押した。

魔王はすぐに自室に戻ると、テレビの電源を入れた。

毎週この日の朝九時はローカルテレビで、魔王が好きな番組「マタタビ求めて三丁目」を見る事に決めていた。

もちろん楽しみにしている魔王は、それを見逃さないようになると、出来るだけの用事は先に済ませ、テレビの前に座つていたのだ。持つてきていたお茶を一口飲み、皿に移してあるせんべいをバリバリと音を立て食べ始めた。

そして、見たい番組も終わると突如、何やら鼻がむず痒くなり始めた。

「くちゅん」

「ちょっと！ 一いつに向いてクシャミなんてしないでよ、ピースが飛ぶじゃない。」

それでもアンタ、随分可愛らしいクシャミしたわね

いつの間にやら姫が魔王の隣で何やら作業をしていた。

魔王の隣で、一人ジグソーパズルを黙々と組み上げる姫。

そして何故か中ボスもその傍らで静かに読書をしていた。

「姫の中ボス、お前達はいつの間に居たのだ？……ははん俺様の事が恋しくて来たのであるつー！ そうだろウフー！」

何故か、姫の方に、ビジッ指を指す魔王。

姫も姫で、その言葉に反応する気もなく、ただ、パズルの完成図とパズルのスペースと睨めっこしていた。

「お前、少しくらい俺様の話を聞いてくれてもよからウフー！」

「えつ？ なに？ なんか言つた？」

「あつ……」めんなさい、何でもないです

床に「のの」字を書きながらいじける魔王。だがふと魔王は何か思ったのかその顔を上げた。

「お前なんで俺様の部屋でジグソーパズルなんて組み上げているのだ？」

「私の部屋だとスペースが無いのよ」

「二十畳以上ある部屋に『スペースが無い』だとー？ お前は部屋でゾウやキリンでも飼つて居るのか？」

魔王が責めるようにして言つと、姫は少しだけ言い淀む。

「…………部屋が…………いるのよ」

「あ？ なんて言った？」

「部屋が散らかっているのよー！ 分かった？！ 聞こえたーーー？」

「つぎやああキサマ！ 人の耳元で大声をあげるなッ！」

席から立ち上がった姫は、魔王の耳元で大声を上げた。

その怒声に驚きながら耳を塞ぐ魔王。

少しだけ叫んだお掛けで満足したのか、姫は再び席に着いた。

魔王は耳元で叫ばれたのが影響してか、右目をつぶり、右耳は手で押さえていた。

「耳が 耳がイテエ！ キーンつてする！ 耳がキーンつてするよー！！」

耳が痛いと叫ぶ魔王の隣では、中ボスは冷ややかな顔をしながら、そっと自分の耳から耳栓を外しポケットに仕舞つていた。

「中ボスって何でも持つてるのね……」

「何でも は流石にありませんが。

ですが、ドコでもドアやプルトーウムくらいでしたら今すぐに出せます。

お望みでしたら出しますが？

「 プルトナニ？ プルートの仲間？ まあいいわ」

姫の言葉に中ボスは残念そうに金属の塊と思しき物体を懷に仕舞つた。

魔王はその光景を片手で見つめながら、「ココでそんな物出すなよー！」と心の中でシッコリをしていた。

そんな事をしていた時。電源の入っていたテレビがザザーと音を立てたと思うと突如「緊急放送」の四文字が現れ、皆の視線がテレビ

ビに集まつた。

『えー一番組の途中失礼致します。

緊急速報。現在 魔王城 に向かつて“勇者五千人”が向かつて
いるとの速報が入りました。

付近の住民の方は家の戸締りを確認し、家から一歩も出ないで下
さい。

屋外に居る方はすぐに建物内に避難してください。

緊急速報です。現在 魔王城 に向かつて“勇者五千人”が向か
つているとの速報が入りました』

テレビから緊急速報が流れ、ニュースキャスターが伝えた内容に
唖然とする魔王達。

「　「　「 勇者五千人！？？」」

一同、驚愕と共に声を上げた。

- - - - -
魔王城から五キロほど南の小さな町の大通りでは、多くの“勇者
”達が集まっていた。

この町には三百人ほどしか住んでいないが、今この町の人口はそ
の十倍以上に膨れ上がっていた。

「本日をもつて貴様らはウジ虫を卒業する。今から貴様らは“勇者
”である。

貴様らは兄弟の絆に結ばれる。

貴様らがくたばるその瞬間まで、“勇者”は貴様らの兄弟だ。

今から魔王城へ向かう。殆どの者は一度と戻らないだろ？

だが肝に銘じておけ。魔王を殺す！－ 我々は魔王を殺す為だけに存在する。

だが勇者は永遠である。つまり 貴様らも永遠である－

沢山の軍服と思しく服に身を包んだ男達が集まる中、一人大きな帽子をかぶっていた男が言った。

戦場に向かう“勇者”達に激励を飛ばし、それにより勇者達は奮起した。

『サーイエッサー』

全員が一絲乱れぬ統率で声を揃えた。

帽子をかぶっている男もその返事を聞き、誇らしげな顔をした。そのままの勢いで、男は魔王城に向かつて指を指すと「進めッ！」と短く号令を出し、すぐさま全体に伝わり、勇者達はゆっくりと魔王城へと駒を進めた。

とこゝろ変わつて魔王城では。

既に司令室に移動した魔王達。

司令室には当直の小ボスの姿と、妹と中ボスが駆け付けていた。

「勇者軍移動開始しました。現在の兵力、その数 三千。予想より少ない数ですが、後詰が控えている可能性が高いです」

小ボスがそう言い、同時にコンソールを叩き、勇者軍の映像を中央モニターに表示した。

そこに移されて居たのは小さな町にはびこる、苔の様な黒い模様だつた。

それが全て人だと聴いた時は鳥肌が立つほどの人々。

「相手は勇者だ。人と思ってかかるな。勇者にはそれぞれ長けた特徴がある。

その特徴が分からぬうちは防御に徹しろ」

「お言葉ですが魔王様。あの軍勢が全て魔王城に取り付くような事態になれば半日も経たずに落城ですよ」

「ぐぬぬ……仕方ない魔王ちゃんインパクトを全機出せ……！
使える物は何でも使え。出し惜しみは無しだ」

魔王は“姫”以外のメンバーに役割を振り。
姫は何をやればいいか聞いた。

「お前は“俺様を”護れ！！」

「はあ……ねえ。それって普通逆じじゃないの？」

「戦場では勇敢な奴が一番に死ぬ！！自分の出来る事を弁え。
出来ない事は誰かに任せろ。自分が行える役割を行え！！ それ
が戦場で生き残る術だ。

「いいか？ 戦場では“カバー命”だ」

「そうね。勇気と奮勇は違うものね。アンタにしては良い事言つわ
ね」

「おう、だからお前は遠慮無く俺様を護れ！！」

「……自信を持つて言われるとなんか違つ感じがするのよね……」

…

魔王が胸を張りながらそう主張するが、ちょっとだけ不服な姫だつた。

「魔王様、現在百一十ミリ迫撃砲、砲撃中。

緊急発進させた魔王ちゃんインパクト三機が、あと一分ほどで敵と接触します。

一分後には五機の魔王ちゃんインパクトが交戦地域に入ります。射程は短いですが、高密度荷電粒子砲。使用可能状態で待機中

「打てる手は全て打った。あとは結果が出るのを待つだけだ……」

魔王はそう言いつと、目を閉じ。結果が出るのをじっと待った。

指揮官がどっしりと構えているだけで、兵は安心し、士気は低下しない。

それを分かっていて行っているかは定かではないが、魔王は自然とそれを行っていた。

相変わらず、底知れぬ方だ。と中ボスは思いながら、自らの仕事に集中した。

「…… 迫撃砲での被害絶大。敵に十%程の被害。

魔王ちゃんインパクト現在戦闘中。一機が右脚部中破。それ以外は目立った損害は無し。

被弾した一機は後退させます。五機の魔王ちゃんインパクト参戦。戦場は現在モニタリング不能。

現在確認できるのは魔王ちゃんインパクトから送られてくる映像だけです

中ボスがそう言いながら、中央モニターに魔王ちゃんインパクトからの映像を映し出す。

黒煙と爆炎。轟音を轟かせながら突撃する魔王ちゃんインパクト。多数戦を想定している魔王ちゃんインパクトでも一携帯式対戦車擲弾発射器《RPG》を大量に持つた勇者には押され気味であつた。

「魔王ちゃんインパクト損害率五十% 中破以上のダメージを受けています。生き残っている機体全てが

「これ以上の戦闘継続は不可能です」

一
よじ
後遞させN

「おにい、カメラ復旧したよ。現在勇者軍
度荷電粒子砲は連射が無理だから。
残り一千！！」
高密

多く見積もつても因発しか撃てない。

近奪砲も續々して撃つにと
それでも干はせられないと思ふ

「よし、これより勇者軍を城内で迎え討つ。それまでオートで射撃をおこなつておけ。

姫は俺から離れるな、離れたら俺様が死ぬと思え！！」

「勇者撃退に、魔王護衛が追加されてる気分だわ…………」

ため息を吐きながら姫が言つた。

「それで、結局何人の勇者が城に取り付いたの？」

姫がアクビを噛み殺しながらつまらなそうに訊いた。

「最終ゲートを抜けた勇者の数はおよそ八百。迎撃機能の殆どを失っていますので、今は入りたい放題です」

「あの“勇者”達。殆ど勇者としての血が薄いのか、早期勇者警戒用センサーでも中々引っかかるなくて困るのよ。見逃した子も居るだろうけど、最終的にココに来る数は、ざっと千百つって所ね」

中ボスの言葉に妹が付け加えるように言った。

姫自体も、この城に居た魔族、殆どを返り打ちにしたほどの実力があるので、今回の勇者には特に危機感を抱いてはいなかつた。

「来ました」

小ボスがそう言つと、魔王城の玄関扉が破られる。

一気に五十名近い勇者が雪崩込む。

中ボス達も戦つてるので姫も仕方なく戦闘に加わつた。

「何だ！ あれは“姫様”！？ 救出目標が我々を攻撃しているだと！？」

「きっと、催眠術か何かだ。傷つけずに捕縛しろ！…」

姫の姿にうらたえる勇者達だったが、抵抗する姫を『傷つけずに捕縛』なんて、到底人が成し得る技では無かつた。

そんな事をしているうちに、五十名ばかりの勇者はあつとこう間に全滅した。

しかし、倒したのも束の間。再び同じような数の勇者が雪崩れこむ。

「ちょ と。面倒ね！ らちが明かないわ。あつ 魔王そつちに五人行つたわ」

中ボス達の攻撃を抜け、五人だけ魔王の前に立つた。

「ふふふ、貴様が魔王だな！ 我ら勇者は デス・サントリーの異名を持っている。

我らと戦つて無事でいた魔族はいない！！」

「デス・サントリーだとー？」

勇者の言葉に、驚く魔王。姫は戦闘しながらも「何それ、飲料水メーカー？」と何やら言つていた。

「我的名前は ペプシ、勇者としての必殺技は、指からペプシを出すという恐ろしい技だ！！

ふはは、怖かろうーー！」

「水芸？」と魔王はふと思つていたが、ペプシと名乗つた勇者が後ろに下がり、次の勇者が魔王の前に立つた。

「我は なつちゃん。我也指からなつちゃんを出す事からそう呼ばれた」

「何だがお前らが不憫に思えて來た……」

「我的名前は 伊右衛門。お茶を入れるのが上手いという理由だけでの隊にスカウトされた」

「人員不足だ！！ 露骨あきつに人員不足が垣間見れるぞ！！」

人員不足の為に、最早、指から液体を出すと言つcateゴリーダけでは集められなくなつたか！！」

魔王がまくし立てるようにして言つと、伊右衛門と名乗つた男は「でも給料は良いです」と小さな反論をしていた。

「貴様ら下がれ。魔王よ、我は凄いぞ！！ 我の名は 黒酢にんにく！！ 指から……」

そこまで言つたところで魔王が「ちょっと待つて今調べるから」と言い、ポケットからモバイルノートパソコンを取り出し、何やら調べ始めた。

「あつOK、分かつた。これもサントリ一なのね。いいよ続けて」

魔王は公式ページを見た後、確認が終わつたのか、そう言い放ち、勇者の言葉を待つた。

「…………」「ホン。我が名は 黒酢にんにく グボア ……」

突如、黒酢にんにんと名乗つた男含め、魔王の前に居た勇者五人は倒れた。

「はあ、まったく何て長つたらしい紹介してるのよ。アンタ達が“商品説明会”を開いてる間に、アンタ達以外の勇者、全部片付いち

やつたわよ

姫はそう言いながら、ペプシと名乗った男を靴で突いた。

「くそ、不覚であつた……ガクツ」

「自分から『ガクツ』って言う人、初めて見たわ」

「貴様、折角俺様もノリノリで勇者の話を聴いていたと言つのに、邪魔をしおつてからに！！」

まだ最後の勇者の紹介を訊いていないだろ？！！」

魔王はそう言いながら、倒れているまだ“商品説明”とやらをしていない勇者に近付いた。

「お前の名を訊いていなかつたな。聞かせてくれ」

「我が名は コカ・コーラ をデス・サントリー 最強と呼ばれし男……ガクツ」

「「他社メーカー！？」」

姫と魔王のダブルツッコミで、勇者五千人の襲撃は幕を閉じた。

第十四話『進軍！？ 勇者五千人の襲撃！？』（後書き）

魔王「クツー！ デス・サントリー……なんて恐ろしい連中なんだ（棒読み）」
魔王も脅えるデス・サントリー。その内、他の回で出そうと少しだけ思う作者であった。

過去編第一話（前書き）

魔王の過去編です。通常の話とは雰囲気が違います。

過去編は数話続きますが、連続ではなく、何話に一話ずつ挿みます。

後々への布石なので致し方ないとthoughtしきださるとありがとうございます。
いです。（「メディアってタグつけてるのに、いいのかな？　ダメ
そうだったら別けます）

過去編第一話

過去編第一話

一年前、魔王は古びれたお城（？）と言つては、語弊いぐひがあるので
は？

と思つぱり、朽ち果てた小さな城に住んでいた。

外壁には、まるで模様のよ^{うな}薦つたが絡みつき。
外装から想像できるように、内装の方も惨憺さんたんたる状態であつた。
廊下は、ただ歩くだけで、今にも床が抜けそ^{うな}ほど軋きむ音が鳴
り。

壁紙も黒ずむよ^{うに}して汚れ。豪雨の日には雨漏りの為か寝床が
ビシコビシコになる事も多々あつた。

いくら駆除しようとも、何処からともなく湧いてくるネズミの処
理は疾うとに諦め。

今しがた、中ボスの田の前を横切つたネズミに視線を流した。

ネズミは歩みを止めると、恰も「ココは自分の家だ」と言わんばかりに、我が物顔で中ボスを睨み返した。

そんな図々しいネズミ《住民》に中ボスは近付くと、不法滞在の住民は廊下の壁を開いた、小さな穴へと逃げた。

ネズミの姿が消えたのを確認し、中ボスは再び目的の部屋まで歩
き出した。

目的の部屋に着くと、可愛らしい字で「魔王」と書かれたネーム
プレートを見つめた。

そして、少しだけ斜めになっていたプレートを、その手で正す。

プレートを綺麗な位置に配置すると、中ボスは満足げに頬笑み。田の前の部屋を二回だけ、ゆっくりとノックした。

しばらくすると、中からは簡素な返事が返ってきたので、そつとドアノブを回した。

しかし、そのドアは一向に開かれる様子は無かつた。

ドアノブは確かに回したはずだが、その肝心のドアノブは何故かドアから外れ、中ボスの手元にあつた。

中ボスが気を付けながら、ゆっくりと回したはずの、ドアノブはガチャリと言う音と共に、外れたのだった。

手に残されたドアノブを無造作にポケットに突っ込み。

またあとで修理をしなければ、と思いながら、中から開けて貰えるように言った。

中から「また壊れたのか?」と半ば呆れるような声が聞こえ、中ボスも小さくため息を吐いた。

そして、先ほどと同じガチャリと言つ音を奏でながら、田の前のドアが開……か無かつた。

中ボスは、絶句しながら「今の音は、まさかとは思いますが……」
と言い、ドアノブがハマっていた部分を見た。

そこには物の見事に、穴が開いていた。

中も外も、ドアノブが外れ、肝心のドアにはドアノブが外れて出来た穴が開いていた。

中ボスは、城のボロさに、遂に我慢の限界に達したのか、そのド

アを魔力を使い吹き飛ばした。

部屋の中……いや、中ボスと同じようにドアの前に立っていたのである。『魔王』は、その魔法によって吹き飛ばされたドアと共に吹き飛ばされた。

半壊した、ドアの下敷きになっていた。

自分とは主従関係の“主”であるはずの魔王を皿らの力で吹き飛ばしておきながら、中ボスは一切の謝罪も無しに、まずは自分の主人である魔王の上に載っているドアを元の位置に、とりあえず置いた。

魔王は呻き声を上げながら、やつとの思いで置き上がり、小さな卓袱台の前に鎮座した。

既に腰掛けている魔王は、中ボスに席に着くよいつ声を掛けた。

すぐさま『承の返事をすると、ゆつたりとしたマイペースで席についた。

綿がろくに入っていない座布団の座つ心地に中ボスは再びため息を吐く。

もつとも、中ボスの田の前に座っている魔王は、座布団すら無かつた。

魔王と中ボス。名前の通り、中ボスの方が社会的地位は下にも関わらず中ボスは何も言わず座布団を使用した。

魔王の部下である中ボスは、一つしか無い座布団を自分が使う訳にもいかないのだが、だからと言って、それを魔王に渡した所で、素直に受け取ってくれるはずはない。

元来、この人はその様なタイプなのだから。

それを表すようにして、魔王は卓袱台の近くにある、電気ポットから湯をくみ取り、お茶を淹れていた。

慌てて、中ボスは「私が淹れます」と言つたのだが、魔王はへラヘラと笑いながら「いいの、いいの」言いながら、中ボスの分のお茶を淹れ、それを中ボスの前に置いていた。

感謝の言葉を述べながら、中ボスは今から行われる、長時間に渡る説明の備えて、そのお茶で少しだけ舌を潤す。

中ボスがお茶を口から離し、湯呑ゆのみを卓袱台に置いたのを魔王は目で追い。

その動作が終わるのを見計らい。魔王は「それで、何か話があるのだろう?」といい口を開いた。

普段の魔王は、あまり“真面目”とは言えぬほど、戦闘訓練も帝王学もまともに学ぼうとしなかった。

いや、戦闘訓練も魔王を継承する為の帝王学などの勉強も“必要としなかつた”のだ。

「魔王様。魔王継承試験の方ですが。その開催日程が明後日に決定いたしました」

事務な声でそう伝えると、魔王は特に驚いたような素振りも見せず、「随分と急だな」と、まるで他人事のように言い、自分の分のお茶を啜すすつた。

「“元祖・魔王”様　　“パパ上”様が日程を決めると言つても。
さすがに急過ぎますね」

中ボスも魔王の言葉に同意するよつこしてわづ言ひ放つた。

“元祖・魔王”　　本人は『パパ上』と呼ばれるのが好きなのか、
親しい魔族には、そう呼ぶように執拗なまでに言つていた。
その父の息子である魔王の部下をやつている中ボスも例外ではな
かつた。

田の前に座つてゐる魔王様の“義理”お父上に当る方『パパ上』
が、今の魔界を作つたと言つても良いほど、元祖・魔王様は身を粉
にして、魔界発展の為に貢献してきた。

「別にあんな“クソ親父”に直接言われたからつて。
態々、“パパ上”とか気持ちの悪い呼び名で呼ばなくともいいの
だぞ？」

いつも魔王は父親の名前が出るたびに、明らかに機嫌を悪くした。
けして、自分の父親が嫌いな訳では無く、周りから、『歴代最強
魔王の息子』『元祖・魔王の息子』などと羨妬目で見られるのが気
に入らないのだ。

何処へ行つても、魔王にもその様な目で見られ、素直に褒められ
た事なんて生まれてこの方無かつたのだ。

何が出来ようとも、それは、魔王の血族　と言つ言葉で全て片

付けられた。

いつものように苦い顔を浮かべる魔王に対し、中ボスはポケツトにしまってあつた書類を取り出した。

そして、口早に 魔王継承試験 に関する書類を読み上げた。

「元祖・魔……ゴホン。パパ上様の事はまた後ほど。いくら明後日と言つても、時間は無限にある訳ではありませんので簡単に説明いたします」

中ボスの言葉に魔王は、話が既に元祖・魔王の話しから、魔王継承試験 の話に切り替わった事を感じ、説明を聞き逃さない為か、口を硬く閉じる。

「内容は魔王様も理解している通り、試験で求められるのは“力”、魔力や体術などを含む戦闘力を測ります。

まあいつものように“実力主義”という点は変わっておりません。参加人数は今のところ、東西南北含め五名。

私達が住む“西”からは魔王様一名だけですが。

奇妙な事に“東”から登録されているのが二名となっています。

戦闘力が規定に足りていれば、何人でも参加できるのが 魔王継承試験 のルールですが。

四方位から参加資格を持つ者を募ったとしても、今まででも四名以上集まつた事がありませんでした。

ですが、今回は“五名”。異例の事態となっています

中ボスはそう言い、新しい資料を取り出した。

魔王は、特に口をはさむ事無く、次の言葉を待っていた。

「ひちらが私達“西”を除く、三方位の猛者です。

この資料を見て解る様に、魔王様を除き、三方位……三名の実力は“規定ギリギリ”魔王様とは雲泥の差があります。ですが、何処からアプローチを掛けても、もう一人の参加者の名前が解らないのです。

それに関して、パパ上様にもそれとなく聞いて見ましたが、頑なに口を割りませんでした

魔王は中ボスから資料を受け取ると、そこに視線を落とした。魔力は当然の事ながら、使用できる魔法の種類や、それを発動させるまでの詠唱時間。

それ以外にも、戦闘センスを含む、取得格闘技なども記載されていた。

魔力上限は一般的な魔族で、その数値を“1”とした場合。

上位魔術師で“10”……魔王の血族の平均が80～140ほど。

しかしながら、参加資格のある二名は、100を少しだけ出る程度だった。

魔王になる為の試験……魔王継承試験　で必要な最低魔力が100以上な事から、彼は魔王の血を確實に引いて居ながら、その魔力は、魔王の血族としては平凡と言えよう。

第十五話『姫と魔王、一人でお買いものー?』

第十五話『姫と魔王、一人でお買いものー?』

現在、魔王は姫と共に王都 言わば人属が一番集う場所に来ていた。

当然の事ながら、姫の父親。国王もこの王都の中心部にある城で暮らしている。

魔王 ……いや魔族全体から見ても、敵地のど真ん中と言えよう。

そんな敵地で、姫は呑気に買い物を楽しんでいた。
対照的に魔王はひどくビクついていたが。

「さり、目的だった 古代魔法 の魔術本も手に入つたし、次はどこへ行きましょうか…… クシユンー！」

「うわあー！ 貴様ー！ ここは俺様にとつては敵地のど真ん中だぞー！」

見つかつたら“火あぶり”だぞ！ 立つ真似だけはやめてくれー！

「アンタそれでも“魔王”？ 王都軍くらい怖くもないでしょ？」
「そつ、そうだなー！ おつ、俺様に掛かれば王都軍くらいひやあー？」

今右足のところに何か通つたー！ 何か通つたー！」

「 ドラ もんじやあるまいし、ネズミ一匹にビビりしないでよ…

…

「び、ビビつてなんかいないぞー！」

「足をフルフルさせておいて、よくもまあそんな言い訳できるわね

魔王はネズミに驚き、姫の袖にしがみついていた。

なぜ魔王が敵地である 王都 に来ていたのは理由があった。

朝、朝食を終え。のんびりと中庭で掃き掃除をしていると、集めたばかりの落ち葉を蹴散らすように姫が中庭へと現れた。

空を飛んで現れたか、はたまた一階から飛び降りたのか、どちらにしても、着地時の風圧で落ち葉は再び散らばってしまった。

魔王がため息を短く吐く中、姫は自分の行動に対して悪びれる様子もなく、淡々と自分が来た目的を口にした。

「魔王、ちょっと買いたい物付き合つてよ」

「お金無いー」

「あらそう。ちょっと待つてなさい」

「??」

魔王が誘いを断ると、あっさりと身を引いた姫。

些か疑問にも思ったが、きっと自分以外の誰かを代わりに誘うのだろうと思い、特に深くは考えなかつた。

十分後。

再び落ち葉を集め。それをビニール袋に入れたところで、またし

ても姫が現れる。

もしあと一分。落ち葉を片付けるのが遅ければ、先ほどの一の舞になつていただろう。

魔王は少しだけ安堵すると、姫の方を向いた。
姫はなぜか足元を見ると、悔しそうに「ツチー」と小さく舌打ちをした。

「貴様！ 先ほどのは行いは確信犯だつたのか！？」

ビシッと姫の方に籌あうひを向ける魔王だったが。姫は気にしてた様子はない、黙つてポケットから白い封筒と（魔王の）通帳を取り出した。

「付き合いなさい」

「貴様！！ どれだけ俺様に買い物を行かせたいのだ！！ しかも何故俺の通帳を持っている！！

更には暗証番号まで知つているとは……！」

驚く魔王に対しても姫は平然と「中ボスに訊いたら教えてくれたわ」といい、魔王に出かける用意をするように急かした。

「だあああ！ 分かった、分かったからローキックはやめろ……！
買い物にはついていく。だが、一体何を買いに行くとこうなのだ？」

「本

「アマ ンで頼め！..」

「嫌よ本一冊買うためにア ゾン使つのは！」

梶包の段ボールがデカ過ぎるのよー 減るどころか溜まる一方よ

！！

それと、私がほしいのはそこでしか売つてないのよ

「あ？ なんだ？ 無 正工口本か ブハッ」

「そんなもの私が買うはずないでしょー！ アンタの顔に修正掛け
てあげましょーうかー！？」

そんなこんなで、結局魔王の抵抗虚しく、引きついだれるよつて魔王
王城を後にした。

「ドフ もんじゅあるまこし、ネズミー因にベビーリなこでよ…

「び、ビビッてなんかいなーぞーー！」

「足をフルフルさせておいて、よくもまあそんな言い訳できるわね」

そんな不毛なやり取りをしていくと、突如、露店の店主が姫に声
をかけた。

「そこの綺麗な御嬢さんー！ ちよひと見ていいかないかい？」

「え？ 私？」

「……真っ先に反応したな（小声）

「なんか言つたかしら“魔王様”」

「き、貴様！－－ これ見よがしにその名で呼ぶな！－」

人懐つこそうな顔をしながら店主は、ピクッと反応した姫にそり
に言葉を投げかける。

「御嬢さんにあつと似合つものあるよー！」

優雅で気品溢れ。高貴でみやびな貴方にこの子達も買つてほしうだ！！
どうだい？ 一つ買つていかないかい？」

「うわ！！ 金の為だと言つても。これほど“嘘”を並び立てるとは……凄まじグヘッ！！」

魔王の鳩尾に姫の拳が食い込み。カエルを潰したかのような声が魔王からひねり出た。

「ほらね。見てる人は見てるものよ。アンタの目が高性能な節穴だから分からぬだけよ！」

「高性能な節穴だと……？ セイゼイ“低性能”な節穴だ！！」

「“節穴”の方を否定しなさいよ…………」

そんな事を言いながら、露店の前で、品物を呑く姫。

「…… うーん、どれがいいのかしら」

魔王は姫が見ている品物へ視線を流した。

(！？ なんでこんな物を大通りで売つてるんだ！？)

姫が見ているのは、女の子らしいアクセサリー類では無く刃物武器を見ていたのだ。

武器を指差しながら、姫は魔王の方を向いた。

嬉しそうな顔をする姫に魔王は引き攣つた顔をしながら、次の言葉を待つた。

「ねえ魔王、アンタ。殺されるならどの武器がいい?」

「お前……誰が好き好んで『ああ、どれどれ。うーと。殺されるなら』の武器がいいかな~』とか選べるか!!!」

「何よ。どうせ殺されるなら、なるべく痛くない武器を選ばせてあげるとか、人道的じやない?」

「まず最初に、殺される相手に。死に方を選ばせる時点で、『非

人道的だ!』

「よし、これに決めたわ。すみません。これ下さい」

姫はそう言いながら ハスカリボルグ と書かれた、武器を取り。それを買つた。

「なんだその凶悪な武器は!?」

「かわいいでしょ?」

「お前がそれを持って、俺様のところに来た時は、『殺される』と思えばいいのだな!?」

姫は嬉しそうに、武器をポケットにしまい込むと…… 何処にしまい込んだ!?

奇怪な武器は、いつの間にやら姫の手から消えていた。

「それで、あとは何を買えばいいの?」

姫の言葉に魔王は思い出したように、しまってあったメモを取り出した。

そこには中ボスから依頼された買い出しや、小ボスや妹から頼まれた物もあった。

「えーと何々。中ボスは……『仮の御石の鉢』と『蓬萊の玉の枝』。

“火鼠の裘”^{かわいのも}……アイツはかぐや姫か！？』

魔王は中ボスから渡されたメモを破り。『//箱へ投げ捨て。残りのメモを取り出した。

「ふう、気を取り直して。妹はつと……

“裸執事”

魔王は一息吐き、少しだけ落ち着き。

そして、目をカツと開き「B」ゲームかよーーー？」と言しながら、メモを地面に叩き付けた。

「相変わらずね、ブレないわね、あの子」

「ああ……」

妙にリアルな注文だな、と内心複雑な思いをしながら。仕方ないので妹の願いは叶えておく事に決めた魔王だった。

今度こそ、と魔王は言いながら、小ボスから渡されたメモを開いた。

ドラゴンボール（ナメック星バージョン）。

「何処で手に入るんだよーー！」

「ナメック星のドラゴンボールって……確か、願いを三つまで叶えてくれるやつよね？」

嫌に欲深いわね……」

魔王は少しだけ疲れた顔をしながらも、メモがもう一枚ある事に

気が付いた。

「ん？ これは誰のだ？ 中ボスからのか？ はは、どうせかぐや姫の続きで“燕の子安貞”とかなんだろ？」

魔王はそう言いながらメモを開いた。

「ララゴンレーダー。」

「ぐぬぬ、中ボスと小ボスめ……貴様らは…… タッグ組んで俺様を馬鹿にしてるのか！？」

はあはあ、と肩で息をする魔王。

最初から最後まで、まともな注文は何も無かつた。

「あれ？ 魔王。」の魔王続きが書いてあるわよ。
えーと。あはは、『魔王 馬鹿（笑）』って書いてあるわよ

「返答まで予測済みか！？」

結局、妹には目的の物。中ボスには調理器具を、小ボスにはゲームソフトを買ひ。

無事に魔王と姫は帰路についた。

おまけ。

王室では、魔王がモーニングティー（昆布茶）を片手に新聞を読

んでいた。

そんな魔王の姿を見て、姫が何気なく話しかけた。

「アンタでも新聞を読むのね」

「当然だ。欠かさず毎日読んでいるぞ」

偉そうな態度で「魔王たるもの当然だ」と言いながら、新聞のページ一枚めくつた。

だが、明らかに新聞を持つ手が震えていることに姫は疑問を感じていた。

そんな中、中ボスが王室に入ると、魔王が持っている新聞を覗き込み。どのページを見ているのか確認すると突如口を開いた。

「魔王様。今日の四コマ漫画、読み終わったのでしたら早く私に下さい」

魔王は静かに新聞を中ボスへと手渡すと、気まずそうに顎を搔きながら、姫の方を見た。

「…………あはは」

「『あはは』じゃないわよ……」

たまに真面目なところを見せたから関心したのに、やっぱついついうオチだったのね……！」

そのあと、激怒した姫にぼこぼこされた魔王は、後日からは海外新聞である

ニュース・タイムズ を読んでいたが、傍からは見栄つ張りだな、と思われる中。

姫が隣にいる時に、ぼそっと「（英語）読めない……」と口にして、

姫に大笑いされたのはまた別の話。

第十五話『姫と魔王、一人でお買い物のー?』（後書き）

オチが思いつかない 小ネタで誤魔化す 誤魔化しきれてない。

第十六話『フラグ乱立！？』

第十六話『フラグ乱立！？』

魔王城 王室には現在、魔王城主要メンバーがそろっていた。
姫と中ボス側。

そして魔王、妹、小ボス側で机を挿み、議論を交わしていた。

そして、主要メンバーたちが集まっているのには当然、訳があつた。

今後、魔王城ストーリーの方針を決めるという、大切な議論。

「……えっ？ 魔王様、今なんて言いました？」
「だ・か・ら！！『フラグ』を沢山出せば、話に深みが出ると思
うんだよ」

「沢山出しても回収できなければ、深みを出すどじうか、中身のな
い話になるだけじゃない？」

姫や中ボスが『フラグ立法案』に反対し、魔王を中心に妹と小
ボスが推進側となっていた。

「『フラグを立てる』って言つても具体的に何をやるのよ？」
「ふふふ、よくぞ聞いてくれた、では心して聞くがいい」

姫に指を指し、魔王は妹や小ボスに視線を送り、一人もそれに頷

いた。

「人間共も、まさか国王と魔王俺様が手を組み、世界を滅ぼさんと、画策しているとは夢にも思つまい」
「魔族と人族を生贊に捧げ、天国への扉ベウンズ・ドアを開ける。そして、私たちは 神 となるのよ」

魔王や妹が気味の悪い笑いを浮かべ、姫は「えつー? なに、なんか始まつたの!?’と齷齪あくせくしていた。

「志半ばで死んだ、 中ボス の為にも、この計画は必ず成就させねば」
「ええ、亡き、中ボスの為にも」
「まさか タンスの角に小指をぶつけて即死 とは、だれもが予想しませんよ」

悲しさに頭が暮れる。そしてなぜか死んだことになつている中ボスは何ともいえない顔で呟いた。

「私、死んでるんですか……しかも物凄い無様じやないですか……」

「そんな中ボスが死んでもう一回……俺たちもそろそろ悲しみから立ち直り、前に進まねばな……」
「切り替え早すぎません!?’
「そもそも、タンスの角から移動しなきやね……」
「まさかの現場放置!?!?」

「ですが、姫ちゃんが一部の魔族や人族を引き連れ、魔王様に反旗を翻し、魔王城攻略準備をしていると聞きます。

数は少ないですが、勇者でも選りすぐりの精銳揃いと……

「あれ? 意外に王道ぽくなつて来たのね」

「あの程度の力で俺様に逆らうなど、片腹痛いわ。ついに本来の力に目覚めた俺様の前では、どんなものも敵ではない」

「おにいの計画はもう誰にも止める事は出来ない……」

「そうだ……ついに成就する。ヘヴンズ・ドア によつて開かれ
るのだ。一次元世界への扉 アーチス が……！」

「一次元に行きたいが為に、全種族を生贊に捧げるつて……私が
反旗するわけね……」

「そして、後日」

魔王がそんな事を言いながら立ち上がる。

「ついに開くぞ！ 一次元 への扉が……！」

両手を広げる魔王、しかし、その魔王の顔色が急に変化する。

「くつ！？ こんな時に！… まさかあの時『取込んだ』もの達が
俺様の体で暴れていいるのか！？」

「魔王様、まさか！？」

「そうだ……あやつめ、最後の最後で我に歯向かうつもりなのか！？」

？

「おにいが倒れたら、この計画が！？」

「妹ちゃんもノリノリね……」

「魔王様が『取込んだ』日に食べたあの 芋けんぴ が体内で腹痛

暴れて

いるですね！？」

一同「…………」

(芋けんぴって……魔王、アンタ。最終的に芋けんぴが世界を救うの！？)

(先ほど『中ボスがタンスの角で』のくだりから、アイツがやけにキラーパスばかり飛ばしてくると思っていたが、ここにきて分かつた。 確信犯だ！！)

(というか、すでに『フラグ乱立』云々と書つよつ、完全にストーリーを構築していると思うのですが)

魔王と姫、そして中ボスを交え、秘密会議が行われる。

キラーパスを放つて張本人は気楽そうにドクター・ペッパーを一氣飲みしていた。

「ゴホン！…………やり直し……」

魔王の一聲に、小ボスを除く皆が同意した。
そして今度は、全員参加で開始する。

「姫がまさか『魔王の血族』だったとはな」「ええ、私もアンタが『兄』だったなんて、予想もしてなかつたわ」「そして、宇宙誕生の中心にして、すべての力の根幹が『シャドーモセス島』にあつたなんて思いもしませんでした」

『…………』

(なんか物凄い情報が飛び込んできましたよ?)

(何その、シャド何とか島つて?)

(^{スネーク}大塚が潜入したところだ)

(え? 誰よ!?)

「 そうすべてはシャドーモセス島で始まったのだ、『あの時』の戦いからすでに一週間が経った……」

「あの戦いで、我々はすべてを失いましたからね……魔王様を『魔王』と呼ぶのも私達だけになりましたね……」

「おにいがあの時見せた『あの力』……あれをまた発動させられな

いの?」

「あれは易々と使っていい力ではない。あれは『世界を終わらせる』力だ。安易な考へで使えば俺たちどころか、世界すら壊す……」

「魔王様が放つた大禁忌なる古代魔法…… 終末術式 芋けんぴ

」

一同(す)ぐに無茶振りいいいい!-----!(.)

爛々と輝く目で、キラーパスを放つ小ボス。

当然、そのパスを受けたくない者は、自ずと小ボスから視線を逸らした。

「ですが、『世界中の食べ物を芋けんぴ』に変えるといつ、あの魔法……魔王様はどこで覚えたのですか？」

「（キラーパスの行く先は）俺様かあ！？……ああ、あの技は『芋けんぴ』の王である。大学芋王から教えてもらつたのだ」

（苦しい、いい訳ね）

（ですが姫様、正直、どのような言葉を並び立てよひとつも、あの無茶振りには対応できないかと……）

「だけどそんなおにいの力でも、『アイツ』には遠く及ばなかつた」「だが妹よ、あの時ッ」「芋けんぴ……」「…………クツ」

すかさず『芋けんぴ』と叫んだ小ボスに若干たじろぐ魔王だったが、すぐさま対応してみせる。

「…………そう終末術式『芋けんぴ』が完璧に発動していれば『奴』も無事では済まなかつただろう」

（あぶねえ……またしても小ボスの、謎の『芋けんぴ』押しが来たぞ……）

（おにい、ナイス！）

「おにいが『世界を終わらせる力』を持ち、姫には大鎌には『世界を創造する力』。この二つの力で世界を作る……それがおにいの世界一^{アーネス}次元化計画…………これが成就されれば、世界中が平和になる」

「ああ、それにはまだ足りないものがある。願いを叶えると呼ばれる『賢者の』」「芋けんぴだね！…」

一同（賢者の芋けんぴ！？）

（それは賢者専用のおやつなのか！？）

（とりあえず魔王様には縁のないおやつですね……）

（芋けんぴが何か分からなくなってきたわ……）

（おにい、もう私帰りたい……）

「…………はあ。…………解散――――」

小ボスは「ほんとにあるよ」とふざけたことを主張していたが、当然皆はその言葉に耳を貸すことなく、王室を後にした。

五日後。魔王自室にて。

小ボスは魔王の部屋をノックし、魔王も入るようになると返事をすると、
小ボスはドア少しあけ。
顔を少しだけ出した。

「魔王様。『賢者の芋けんぴ』ります？ 軽い願いなら六十回。
袋丸ごと使えばどんな願いでも叶いますよ？」
「ハッ！？ はは、さては俺様を担いでつと皿つのだな？ そんな物
は存在しないに決まってる！」

小ボスは袋から芋けんぴを一つ取り出すと「ドクターペッパーが

まし」と言ふ。

手に持っていた芋けんぴは瞬く間にドクターペッパーに変わった。

「……」

「あと五十九本か…… まだまだ飲めるね」

小ボヌはその二〇ドア、籠の部屋のドアを開めたり。

唖然とする魔王だったが、我に返り、すぐにドアを開けるが、すでに小ボスの姿はなかつた。

「えっ！？ はあ！？ あ、あ、！？ どういう事だ！？ おい待
て小ボス！ 僕様に袋ごと寄越せ！！

第十七話『珍獣現る！？』

第十七話『珍獣現る！？』

「ペツトが欲しい」

「ほすようにして、そう呟いた魔王。
明らかに『また何か言い出したよコイシ』と言いたげな目が魔王
に集まる。

現在王室には、姫と妹しか居なかつた。

中ボスは魔王に代わり、一度魔界の元・魔王方に定期報告を行ひ
に。

暇な為か、最近始めた“バイト”とやらに小ボスを行つてゐるら
しい。

姫も妹も渋々ながら手に持つていた本を置くと、仕方なく魔王と
話す態勢になる。

妹が読んでいた本には　快感！！　気になる彼をBの世界へ
落としちやえ

と、何ともおぞましいタイトルが書かれていた。

だが、それ以上に気になつたのは。

拷問！！　気になる彼を奈落の世界へ落としちやえ

姫の持つていた本に魔王は戦慄せんりつを覚えた。

(.....)。気になる彼.....俺様じやない事を祈ろう(

心が悲鳴を上げる中。魔王の言葉に一人が返事をする。

「どんなペットが欲しいの？ やっぱり『犬』とか『猫』？」
「魔獣召喚じや駄目なの？ おにいなら、神獣クラスでも呼びたせるんじゃないの？」

近い。 |

唸るようにして、自分の欲しい“理想”のペントを描く魔王。

「猫にしよう、ネコ。可愛いし、ポピュラーだし。テンプレだし。普通だし。書きやす
いし。もつ何かと都合がいい」

「迷つてたわりには、結構あつさり決めたわね」

「おにいはネコがいいの？ それならつてがあるから私に任せて」

面倒が嫌いな妹にしては珍しく、自ら厄介事を引き受ける。少しだけ不安にもなりながらも、特に知識の無い魔王は素直にうなずいた。

「へーイベイベー……どうしだんだ浮かない顔して……！」

「ママの焼いてくれたチョリーパイが不味かったのか??」

「……ネコ?」

「見た目はネコね」

「かわいいでしょ?」

何だかんだ妹に任せると碌な事がないのでは? と内心思つていつが、妹は一時間もしないうちに、何処からかネコの入った段ボールを持つて帰宅した。

そこに居たのは、白い毛並みのネコだった。
子猫とはいからまでも、まだ大きくなつたばかりの若いネコだつた。

何故か自己紹介をするように妹が言つと、突如喋り始めたのだ。
普通にしてればネコにしか見えないが、人と同じ言葉を喋るネコと言つのは魔王も見るのは初めてだった。

ネコを飼つ時、どんな名前にしようかと、色々と思いを巡らせていたが、一気に萎える魔王。

そんな魔王の気分を野生の感で読みとつたのか、ネコ? が喋り始める。

「どうした? 僕の可愛さに身もだえしているのか? ふふふ、もつと愛でるがよい!」

そう言いながら、珍妙不可思議な喋るネコは魔王にフワフワで柔らかそうな腹を見せながら、「ゴロゴロと床を転げ回つた。

確かに見た目は愛らしげのだが、それ以上に、“喋る”ところが不気味である。

「どうしてこのネコは喋るのだ? 何かの魔法か? 一時的に言つ

ている事が解る魔法なら知つていいが。

ネ「自身が、人語を喋る魔法なんぞ、知らんぞ」

魔王は妹にそう訴えながら、ネコを指差した。

姫は物珍しそうにしながらも、“触りたい”といつ欲求を抑えられないのか、

喋るネコのお腹を緩みきつた顔で、サワサワと撫でていた。

「いいえ、この子は始めから喋るみたいなのよ、知り合いの人も不気味がつてた見たいだから、折角の機会だから貰つて来た。どう？ 可愛いでしょ？」

確かに可愛らしさはあつたけど、それ以上に……。

「どうした？ 僕を飼う決心がつかないのか？ 何がお前の決意を鈍らしているんだ？」

食費か？ 大丈夫だ。俺はネコ以外だつたら何でも食らひついで……いや何も無いのなら食つた事はねえけど、ネコだつて食らつてやるぜえ

器用にも肉球をこちらに向けながら、招き猫のように手を振り、愛嬌を振り撒いていた。

「ねえ魔王。それで、どうするのこのネコ。喋るのは確かに不思議だけど、それ以外は普通よ。

飼つてもいいんじゃないの？」

姫がネコの首筋をなでながら、そう言った。

ネコも気持ちよさそうにゴロゴロとノドを鳴らしながら「話がわかる人間だなアンタ！ 生憎、胸はちと小せえが。口口口はでけ

えなー！」と、姫を褒めた？

「待て待て！……いくら悪態吐いたからってネコの首を絞めるのは色々と不味いッ！…」

喋るネコの首を絞めている姫の腕を強引に振りほどこうとする魔王。

既に首を絞められているネコには意識がなく、口から泡を吹きながら、白由を向いていた。

「ゲツボ、ゲツボ！……外道！ 非道！ 悪鬼！ 極悪！ 下郎！ 脣！」

「こんな愛らしい俺によくもこんな事ができるもんだ」

文句を言つネコに対して姫はひと睨みくれてやると、すぐさま「ヒイ！」と言いながら魔王の後ろに隠れた。

魔王も、まるで自分を見ているようだ。と内心近ishuする感じながら、同情を寄せていた。

「それで、この氣色悪い喋るネコは何処の保健所に持つていけばいいの？」

「さつきと言つてる事が真逆だな。器の小さい奴だな、だから胸も小さッ いてててててッ」

姫の手のひらが魔王の顔面に近付き、アイアンクローバイケレットが炸裂した。万力のような力で絞め付けられた魔王は、激痛に顔を歪めた。

「私が連れてきとこで言つのはなんだけど、今更捨てるのはちよつとどうかと思うわよ。

とにかく名前でも付ければ愛着も湧くはずよ

フォローするようにして妹が言つた。姫は短く「非常食。あるいは“肉”とかにしましょ」と言い、非常食だと言われた当“猫”も青い顔をしながら「えらい所に来てしもつた」と言いながら、頭を抱えていた。

「とりあえず、ネコだと可哀想だし。“ハチ公”とかでいんじゃないか？」

「魔王、アンタそれ《忠“犬”》よねそれ！ 犬じゃない！！ 余計に混乱するわよ！」

「山猫リシクスとかいんじやないか！ かつこいし！ 駄目なら鴉レバガでも」

「駄目よそんなの！」

「御堂みやうさんがない。名前は孝典たかのりで！！」

「なんだかよく分からぬいけど、妹ちゃんに決めさせりゃいけないつて事だけは分かつたわ」

姫の言葉に頬をぶくーと膨らませながら拗ねる妹、そんな妹は反撃とばかりに「じゃあ姫は何かいい名前が浮かんでいるのよね？」と投げかけた。

「ん？ 猫でしょ？ なら名前も“ネコ”でいいじゃない」

「「愛着わかねえよ（な）わよ）……」

妹と魔王が同時にそういうと、姫は「うーん」と唸り。やつとの

「ことで眞面目に考え始めた。

「“野田総理”とか、偉そうな感じでいいんじゃない？」

「あのな姫。今は良くとも、一年後とかに“元”総理つて付けなきやいけなくなることを考えると却下だろ。」

あの国はコロコロ総理を変えるからな、あれはただの民衆の非難を浴びるための的だ

「おにいおにい！ “シユレディンガーの猫”とかいいんじゃない！？ 生きてるか死んでるかが分からぬといつ、儂げな存在感が漂つて！」

「待て待て！！！ これじゃあ埒^らが明かない。

「ここの“ネコ”自身に決めてもらおう。せつかく喋れるの

だ、自分で決めもらひつてもよから

魔王はそういうと、姫も妹も渋々従つた。三人の視線が猫に集まつた。

「そうだな、俺の事は“主人様”とでも呼んでくれ

その後、三人からボコボコにされた猫は、結局、名前がネコで満場一致した。

第十七話『珍獣現るー!』（後書き）

新キャラですよ、新キャラ!!

基本的な立ち居地は、魔王と同じなヘタレです。

第十八話『この城の“主”って誰だったけ…?』（前書き）

ひとつひとつもよみがえります（一・七倍ほど）

第十八話『この城の“主”って誰だつたけ！？』

第十八話『この城の“主”って誰だつたけ！？』

中ボスが調理場で、朝食の準備をしていると、突如、《人語を喋る》ネコと出くわした。

魔王様達からは、新しく“ペット”を飼つたとは、聞いていたが、“喋る”とは一言も説明を貰つていなかつた。

「……全ての猫が“ねこ缶”好きだと思つなよ」

「はあ、そつなんですか。失礼しました……」

可愛らしい声で足にすり寄り、餌を強請つたかと思えば、今度はそれが気に入らないと“言われた”のだ。

そんなネコに対して、些か不満に思いながらも、小さく頭を下げ、非礼を詫びた。

「お前といい、魔王達といい、昨日の昼も《ねこ缶》。夕食も《ねこ缶》。これじゃあまるで“猫”じゃないか」

中ボスは心の中で「猫ですね」とツッコミを入れたかつた。だがしかし、このネコに対して、中ボスは今まで面識もなく、扱い方や対応の仕方に困惑していたので、特に何も言わなかつた。

「おいお前、聞いているか？お前“召使”とか下男とかだろ？俺はなあ愛玩動物だぞ？俺は仕事は主に愛嬌を振りまく事。お前は仕事は雑務だろ？」

なら俺に黙つて従うのが筋つてもんだ」

「ああ……はい、わかりました……。では私は貴方様に一体何を出したすれば宜しいのですか?」

「おいおい、俺は“猫”だ。猫と言つたら食べる物は当然“ネズミ”だろう? トムとジェリーとか見ないのか?」

「(あのアニメでは実際に食い殺す描写はないですが……)……分かりました。今準備するので少々お待ちを」

中ボスは業務用の大型冷蔵庫から、冷凍マウスを一匹取り出した。ちなみにこの『冷凍マウス』は城の庭師こと『シザーマン』の“おやつ”だが、一匹くらいは貰つてもいいだろうと思ひ、取り出した。

その冷凍マウスを魔法で瞬時に解凍し、そしてお望み通り、ネコの前に置いた。

大きな皿に解凍したマウスを置くと、先ほどまで『ネズミを寄せ』と騒ぎ立てていたネコが血の氣の引いた青い顔で沈黙していた。

そんな顔色の悪いネコに対して、不思議に思つた中ボスは、皿を少しだけネコに近づけた。

するとネコは「ひい!!」と怯えたよつた声を上げ、ネズミから遠ざかつた。

「あの……食べないんですか?」

「(ホントに出てくるは思わなかつたぜえ……)あつ……ああ……食べるとも。そつ……俺はネコ……俺はネコ……」

皿に盛つたネズミを前にして、ネコは自己暗示を掛けるように幾度も「俺はネコ」と呟いていた。

まさかと思い、中ボスは皿を少しだけネコから遠ざかるとネコも「ふう」と安堵するように息を吐いた。

そして再びその皿をネコへと近づけると「ひい……」と飛びのきながら後ろに下がった。

そんな反応が面白くて、中ボスはネコの前で屈み、柔軟でやわらかい笑顔で

「食え、食え、食え」と丁寧よくネコの前で手を叩きながら『食べ』『ホールを開始した。

「お前見かけにひびく、相当外道だなーー！」

その言葉に中ボスは笑顔を凍らせ、そして冷え冷えとするような低い声で小さく「黙つて、食え」と言い放ち、ネコは「ひい……」と恐れながら調理場を走り去つた。

「虚ろな乳と書いて、虚乳。つまり事を言つやつも居るもんだ」
王室で真・魔王神宮の画面を見つめながら魔王は呟いた。

当然、姫の前でこのよつた事を呟きでもすれば、即座に 鉄拳制裁 裁が執行される。

しかしながら、（自称）頭脳明晰、魔王様！！ からの俺様は、姫がこの王室に居ない事は確認済みだ。

そんな事を考えながら魔王は、アニメキャラが描かれたコップに

注がれたぬるくなつた珈琲を飲み干し、再び真・魔王神宮と向かい合つた。

「ん？ 何々？？ 『巨乳より美乳だろ』K ふむ真理だな。
『結局美人だったらどんな乳だつていんだろう？』 まあ確かにそ
うだな」

「私はどうなの？」

「あ？ なんだ“姫”か。まああれだな、姫は乳が大きい小さい
以前に、“暴力的”ってどこがすべて黙黙にしてるよな」

「じゃあ“暴力的”じゃなくなつたら？」

「うーん、それはそれで“キシヨイ”」

「……『キモイ』とかじやなくて、『キシヨイ』ですつて？！」

「げえつ 関羽！？ ジャなかつた！！ げえつ姫！？ 貴様いつ
の間に！？」

魔王は、画面から目を離し、背後に居るであらひ、声の主に向かつて振り向く。

そして、背後には、手でチョキを作り、思いつきり目潰しの体制で待ち構える姫の姿があつた。

「さあ、アンタの罪を数えなさいッ！…」

姫のひと声の後、断末魔を上げながら椅子から転げ落ちる魔王。床を転げまわりながら、頻りに「目があー目があー！」と叫んでいた。

姫は見苦しく這いする魔王の鳩尾に、止めとばかりに蹴りを（二発ばかり）入れると、ようやく魔王は“沈黙”した。

まるで、物言わぬ死体と成り果てていい魔王をよそに、姫は仕事をやり終えた、清々しく満ち足りたような顔をしながら、ポケットに入れてあつた煙草の箱に似たシガレットチョコを一本取り出すと、煙草を銜えるように口へと運んだ。

「わあーー！　姫ちゃんがチョコ持ってる、ちょーだい！　ちょーだい！ー！」

王室の扉を勢いよく開けた小ボスは、姫の口先にあつた煙草のような物を迷わず“チョコ”と言じ当て、駆け寄った。

その途中、自分の上司であるはずの魔王を踏みつけ「ぐぶあ」
とぐぐもつた声がした事には田もくれず、一直線に姫へと辿り着く。

小ボス、あの子……今、懃々視線を床に落として。
歩幅を無理に合わせてまで、魔王を踏んだわよね？

内心、そのような事を考えながら、姫は黙つて小ボスにチョコを渡した。
遠慮なく、四つ持つていいくところは抜け目ない。

チョコを嬉しそうに頬張る小ボスは、口にチョコを含みながら田線を彷徨わせ、その目線は電源の入ったパソコンに止まつた。

小ボスはパソコンの前に魔王が居ない事に気がつき声を上げた。
「もぐもぐ　はあれ？　まあほほほさまがいまへんよ？」

口いっぱいにチョコを含み喋る小ボスはきっと『あれ？　魔王様
が居ませんよ？』と言いたかったのだろう。
そんな聞き取りづらい声に脳内補正を掛け、話す。

「アンタがさつき踏んだ、『アレ』よ」

姫は“アレ”と言いながら、未だ不動で話すことすら儘ならない魔王に向かつて指を指した。

小ボスは「あー！」と驚きの声を上げながら魔王に近寄り、心配そうに顔をしながら、その手で魔王を支え、上半身だけ起き上がりせた。

部下らしい、けんしん 献身的な態度で魔王を支える小ボスだったが、鋭い姫の目は、手にたっぷりとついたチョコレートを魔王の服で拭いた小ボスの行動を見逃さなかつた。

「魔王様！ いつたい誰がこんな事を…？」

「……ツ」

魔王は両手を必死に開けようとするが、激痛で両方とも開かなかつた。

仕方なく、先ほどの会話を頼りに、力の入らぬ指で、音源を辿りながら、一人の人物を指差した。

「姫ちゃんですか！？ これはなんでも酷すぎますよ…！」

いくらい、魔王様がどうしようもないくらい

『生きてる意味も無く』『誰からも必要とされず』『それでも沢山の植物や動物を食べる事で抜き長らえて居る』
ような肩でも、酷すぎます…！…

「ガハッ！」

「うわつ汚いなあ～。魔王様、血を吐くなら、『吐く』って言つてくださいよ！」

「…………外道（小声）

「姫ちゃん何か言いましたか？」

「いえ、何も」

「くそ、なんだあの召使は！？ デケエ城に住めたと思ったが、凶暴貧乳女の次は、鬼畜眼鏡。モンスターハウスかココは？」

ぶつぶつと文句を言いながらネコは一人廊下進む。
そして、王室の前を通ると足を止めた。何やら中が騒がしい。
疑問に思ったネコは少しだけ開いていた扉を、前足で押すと、中に入った。

「あれは、我が主ではないか」

小ボスに抱きかかえられた魔王、それを椅子に座りながら横目で見つめる姫。

何やら言葉を交わしたいようだったが、それを聞きとる事は出来なかつた。

仕方なく、あの“凶暴貧乳女”の居る部屋へと足を進めた。

「あつ！？ 猫ちゃん！？」

突如現れたネコに対して、小ボスは慌てて近づく。小ボスと言う支えを失った魔王は重力に引かれ、なすすべもなく、頭を大理石の床へと叩きつけられた。

「ゴンッ」と鈍い音が響いたが、それを小ボスや姫は気にする様子は

ない。

「ベツチヨベツチヨの手で俺に触るなー！ 血とチヨコレートの口ラボレー ションですげえ粘度になつてるぞー！」

「うわつすごい喋る猫だ！？ えつどうしてなの？ 蝶ネクタイとかでも付いてるのー？ バー口つて言つてー！」

「はいはい、バーロバーロ。これで満足か？ ならひとつ離せクソガキ」

この子かわいげない、と言いながら小ボスはネコを両手から解放した。

白色の毛が一転、赤色と茶色の物体で、汚く着色されてしまった。そんなネコに姫は黙つて小さめのタオルを渡すと、ネコも素直にそれを受け取り。

前足を使って器用にも体に付着した物体を拭き取つた。

「だからガキの相手は嫌なんだ」

「それでアンタ。何しに来たの？ さつき『ねこ缶は嫌だ』とか言つてなかつた？」

「お前が厨房に言えば他の食べ物にありつける、とか言つたから言つて來たぞ！ まあ結果は散々だつたが……」

「あれ？ 中ボスに会わなかつたの？」

「ん？ あの燕尾服えんびふくに割烹かっぽう着の、変な召使の事か？」

「会つたんじやない。それで、何か出してもらえなかつたの？ 彼は魔王とか以外なら、普通に丁寧に接してくれるはずよ」

「ああ、最初は丁寧だつたぞ……」

なぜか言い淀むネコに追求せず、姫は小ボスの方に視線を流した。

あれ小ボスが居ないわ？ まあそろそろ朝食の準備も整つ頃です

もんね。

「ネコ、アンタは魔王を起こしなさい。朝食に遅れるわよ」

「あ？ 僕にも違うものがでるのか？」

「まあ何だかんだで中ボスは優しいわよ、期待してもいんじゃない？」

？」

その言葉にネコは嬉しそうに姫の周りを走り回った。それを見て姫は「これじゃあ、まるで犬ね」と微笑んだ。

本来であれば楽しい食卓。

テーブルを囲む皆の中に、訝しげな表情を浮かべる者が一人。いつもであればテーブルの端　末席であるまづの魔王が、なぜか上座の席に座っていた。

それに対して誰一人ツッコミを入れる者も居ない。

各席の前に、名前に入ったプレートが置かれているのに気がついた時から、魔王は何とも言えぬ、嫌な予感がしていたが、この予感は的中することになる。

なぜか、料理は末席の方から配られ、この様子だと、魔王に料理が運ばれるのは最後。

嫌な汗が魔王の背中を静かに撫でる。魔王の前に料理を配られたネコは、魚を中心としたフレンチ料理が置かれ、ネコは大喜びで、ナイフとフォークを持った。

アソブ、人間以上に器用じゃないのか？

いやいや、今はあんなネコに構つていい暇はない。次は俺に料理

が運ばれて来る番だ……

「グロテスク！？ えつなここれ！？ ネズミ！？ ？」

「『ドブネズミのホワレ、トマトのピューレ添え』です。おにじい
ですよ、食べたことはありませんが」

魔王の前に出された料理

ネズミの皮が剥がされただけの原型残るネズミを蒸し焼きにした
だけの料理にしか見えなかつた。

嫌なことに、さうにそのままアヒートソースが掛かつていて、それ
が『血』を彷彿^{ほうふつ}とさせる。

料理人の悪意と憎悪を見事に表現している、まさに究極の料理と
言ひつけ。

「…………主、すまん」

ネコは向やうひきつけて、一心不乱に自分の料理を食いついた。

絶望に染まる魔王。気持ち悪い料理を目の前に茫然とする魔王の
耳に、何やら声が届く。

「…………え…………？」 「…………え…………？」 「…………え…………？」

『…………え…………？』 何のことだ？ ここつらひ何を言ひつい
るんだ！？

皆が口から同じような言葉がこぼれる。

魔王は必死にその言葉を聞き取るが、だが脳がその言葉を
拒絶する。

「……えー」「えー……」「……えー」「……つえー……」「……えー」「へ……えー」「へ……えー……」

「……えー?」

魔王を包む『食え』ゴール。まさに狂喜の宴。悪魔たちの集い。事の原因である“ネコ”は涙ながらに『済まねえ主あい』と何度も呟く。

そんな中、魔王は唇を噛みしめ、頭の中で同じ言葉を頻りに唱える。

俺様は食べない……！　ネズミなんて食べるもんか……！
空氣読めない奴と思われても構わない……！　食べない……！
絶対に……食べないぞ！

「俺様は食べないぞおおおおーー！」

『アンタが、食べるまで、殴るのをやめない』って言ったから？

「……」

姫の一言で魔王の決意は揺るぐ、いつも容易く揺るぐ。
優柔不斷な人物より、簡単に決意は崩れた。

「…………俺様は人間をやめるぞ！ 姫えええええーツー！」

魔王はその言葉を最後に、一気に料理を口へと流し込んだ。

「…………おええええええええええええ」

この後、朝食は更なる悲劇を遂げ、散々な朝食になってしまったのは言うまでもない。

第十八話『この城の“主”って誰だったけ！？』（後書き）

城の主は今は“姫”ですけど、かと言つて少なくとも魔王が一番下
つ端つて事は無いよね？…………無い…………よね？

第十九話『支持率を維持せよ…！ 魔王様（ラジオ）演説！？』

第十九話『支持率を維持せよ…！ 魔王様（ラジオ）演説！？』

中ボスが何やら重要な報告があるとの事で、昼食後、魔王令めた
いつものメンバーは王室へと集合していた。

そして、中ボスが口にした言葉に、全員が驚いたような顔をした。

「は？ ラジオ収録？」

「アホ面丸出しのリアクションひとつもありがとりござります。
ええ、今言いました通りラジオの収録をやります」

ラジオ収録？ やっぱりラジオって言えばあれか？

みんなで話したりするのを公共の電波に乗せて配信するアレの事
か？

皆、内容はある程度分かる物の、いざ『ラジオ収録』と言われて
も何が何やらと叫んだ表情を浮かべていた。

「何で私たちがラジオ収録なんてやらなきゃいけないの？」

「姫様、それはですね」

中ボスは矢継ぎ早に説明を開始する。

話は至つて簡潔に伝えられた。簡単に言つてしまえばこいつだ。

「まへ、つまりは民衆への『機嫌取りみたいなもんなんだな？』

「理解力の乏しい魔王様にはそのくらいに思つていただければ十分です。

とにかく、今は魔王様が人間界に遠征し、魔界に“魔王”が居なくなつて丁度一年。とても微妙な時期なのです。

ですから、国民の支持を得るためにも、ここは魔王様自ら『ラジオ演説』と言つわけです」

「ねえねえ中ボス。演説つてどれくらい影響があるもんなの？」

「小ボスが聞きたい事と言つのが、収益と言つ意味でしたら、演説によつて発生する収益はそうですね……。

今まで魔王城に常駐させていた軍事力を、二ヶ月ほど維持出来るくらいのお金を集める事が可能です。

現在の魔王城が一ヶ月に使つている金額で考えますと五年は遊んで暮らしても大丈夫なほどですかね」

『五年！？！？』

なぜか“五年”遊んで暮らせるとつぶや葉に全員の目の色が変わる。

H口ゲ買い放題の生活ができると、魔王は嬉しそうに叫び。

魔王以外の皆も、各自の欲望を口々に言つ。その光景を見て中ボスもやや呆れていた。

「はあ……まあ兎にも角にも、まずは皆様の協力があつて初めて実現することです。

魔界全土に私たちにラジオが流れるのです。それを肝に銘じて、収録に臨んでください」

最後にそう言い釘を刺した中ボスであつたが、その言葉を眞面目に聞いていたものは誰一人いなかつた。

ため息を一つ吐き、ラジオの段取りを考える中ボスであつた。

魔王城、仮設録音室。

妹 して 「皆のアイドル 魔王 がお送りする。
まおらじ 。はい拍手」 魔王様ラジオ 略

疎らな拍手 + オープニングBGM

妹 「映画、スター ウォー のオープニングテーマ曲でした」
魔王 「壮大過ぎだろッ！」「帝国軍」や「ジエダイ」も出演するのかこのラジオは！？
妹 「ちょっとおにい、私が呼ぶまで喋らないでよ！……えー
ゴホン。進行役は、魔王様の妹である私。そして、『今回のゲスト
』。私のお兄様、魔王様でーす」
魔王 「え！？ 今『『今回のゲスト』』って言つたよな！？ タ
イトルに まおらじ つてついてるのに俺様はゲスト扱いなのか？

!

ドンドン！

妹 「ちょっと机叩かないでよ。なんか一回に分けて放送するから、毎回メンバーは変えるつて中ボスからのお達なのよ」

魔王 「納得できねえ……」

妹 「さつ、おにい……もとい、魔王様の登場で大分盛り上がりつた所で、次のゲストの登場です！」

魔王 「あつ？ 今までのトーク内容の『じに』『盛り上がる』要素があつたのだ？！ いやいや、それよりも、まだゲストが登場するのか！？ もはや、俺様主体のラジオじゃ無いよな！？」

ネコ 「どーもー“吾輩は猫である”で、一躍有名になつた、ネコ でーす」

魔王 「のつけから物凄い大ぼらを吹くな！！」

妹 「飼い主をずっと待ち続けた事で、渋谷駅前の銅像にもなつたほど有名なネコさんをゲストにお迎えして」

魔王 「それはハチ公おおおおー！ あれは“犬”ー！ 僕様が前々回、お前の名前を決める時にボケたのが全ての元凶か！？」

妹 「ネコさんの登場でおにー……魔王様のテンションも上がりっぱなしね」

ネコ 「主は本当に猫好きだなー」

魔王 「はつ！？ いつの間にやら俺様が“ツツ”役に！？！？ 誰の陰謀だこれは！？！」

妹 「では、今回のメンバーが全て集まつた所で、次に移らせて貰います」

ネコ 「わーい」

魔王 「…………」

妹 「えーままずはお願ひ 助けて 魔王様 のコーナーです」

ドラクHのレベルアップ音

魔王 「誰かレベル上がった！？」

妹 「このコーナーでは聴取者リスナーより頂いた、『こんな時、魔王様ならどう行動するの？』と言つた、ご意見に、魔王様自ら答えるコーナーです。ちなみに今回は第一回目なので、ハガキの方は御座いません」

魔王 「なら、このコーナーは中止」

妹 「ですが！！ 今回は特別に魔界の方で国民の皆様に直接！ ！ スタッフが意見を聞いてきました～」

ネコ 「俺の主である魔王様なら、どんな窮地でも脱する事ができるはずだ、難なく答えを出してくれるだろ！」

妹 「では早速一通目。鬼畜眼鏡大好きっ子 サンからの質問です」

魔王 「いきなり濃厚なBボーカライズラブ」の匂いがするぞ……」

妹 「『魔王様聞いて下さい。先月、私の父が不況の煽りを受け。リストラにあつてしましました。そしてそれがショックだったのか、父は次の仕事は探す訳ではなく、毎日家で酒に酔う日々。そんな父を見兼ねた母は、私と弟を連れて、家を出よ～』と言つていますが。ですが、弟は父について行こうとしています。一体私はどうすればいいんですか？ 教えてください魔王様』。以上です、では魔王様。わざわざと解決しちゃつてください！…」

魔王 「重いッツ！！ そんなに重い案件が舞い込んでくるとは考えも見なかつたよ！！」

ネコ 「猫を飼えば万事解決！！」

魔王 「そんなもんで解決するか！！ だがそれにしたつて、重すぎるわ！！ 僕様がおいそれと手を出して良いもんじやないだろつ！」

妹 「父×弟の禁断の愛。萌えるわね」

魔王 「いやもう多くは望まないから、頼むからお前ら黙れ」

妹 「それで、結局どうするのよ、おに……もう面倒だからやつぱりおにいでいいか。つでどうするのにおにい」

魔王 「ええい！！ そのお前のお父さんには、俺様に連絡を寄せす

よつに言え！ 僕様が直接、再就職先を見つけるのを手伝つ！」

妹 「解決」

ドラクエ、セーブデータ消滅時BGM

魔王 「割と正解ぽい打開策出したのに、然も選択を誤つたような気持ちにさせらる曲流すな！！」

妹 「では、次のお便りです」

ネコ 「おう、どんと来い」

魔王 「…………」

妹 「銃を向けられるたび5セント貰つてたら今じろ大金モチだぜ！！ さんからの質問です」

魔王 「すごい聞き覚えのある言葉だな……」

妹 「『魔王様こんにちわ。僕はとある紛争地域に行つています。

本当は“君”と話したかったけど、今はこの魔王様の関係者しか、僕の近くにはいないから仕方がない。彼らが居ただけでも奇跡だと思つよ』」

魔王 「既に嫌な予感しかしない！？ といつも、お前らは一体どこまで質問を貰いに行つたのだ！？」

妹 「『では、魔王様、僕からの質問ですが。味方からの補給も途絶え、連絡もこの三日途絶したままで。ですが上からは、ここで待機するように言われています。しかし、私たちの隊はもう限界です。上層部の指示なしに撤退しても許されま ダニエルが撃たれた！！ 畜生、ここまで敵が侵入して来ていたのか！？」

グバツ』「

魔王 「えつに！？ 今ので終了！？！？ 今、撃たれなかつた彼！？ というかこれは手紙なのか！？ それともボイスレコーダーで録音したのか！？」

妹 「もちろん手書きのメッセージよ。スタッフは便せんに入った手紙を本人から受け取つただけよ。だから『グバツ』込みで書き込んであるわよ」

ネコ 「……血染めの手紙、やつはもつ……」

魔王 「ネコよ、不吉なこと言つもんじやないぞ」

ネコ 「了解だ主、心得だぞ」

妹 「それで、おにい。この人は撤退してもいいの？ いけないの？」

魔王 「……いや、正直な意見としては、俺様がどんな答えを出しても、彼に届く頃には、既に時間が答えを出してるんじゃないかな？」

妹 「…………。解決♪」

魔王 「リスナー、レベルアップしたのか！？」

ネコ 「おめでとう、リスナーの銃を向けられるたび5セント貰つてたら今ごろ大金モチだぜ！！ さんは“ギガスラッシュ”を覚えた！！」

魔王 「強ッ！！ リスナーさん強ッ！！！」

妹 「あっ、もうこんな時間！？ 今回はここまで、次回は中ボスと小ボスのB・L・コンビと、現在の魔王城を占拠している“姫”的三人でお送りするわ」

魔王 「國民に魔王城が人間に占領されてるのばれるうう… といふ今まで十分程度しか録音してねえ！？ 短すぎだろ！」

ネコ 「あとはあれだ。エンディング曲を二十分くらい流すから、きつかり三十分番組だ」

魔王 「露骨な嵩増しだな……」

妹 「エンディング曲は、この曲 大き目の虫の羽音」

魔王 「不愉快過ぎだろう！？ 誰が好き好んで二十分も虫の羽音を聴くんだよ！ 誰とくだよ！？」

妹 「では、次回の放送で会いましょう。せーの」

ネコ&妹「ばいばーい」

虫の羽音 二十分バージョン

自室で一人、今回のラジオに関する書類に中ボスは細部に至るまで田を通す。

しばらくして、ようやく机の上に山積みになっていた書類を読む終わり、一息つく。

関係書類は一通り見たものの。今で部屋の片隅を占領している段ボールの山に対して手を裂ける余裕はなかつた。

「ふむ予想より、大分多いですね」

「何がだ?」

中ボスが段ボールから目線を外し、声の主が居る方を見た。

ドアの半分ほど開け、そこから体を滑られるように魔王が部屋へと入る。

背中でドアを閉め、先ほど中ボスが見つめていた段ボールへと視線を移す。

「ハガキですよ。次回放送分に備えて、番組の最後に告知しておいたんです。

次回のコーナーで使う為の回答などが詰まつたハガキの山です」

「段ボール六つ。これ全部がハガキだと?」

「魔界全土に魔王様の声を届けたのです。ある程度の予測はしていましたが、予想より十箱も多いです」

「は?『十箱多い』?まだあるのか?」

「来るときに気がつかなかつたのですか?廊下にまだ十四箱置いてありますよ」

中ボスの言葉に魔王は再びドアを開け、顔だけ廊下にだし、辺りを見た。

あつた。確かに十四箱。

「はあ……流石にこれを次の放送に備えて振り分けるのは骨が折れます……」

「ファンレターとかもあるのか？」

「ほんとが魔王様宛のファンレターですよ。力がすべての魔界で、魔王様は最強の力の持ち主なんですから。

いつもはこのような手紙は私どもに届く前にすべて返却しているのですが、今回はリストナーからの質問や回答が混じっているだけに、どうも判別が難しいらしく。一応全てこちらに送つてもらいました」

「ほう、どれどれ」

魔王はそう呟くと、一番手前の段ボールを近寄り、ガムテープをはがし、手紙を手に取つた。

「『魔王様、私と結婚してください』普通だな。おつこれも可愛い字だな、なになに。…………『私の物にならない魔王様なんて要らない！！魔王様を殺して私も死ぬ！』…………つわつリアクションに困る」

「ヤンデレも沢山いますよ…………」

「リアルでいると正直引くな…………」

山のような手紙を見つめ、これから訪れる作業に対し、途方に暮れる魔王と中ボス。

その時、廊下の方で叫び声と誰かが何かが倒れた音が聞こえ、魔王達は廊下に出る。

「いたたた……あつ魔王様と中ボス！！」

転んだ拍子に鼻を打つたのか、鼻が少しだけ赤くなっている小ボス。

その傍らには、小ボスが^{つまづ}躊躇^{つまづ}いた　　といつより、激突した段ボ

ル。

小ボスの激突をもろに受けてか、段ボールの中身は至る所に散らばり。彩り鮮やかな手紙が廊下に敷かれた赤い絨毯じゅうたんを染めあげる。

手紙を読むだけではなく、まずは十四箱分の手紙を集めなければならなくなってしまった。

再び魔王と中ボスは途方に暮れた……。

第十九話『支持率を維持せよー！ 魔王様（ラジオ）演説！？』（後書き）

セリフの前に『名前』とか書けないかな～などと考えていたが、ラジオ回とか作れば行けるんじゃないかグヘヘヘと考え作った回。手紙の仕分けが終わればラジオ回第二回目を書きますw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3170u/>

姫の従者は魔王様!?

2011年11月4日16時52分発行